

## II 資料

## Ⅱ 資料

1. 海外研究動向調査
2. RAによる研究動向調査報告書
3. 平成26年度共同研究募集要項
4. みんなく若手研究者奨励セミナー
5. 文献図書資料整備状況
6. 民族学研究アーカイブズの整理作業進捗状況
7. 学術潮流サロン
8. 人間文化研究機構連携研究
9. 平成25年度科学研究費補助金課題一覧
10. 機関研究プロジェクト
11. 研究成果公開プログラム
12. 公開講演会
13. 学術情報リポジトリ

## 資料 1. 海外研究動向調査

### ○ 4S 及びカルフォルニア大学における科学技術の人類学・医療人類学の動向調査

#### 1. 調査の目的と概要

近年の人類学において、ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) が先鞭をつけた科学技術の人類学 (anthropology of science and technology) は人類学の下位分野のひとつとして認知されるようになっただけでなく、(1) ANT (actor-network theory) やエージェンシー論の普及や、(2) マリリン・ストラザーン (Marilyn Strathern) やエデュアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ (Eduardo Viveiros de Castro) との対話を通じて、人類学の重要な一部を形成するに至っている。アンドリュー・ピッカリング (Andrew Pickering) やアンマリー・モル (Annemarie Mol) といった科学哲学者との盛んな研究交流が行われていることから分かるように、科学技術の人類学の主要な特徴のひとつは脱領域的である点にある。このような脱領域的な研究交流の主要な場のひとつとなっているのが、4S (Society for Social Studies of Science) であり、その年次大会である。

こうした状況を鑑みて、本調査ではアメリカ合衆国サンディエゴ市で行われた 4S の年次大会に参加し、科学についての社会科学の動向とその中での人類学の位置づけについて調査した。同時に、北米における医療人類学のセンターのひとつであるカルフォルニア大学のバークレー校とサンディエゴ校に立ち寄り、北米における医療人類学の最新動向について聞き取り調査を行った。

なお、調査期間は、10月8日から20日までの13日間である。このうち、10月9日から12日は4Sの年次大会に参加した。その後、日曜日をはさんで15日までカルフォルニア大学サンディエゴ校にて調査を行い、16日の移動日をはさんで、17日から18日まではバークレー校にて調査を行った。

#### 2. 4S 年次大会における研究動向

##### 2-1. 4S の概要

4S (Society for Social Studies of Science) は、1975年に創設された科学技術に関する社会科学 (以下、科学技術研究) で最も歴史のある、世界最大の学会である。社会学、人類学、歴史学、哲学、政治学、経済学、心理学、フェミニスト・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズの研究者や、知識、政策、研究開発、国際開発に関心のある研究者、科学者や技術者、当事者も含まれており、学際的な学会となっている。

##### 2-2. 4S 2013 の概要

今年度の 4S の年次大会 (Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science) は、アメリカ合衆国カルフォルニア州サンディエゴ市内のホテル、タ

ウンアンドカントリー・リゾートアンドコンベンションセンターにて、10月9日から12日までの4日間の日程で約1,200人の登録者のある中で開催された。そこでは、251のパネルが組まれ、1,026の研究成果が発表された。大会事務局の発表によると、それらの発表のテーマは下表のようになっている。

調査者は、このうち人類学及び生物医療関連の16のパネルを選んで参加した。個別的な研究発表の内容を紹介する前に、まずは、4Sにおける人類学の位置づけについて概況的に記述しておく。

事前に登録された要旨を対象に分析した結果、人類学 (anthropology または anthropological) という言葉を用いている研究発表は、全体の3.5%にあたる36件であった。この数字だけを見ると、科学技術論における人類学のプレゼンスは低いようにも思えるが、ラトゥールやストラザーン、インゴールド (Tim Ingold)、ベイトソン (Gregory Batson) といった人類学者への言及が要旨のレベルでも散見されることは特筆に値する。

表1: 4S2013における発表テーマの傾向  
(※主催者発表による)

発表テーマ	発表数
科学技術政策	171
理論と方法	143
市民参加と社会運動	122
情報技術	104
科学コミュニケーション	86
環境	85
生物医療	82
ジェンダー	45
経済と市場	41
エンジニアリング	35
エネルギーと核	35
食	17

また、民族誌 (ethnography または ethnographical)、フィールドワーク (fieldwork)、参与観察 (participate observation) について言及した研究発表は、上記の人類学に言及のあったもの以外に216件あり、これを人類学に言及した発表と合わせると全体の24.6%にあたる。これらの研究発表の中には、「ネット上のコミュニティについての民族誌」や「会議における参与観察」といった表現が使用されているものや民族誌の有効性について方法論的に議論しているものもあるが、比較的長期に渡るフィールドワークに基づいているとする発表もあった。また、実際の研究発表の場面では、個別的な発表に対して「詳細なフィールドワークによるデータの提示が優れており、評価できる」という内容の枕詞が使用されることが多かった。これらのことから、科学技術論においては、(1) 民族誌やフィールドワークが人類学を超えて一般的な手法となっていること、(2) それらの言葉が従来の人類学者が用いる意味とはやや異なるニュアンスで使われていることが伺える<sup>1</sup>。なお、これ以外の方法として言及されているものとしては、言説分析やイ

<sup>1</sup> なお、ホウタマンとメイヤーが2012年に編んだモノに関する人類学の論集でも、ネ

インタビュー、観察、統計、メディア分析、歴史的アプローチ、社会的アプローチなどがあつた。

次に、これらの研究の対象についてだが、実験室や科学者コミュニティ、大学、インターネット、ビッグデータ、臨床試験といった、古典的な科学技術論に合致するものだけでなく、環境、医療、インフラ、ネット、フェミニズム、ポストコロニアル、災害、国家、官僚組織、自己統治、鉱山、資源管理、芸術、人間と動物、食の安全、インフラ、博物館、社会運動、経済、金融、難民といった、人類学の対象ともなりうるテーマを対象としているものも多く見られた。地域に関しても、北米やヨーロッパだけでなく、中南米（メキシコ、ブラジル、コロンビア、グアテマラ、ボリビア、チリ、エクアドル）や東アジア（日本、韓国、中国、台湾）、南アジア（インド、バングラディッシュ）、東南アジア（インドネシア、ボルネオ）、サブサハラ・アフリカ（ボツワナ、南アフリカ、エチオピア、ガーナ、ケニア、ブルキナファソ、カメルーン）など、世界各地の事例が取り扱われている。

以上のことから、方法論とテーマという二つの側面について科学技術研究と人類学の間には類似性が存在していることが分かる。

## 2-3. 参加したパネルの概要

### 2-3-1. 024. 045. 091. Techno-Medicine

「技術 - 医療」と題されたパネルでは、生物医療に関する 12 の報告が 4 時間半にわたってなされた。ここではそのうち 7 つの発表について紹介する。

フランス国立科学研究センターのジョシアン・タンチョウ（Josiane Tantchou）による発表では、欧米では外科手術室は儀礼的な手続きやモノの配置によって境界づけられているのに対し、カメルーンでは物質的な制約から境界づけがなされておらず外科手術室の意義が矮小化されているという報告がなされた。

ジョン・ホプキンス大学のマイルズ・レスリー（Myles Leslie）による発表では、電子カルテの導入がどのように政策的に推進されていたのかが報告された上で、その負の側面として医師が患者そのものではなく患者のデータを見るようになるという報告がなされた。

コペンハーゲン大学のヘンリエッタ・ラングストラップ（Henriette Langstrup）らの発表では、デンマークで開発された糖尿病患者情報を記録するための電子フォーマットが、輸出先のインドネシアでは糖尿病治療のための基準として用いられていることが報告された。

コーネル大学のバハール・アキュルト（Bahar Akyurtlu）の発表では、トランスジェンダー治療における「標準治療（ホルモン注射など）」が、アイデンティティ形成に果たす役割について報告された。

国立交通大学のリーウェン・シン（Li-Wen Shih）の発表では、台湾における

---

ット上のコミュニティについての論文が所収されており、ネット上でのフィールドワークは人類学でも必ずしも奇異ではなくなってきたのかもしれない[Houtman and Meyer (eds.) 2012]。

超音波検診が、医師と妊婦の間で胎児に対する異なる想像を喚起させていることが発表された。

マギル大学のニコール・ネルソン (Nicole Nelson) の発表では、近年の腫瘍学において盛んに用いられるようになった「actionable」という言葉が、ガン治療における新しいレジームを指し示しているという極めて興味深い報告がなされた。

カルガリー大学のアリエル・デュシー (Ariel Ducey) の発表では、TVT (Tension-free vaginal tape) を用いた尿漏れ治療についてとりあげ、それが手術として極めて簡単な医療キットであること、またこの治療に関する他の選択肢が無いことなどが、フーコーやアガンベン of 装置論との関係で報告された。

### **2-3-2. 058. Evidence-Based Polity: Objectivity Computed, Judgment Evaluated, Causation Quantified, and Life Economized**

「エビデンス・ベースド・ポリシー」と名付けられたパネルでは、当初の予定が変更され3つの発表がなされた。

まず、カルフォルニア大学サンディエゴ校のカatherine・ケニー (Katherine Kenny) の発表では、「たばこの規制に関する世界保健機関枠組み条約」をとりあげ、それがいかに日常生活から生命を数値化しているのか、またそのことによっていかに迅速に普及したのかについて報告があった。

次に、カルフォルニア大学サンディエゴ校のケリー・ゲイツ (Kelly Gates) の発表では、エビデンス・ベースド・メディスンを援用する形で、エビデンス・ベースド・ポリシングが展開されていることが報告された。

最後に、カルフォルニア大学サンディエゴ校のローレン・オルセン (Lairen Olsen) の発表では、DSM-Vにおける文化の位置づけについて議論し、そこに医療人類学の影響が色濃く見えているという報告がなされた。

### **2-3-3. 114. The Tangled Genetic Web: (Re) Defining Families, Kinship and Culture through Technologies**

「もつれた遺伝の網の目：技術を通じた家族、親族、文化の(再)定義」と名付けられたパネルでは、遺伝学の展開と文化の関係に関する5つの発表がなされた。

まず、アルボーグ大学のスティーネ・アドリアン (Stine Adrian) の発表では、ヨーロッパ各地からデンマークに越境して生殖医療を受ける人々にとって、精子ドナーの情報がどのような意味を持っているのかについて報告された。特にドイツの事例では、子供のスティグマを懸念する立場から白人の精子ドナーが好まれる傾向が強いとのことだった。

次に、ニューヨーク州立大学のクリステン・カールバーグ (Kristen Karlberg) の発表では、アメリカにおける精子ドナーの情報がどのように利用されているのかについて報告された。アメリカでは、母親が自身と異なる人種の精子ドナーを望む傾向が強いとのことだった。

また、台湾中央研究院のユユエ・チャイ（Yuyueh Tsai）の発表では、台湾における自身のルーツを探るための遺伝子検査が盛んに行われていることと、それが政治状況とどのように関係しているのかについて報告された。

カルフォルニア大学サンディエゴ校のララ・ブラフ（Lara Braff）はメキシコにおける生殖医療の状況についての、デイジー・デオマンポ（Daisy Deomampo）は南アフリカから卵子提供のためのインドに訪れる人々についての報告がなされた。

#### **2-3-4. 160. Clinical Trials at the Intersection of Science, Markets, and Ethics**

「科学・市場・倫理の交叉点としての臨床試験」と題されたパネルでは、臨床試験に関する5つの発表がなされた。ここではそのうち4つの発表について紹介する。

まず、コペンハーゲン大学のサラ・ワドマン（Sara Wadmann）の発表では、デンマークの病院における臨床試験において、「ケア」と「調査」が互いに対立するものとしてではなく、具体的なやり取りの中で道徳的な摩擦を引き起こしていくようなものであるという報告がなされた。

次に、オックスフォード大学のパトリシア・キングリ（Patricia Kingori）の発表では、ケニアにおいて臨床試験が医療サービスを受けるための重要な入口のひとつになっていること、その中でスタッフの倫理的な態度が単純に治験の参加者だけでなく、それを含めたコミュニティ全体との関係で構築されていることが報告された。

ノースカロライナ大学のジル・フィッシャー（Jill Fisher）の発表では、アメリカにおける第一段階の治験が貧困層や移民にとって最もダーティーな仕事となっていることが報告された。人間に対する第一段階の治験は、病者ではなく健康体の人を対象に副作用の有無などを調べるものであるため、治験の参加者には健康であることが求められる。そのため、参加者たちは、治験ボランティアという「仕事」において健康を売るために、健康を日々作り出す必要にかられているという。

同じくノースカロライナ大学のヒーサー・エデルブルト（Heather Edelblute）の発表でも同様に、アメリカにおける第一段階の治験が貧困層や移民といった人に対する搾取の上に成り立っているという報告がなされた。

#### **2-3-5. 175. Therapeutic Technologies of the Self**

「自己の治療的テクノロジー」と題されたパネルでは、治療における自己のテクノロジーのあり方に関する4つの発表がなされた。ここではそのうち2つについて紹介する。

カルフォルニア大学バークレー校のマリサ・ブランド（Marisa Brandt）の発表では、帰還兵のPTSDの治療にコンピューターゲームのような装置が用いられていることについての報告がなされた。

次に、カルフォルニア大学バークレー校のカテリーン・ヘンディ（Katherine

Hendy) の発表では、PTSD の治療に MDMA が用いられ始めていることについて発表がなされ、そこでは治療が効果をもたらすメカニズムに関して具体的なモデルが必要とされていないことが報告された。

### **2-3-6. 193. 213. 235. Structuring Infrastructure: Perspective on Sociomaterial Orders**

「インフラストラクチャーを構築すること」と題されたパネルでは、全部で 13 の発表がなされたが、筆者はそのうち 5 つの発表を聞くことができた。ここではそのうち 3 つの発表について報告する。

コルゲート大学のクリストファー・ヘンケ (Christopher Henke) の発表では、STS におけるインフラ研究の流れと意義について、エスノメソドロジーとの関係で手際よくまとめた報告がなされた。

ナンヤン技術大学のサルフィカル・アミール (Sulfikar Amir) の発表では、シンガポールにおける海中都市の建設について、その必要性和現在の計画についての報告がなされた。

カルフォルニア大学サンディエゴ校のチャンドラ・ムケージ (Chandra Mukergi) の発表では、STS におけるインフラ研究を牽引してきた立場からインフラと暗黙知との関係について報告がなされた。

### **2-3-7. 223. 245. STS Perspectives on Parenting**

「STS からみた養育」と題されたパネルでは、出産や子育てに関する 9 つの発表がなされた。

カルフォルニア大学リバーサイド校のジュリエット・マクマラン (Juliet McMullin) の発表では、子供のけがを防ぐために、家の中に様々な用具を設置することが良い親としてのあり方になっていることについて報告がなされた。

リンコピン大学のリサ・リンデン (Lisa Linden) の発表では、スウェーデンにおいて子宮頸がんワクチンをめぐってどのような装置を用いて両親と娘の間のコミュニケーションがとられているのかについて報告がなされた。

オタワ大学のマイケル・オルシーニ (Michael Orsini)、ジョージア工科大学のジェニファー・シン (Jennifer Singh)、カルフォルニア大学ロサンゼルス校のマーティン・ラップ (Martine Lappe) は、それぞれ自閉症の子を持つ親たちによる子育てと医学的知識の関係について発表した。

また、カルフォルニア大学リバーサイド校のチカコ・タケシタ (Chikako Takeshita) の発表では、アメリカにおける帝王切開をめぐる言説について、エクスター大学のスーザン・ケリー (Susan Kelly) の発表では、成長ホルモン投与療法について、ケース・ウェスタン・リザーブ大学のミシェル・マクガワン (Michelle McGowan) の発表では、出生前診断に関する報告がなされた。

### **2-3-8. 251. The Metabolic Condition: Metabolism and Epigenetics in Contemporary life.**



「メタボリックコンディション：現代生活におけるメタボリズムとエピジェネティクス」と題されたパネルでは、肥満や代謝に関する4つの発表が行われた。

デューク大学のハリス・ソロモン（Harris Solomon）の発表では、インドにおける異バイパス手術について報告がなされた。また、オックスフォード大学のネイディン・レヴィン（Nadine Levin）は肥満治療における遺伝子診断について、カルフォルニア大学バークレー校のバーラット・ジェイラムは、インドにおけるHIV/AIDSについて代謝との観点から報告された。

なお、今回の4Sに参加したことにより、コペンハーゲン大学のヘンリエッタ・ラングストラップ（Henriette Langstrup）准教授、南カルフォルニア大学のアンドリュー・レイコフ（Andrew Lakoff）准教授、アールボルグ大学のスティン・アドリアン（Stine Adrian）助教の他、マギル大学のニコール・ネルソン（Nicole Nelson）、トロント大学のグラント・ジュン・オオツキ（Grant Jun Otsuki）、リーズ大学のクリストファー・ティル（Christopher Till）などと特に親睦を深め、今後も研究交流を続けていくことを確認することができた。

### 3. カルフォルニアにおける医療人類学の研究動向

#### 3-1. バークレーにおける医療人類学の研究動向

カルフォルニア大学バークレー校の人類学部には、考古学、生物人類学、民俗学、医療人類学、社会文化人類学の5つの部局に分かれており、全部で43名の教員が在籍している。そのうち、医療人類学には、ポール・ラビノー（Paul Rabinow）教授、ナンシー・シェパーヒューズ（Nancy Scheper-Hughes）教授をはじめとする8名の教員が所属しており、今回の調査では、ローレンス・コーエン（Lawrence Cohen）教授にお会いしてお話を伺うことができた。その他に、サンフランシスコ校のヴィンセーン・アダムズ（Vincanne Adams）教授、歴史学部のアベナ・オセオ（Abena Osseo-Asare）助教にお会いし、お話を伺うことができた。

ローレンス・コーエン教授は、インドにおける認知症と老衰を扱った優れた民族誌 *No Aging in India* を出版されたことで有名な医療人類学者であり、認知症と老衰に関する医療人類学をリードしている研究者のひとりである。コーエン教授によると、医療人類学は常に3つの、あるいは3つの軸をめぐる展開している。(1) 自然または生理と、非自然すなわち(2) 文化・象徴と(3) 政治経済の三つである。これらを相互に分割したものとしてではなく、いかに絡み合ったものとして記述するのかがコーエン教授にとっての医療人類学の課題である<sup>2</sup>。そして、報告者の私見では、コーエン教授の *No Aging in India* は、それら3つをシームレスに繋ぎ合わせることに成功した初期の医療民族誌のひとつである。コーエン教授は、その後、インドにおける同性愛と近代の問題や、ドキュメントから生体認証

---

<sup>2</sup> コーエン教授は、このような発想に関する洞察をポール・ラビノー、ブルーノ・ラトゥール、ダナ・ハラウェイから得たという。

への移行に関する研究を進められているということである。

ヴィンセーン・アダムス教授は、カルフォルニア大学サンフランシスコ校医学部で教鞭をとっている医療人類学者である。バークレー校の人類学部の医療人類学とサンフランシスコ校の医学部の医療人類学は共同で運営をしており、アダムス教授は本年度はバークレー校でも教鞭をとっておられるということだった。アダムス教授によると、近年のアメリカの医学部ではグローバル・ヘルス (Global Health) という分野に対する関心が高まっており、これは部分的にビルゲイツ財団からの資金提供と関係しているという。このグローバル・ヘルスは日本では国際保健と訳されることが多いが、それがかつての国際保健 (International Health) とどの程度同じでどの程度違うのかについては議論が継続しており、近年のアメリカにおける医療人類学の重要なトピックのひとつとなっているという<sup>3</sup>。

歴史学部に所属しているアベナ・オセオ助教は、ガーナ出身の父を持つアメリカ育ちの科学史家でいかに薬剤が開発されていったのかに関する本を 2013 年に上梓されている。現在は、ガーナの核エネルギーに関する歴史研究を行っているとのことで、ガーナにおける科学技術の進展・普及に関する研究について交流を行っていくことを確認することができた。

また、今回は立ち話程度しかできななかったが、バークレー校の医療人類学のコリ・ヘイデン (Cori Heyden) 准教授ともお会いし、今後、交流を行っていくことを確認した。

### 3-2. サンディエゴにおける医療人類学の研究動向

カルフォルニア大学サンディエゴ校の人類学部は、人類学的考古学、生物人類学、社会文化人類学、心理人類学、言語人類学の五つの部局に別れており、全部で 19 名の教員が在籍している。このうち、医療人類学を専攻されているのは、トマス・ショルダス教授とジャニス・ジェンキンス教授の二人で、どちらも心理人類学に所属している。このうち、ジェンキンス教授は、調査者が関心を持っている薬剤の人類学に関する論文集を編集されていることもあり、ぜひともお会いしたいと何度もメールを送ったのだが長期の調査に行かれていたこともあって返事をいただけずお会いすることはできなかった。

そのため当初の予定を変更し、当校の大学院生であり、ボリビアとチリの国境地帯における結核対策について調査を行っているポーラ・サラビア (Paula Saravia) とお会いし、お話を伺った。

サラビアは現在、博士論文を執筆中であるが、チリとボリビアの国境地帯においてアイマラ (Aymara) の人々の結核について調査を行っている。結核は、その治療が長期に渡ることやその間、定期的に抗生物質の服薬が必要となる。しか

---

<sup>3</sup> アダムス教授は、グローバル・ヘルスに関する業績として、*Reimagining Global Health: An Introduction*. Paul Farmer, Arthur Kleinman, Jim Yong Kim, Matthew Basilio(eds.) と *When People Come First: Critical Studies in Global Health*. Joao Biehl and Adriana Petryna (eds.) の二冊を挙げていた。なお、後者にはアダムス教授自身も寄稿している。

し、アイマラの人々の暮らす地域には道路の整備が遅れていることや国境を超えた移動といった問題があるという。特に後者の問題は、結核治療との関連で極めて興味深い事例を提供するものである。私自身もガーナの結核対策についての研究を進めていることもあり、サラビアとは、今後、国際学会等のパネルを共同で組織していくなど研究交流を進めていくことを確認した。

また、4Sに参加したことにより、メキシコの生殖医療について調査をされており、サンディエゴ州立大学で講師もされているポスドクのララ・ブラフ (Lara Braff) や、人類学部に所属しているわけではないものの、社会学部の博士課程に所属し、医療に関する科学技術研究を行っているカテリーン・ケニー (Katherine Kenny)、科学技術研究を専攻されているコミュニケーション学部のケリー・ゲイツ (Kelly Gates) 准教授からも、科学技術研究と人類学の関係についてお話を伺うことができた。

なお、カルフォルニアにおける医療人類学の研究動向を調査するに当たっては、コペンハーゲン情報技術大学のキャスパー・イェンセン (Casper Jensen) 准教授、カルフォルニア大学アーバイン校のメイ・ツァン (Mei Zhan) 教授、大阪大学のモハーチ・ゲルゲイ (Mohacsi Gergely) 氏に研究者を紹介していただいた。

#### **4. サンディエゴとバークレーにおける博物館について**

今回の調査においては、時間を見つけて、現地の博物館を視察することもできた。以下、その概要について報告する。

##### **4-1. サンディエゴにおける人類学関連の博物館の概況**

サンディエゴの中心地にあるバルボア公園には、15 の博物館・美術館が存在している。

ひとときわ高い尖塔が公園のシンボルともなっているサンディエゴ人類学博物館 (San Diego Museum of Man) では、通過儀礼、ビール学 (BEERology)、マヤ、エジプト、人類進化の5つの常設展示と拷問についての1つの特別展示が行われていた。

通過儀礼の展示では、生まれてから死ぬまでの人生の節目に使われる衣服や道具を中心に60点ほどの資料が展示されていた。その中には、職業訓練の認定証などが含まれていたり、カミングアウトを地位の変更に関する通過儀礼として扱うなど、現代アメリカの通過儀礼と世界各地のそれを比較するような形で展示がされていた。

エジプトの展示では、ミイラと棺桶の展示が行われており、この博物館のめだまのひとつとなっている。また、マヤに関する展示では巨大の石碑が展示され、その横に詳しい解説のボードが置かれるというスタイルを取っていた。ビール学の展示では、世界各地のビールに関する道具の展示が行われていた。人類進化に関する展示では、類人猿から現生人類に至るまでの歴史を骨格標本などを展示しながら分かりやすく迎えるようになっており、教育的な側面に力を入れているよう

だった。拷問に対する特別展では、主にヨーロッパで用いられた拷問道具やそのレプリカがそれを使用された時の絵とともに展示されており、痛みを喚起するような内容になっていた。

全体としては、考古学や生物人類学に偏った展示がされており、文化人類学的な展示である通過儀礼の展示も結婚や成人といったトピックごとに散発的な展示がされているという印象が強い。

バルボア公園の中では、他にもサンディエゴ美術館（The San Diego Museum of Art）において東アジアと東南アジアの美術品に関する展示が行われており、そこでは人類学博物館にはない地域に的を絞った展示が行われている。また、民芸国際美術館（Mingei International Museum）では、椅子やメタルワークを中心に民芸品が美術品として展示されている。これらのことから、サンディエゴ人類学博物館は、単体としてではなく他の美術館との連携の中で文化についての展示がなされていると考えられる。

なお、サンディエゴのオールド・タウンには、カサ・デル・レイ・モロアフリカ博物館（Casa del Rey Moro African Museum）という博物館があり、当地においてほぼ唯一アフリカについて知れる施設となっているとのことだったので訪問してみたが、実体は単なるアフリカ土産物店に過ぎなかった。

#### 4-2. パークレー及びサンフランシスコにおける人類学関連の博物館の概況

カルフォルニア大学パークレー校の人類学部には、かつてローウィ人類学博物館と呼ばれていた A. ハースト人類学博物館（A. Hearst Museum of Anthropology）が存在しているが、今回の滞在中は展示の見直しのために閉鎖されていて内部を観ることはできなかった。

サンフランシスコにあるアフリカディアスポラ博物館（Museum of African Diaspora）では、アフリカからの人類の移動をテーマに、装飾品に関する展示と奴隷貿易に関する二つの常設展が行われていた。装飾品に関する展示は、映像を用いたもので、世界中の様々な地域の装飾品とそれとよく似たアフリカの装飾品を交互に見せながら、アフリカと他の地域とのつながりを喚起させるものとなっていた。また、奴隷貿易に関する展示は基本的に体験談の読み聞かせの形式をとっていた。どちらも、具体的なモノの展示というよりは、映像や音声といった複製技術を用いての展示となっている点に特徴があると言える。また、今回の訪問時には、ナイジェリア出身の写真家オカイ・オジェイケレ（Okhai Ojeikere）の企画展が行われており、1960年代以降のナイジェリアの人々のポートレートが多数展示されていた。

#### 総括と展望

まず、今回の調査によって明らかになったこととして、科学技術論と人類学の方法と対象には類似性があることが挙げられる。今後、グローバル化に伴うモノと人の移動の活性化に伴い、科学技術の世界大の普及がますます進むことが想定されることから、今後、より密接な研究交流が行われていく可能性があると考え

られる。その際、人類学が科学技術論とどのように連携していくのか、また、人類学の強みである民族誌やフィールドワークといった方法が科学技術論のそれとどのような差異があるのかについて、積極的に発信していく必要があると思われる。

次に、印象的だったこととして、4S において、科学技術に関するポストコロニアル研究が盛んに行われていたことがある。近年の日本の人類学では、ポストコロニアルを前面に押し立てた研究が一時期に比べて減少しており、それと入れ替わる形でエージェンシー論や ANT といった科学技術論の影響を受けた研究が盛んになってきている。しかし、その科学技術論において、ポストコロニアル研究が盛んに行われているということは、今後の人類学の理論的な展開を考える上で、重要な示唆を含んでいるように思われる。今回の調査では、医療関連のパネルに的を絞っていたこともあり、科学技術研究におけるポストコロニアリズムの動向については十分に把握することができなかったが、ANT を中心に据える北欧系の研究者たちはポストコロニアル系の発表に違和感を持っていると述べており、STS とポストコロニアル研究の関係について、今後も調査を続ける必要がある。

最後に、4S においては医療についての社会科学的研究がきわめて広範に行われており、特に欧米の医療人類学にとって、科学技術論との連携が必要不可欠になっていることが改めて確認できた。中でも、生殖医療や遺伝子医療に焦点を当て、その受容のされ方や人間の生活に与える影響に関する研究が多く行われている。同時に、遺伝子研究とその医療への応用の進展は、アメリカ人類学の出発点において極めて重要な課題であった人種に対する問いを改めて提起するものともなっている。科学技術論と共に、これらの問題に取り組んでいくことは、今後の医療人類学の重要な課題のひとつとなるだろう。他方で、欧米以外の地域を対象にする科学技術論の研究は質・量ともにそれほど充実しているとは言い難く、この分野における人類学の重要性と意義は依然としてまったく失われていない。とはいえ、それらの地域出身の科学技術論の研究者が現れていることは、今後の人類学の位置づけを考える上で看過すべきでないだろう。

このような状況の中で、カルフォルニアの医療人類学では、科学技術論との影響関係の中で研究が進められている傾向が強かうかがえた。バークレー校のコーエン教授は、自らの研究をクラインマンやグッドの研究と差異化する中で、ラトゥールやハラウェイの影響を強く受けたと述べていたし、生物学的側面と非生物学的側面の纏れ合いを探求するという姿勢は、科学技術論の動向と一致するものである。また、アダムス教授が指摘していたグローバル・ヘルスに対する関心の高まりにも、科学技術論との関係の影を見ることができる。医学という科学技術との関係を常に意識せざるを得ない医療人類学にとって、科学技術論との連携は今後より一層重要になっていくと考えられる。

(浜田明範)

## ○ フランスにおけるラテンアメリカ、とくにアンデスとアマゾン研究の 動向調査

### 1. 調査の目的と概要

本調査の目的は、フランスにおけるラテンアメリカ研究に関連する人類学分野の最新の研究動向を明らかにすることである。

以前よりフランスでは、旧植民地国と同様に、ラテンアメリカ諸国の研究が重視されてきた。そのため、ラテンアメリカ諸国に独自の研究機関がおかれ、現地での調査にとどまらず、その成果に基づいた学術雑誌や書籍なども盛んに刊行されている。こうした状況の中で実施されてきたこれまでの研究は、人類学や考古学をはじめとして多くの学問領域におよび、研究テーマも多岐にわたる。しかし、とくに近年、人類学分野では先住民社会に対する社会還元を重視した研究、考古学分野ではアンデス文明の中心地であるペルーから離れた地域での研究が目立つ傾向にあり、新たな展開を迎えているといえる。

そこで本調査では、現在進行中のラテンアメリカと関連する人類学または考古学プロジェクトにおいて、どのような展開がみられるのかを把握することに努めた。具体的には、①大学や博物館といった研究機関に所属する研究者へのインタビュー、②大学や共同研究を中心に催される研究会やゼミへの参加およびその関係者への聞き取り調査、③博物館におけるラテンアメリカ展示の特徴の抽出と、それをめぐる研究者のコメントの総括である。

なお、今回、インタビューの対象としたのは、研究者および博士課程と修士課程の学生である。調査期間は、2014年2月25日から3月9日までの13日間である。

以下では、まずフランスにおける人類学的研究の一般的状況について述べる。そして、つぎに研究機関および共同研究プロジェクトごとに、その研究動向を記述していく。

### 2. フランスにおける人類学的研究の一般的状況

財政難のあおりをうけて、人類学および考古学をはじめとした人文社会科学がおかれた状況は非常に厳しく、研究資金や研究ポストは限定的である。また、科研費に相当するフランス国立研究機構 (L'Agence Nationale de la Recherche) による研究助成も年々縮小している。当然、修士課程や博士課程の学生を対象とした研究助成も厳しい状況にある。

こうした状況のなかで、現在では、調査や研究を学術的に進めていくだけでなく、むしろ調査対象地やフランスへの社会還元といった実践的側面が強く求められている。そのため、各自の調査対象地では出版や講演など研究成果の公開が期待され、積極的に実施される。また、フランス国内においても、ケ・ブランリー美術館 (Musée du Quai Branly)、ラテンアメリカ研究センター (Maison d'Amérique Latine)、フランス・アンデス研究機関 (Instituto Francés de Estudios Andinos) やリマ・フランス協会 (Alliance Française, Lima) などにおいて、一般向けの講演や、文化紹介、観光プロモーションなどが広く催されている。さらに、近年ではアマゾンの環境開発や幻覚剤利用などに、一般の人々の関心が向けられていることもあり、ラテンアメリカ研究センターやアマゾン研究者であ

るナンシー・オチョアが代表を務める LUPUNA（ペルー領アマゾンの伝統社会をプロモーションする文化協会）などが、映画上映などを盛んにおこなっている。

学術的な面に言及すると、フランスでは様々な共同研究プロジェクト（Unité Mixte de Recherche:UMR）が存在する。これらは、以前より機関横断的ではあったが、現在ではそれに加えてより学際的な研究が目立つようになり、関連諸分野の研究者が共同で調査や研究に従事している。今回、聞き取り調査をおこなった研究者らによると、近年の中心的テーマは、ジェンダー、疾病、生物多様性から、文化遺産、環境変化、移民（移動）へと推移してきているという。

### 3. 研究機関および共同研究の動向

#### 3-1. パリ西部ナンテール・ラ・デファンス大学:Universidad Paris Ouest Nanterre La Défense（旧パリ第10大学。以下ナンテール大学）

●考古学・民族学研究所(Maison d'Arquéologie et d'Ethnologie, René-Ginouvès:以下MAE)  
<http://www.mae.u-paris10.fr/la-mae/>

MAE は、フランス国立科学研究センター（Centre National de la Recherche Scientifique : 以下 CNRS）とパリ第1パンテオン・ソルボンヌ大学（以下パリ第一大学）、ナンテール大学による共同研究機関である。ここでは、考古学、先史時代および初期歴史時代の研究、民族学と比較社会学、民族音楽学、古代と中世史、古典文学などといった人文社会科学の諸分野の研究がおこなわれている。そして、約300人の研究スタッフ、約90人の専門的技術スタッフ、約500人の博士課程の学生が所属している。

同機関には、以下の5つの研究室が存在する。それぞれが独立した共同調査プロジェクトではあるが、各研究室同士の連携は非常によく、研究室をまたがる調査、研究も存在する。また、各研究室主催の研究会への参加は自由で、様々な研究会を合同で実施することもあり、研究者や学生が研究室間を自由に行き来している。

①考古学と古代科学：Archéologies et Sciences de l'Antiquité, 以下 ArScAn (UMR7041)

②民族学と比較社会学：Laboratoire d'ethnologie et de Sociologie Comparative, 以下 Lesc (UMR7186)

③アメリカにおける考古学：Archéologie des Amériques, 以下 Archam (UMR8096)

④先史社会と技術：Préhistoire & Technologie (UMR7055)

⑤定住社会から初期国家にいたる歴史過程：Trajectoires (UMR 8215)

今回、集中的に調査したのは、このうちの②と③の研究室である。

##### 3-1-1. Lesc (UMR7186) <http://www.mae.u-paris10.fr/lesc/spip.php?rubrique13>

CNRS とナンテール大学による共同調査研究室で、1967年に設立された。現在の形は、ネイティブアメリカンに関する民族学の教育研究センター（Centre de Enseignement et Recherche en Ethnologie Amérindienne : 以下 EREA）、民族音楽学研究センター（Le Centre de Recherche en Rthnomusicologie : CREM）、およびマヤに関する教育研究グループ（Le Groupe d'enseignement et de Recherche Maya : GERM）から構成され、先史から現在に至る諸社会を対象とした学際的な研究をおこなっている。常勤研究者は76人、連携研究者は4人、PDは16人、博士課程在籍者は110人である。また、定期的に様々なセミナーが

催され、平均して週一回以上はなんらかの研究会がある。基本的に参加は全てオープンである。さらに、同機関の研究者らは、フランスの諸大学や研究機関だけでなく、調査地の教育機関でも教鞭をとることで、調査成果の社会還元を目指している。

本調査では、そのうちの EREA についての聞き取りを集中的に実施した。EREA は、アンデス、アマゾン、メソアメリカを研究領域とし、人類学、民族学、考古学、言語学、歴史学、地理学といった関連諸分野の研究者から構成される学際的研究センターである。センターの人員は、LESC のメンバー13人と連携研究者16名、PD 研究者7名と PD5 名、博士課程の学生の8名からなる。

現在の主要な研究テーマは以下のとおりである。

- ① エージェンシーと人間/非人間の関係性 (agency and human/non-human relationships)
- ② 歴史性と社会的記憶の時間的概念とレジーム  
(conceptions of temporality and regimes of historicity and social memory)
- ③ ローカルノレッジと遺産化の諸問題 (local knowledge and patrimonialization issues)
- ④ イメージやオブジェクトのステータス：個の表象  
(the status of images and objects; representations of the individual)
- ⑤ 空間、権力の中心、領土的再構造化 (space, power centers, territorial restructuring)
- ⑥ 先住民権益およびアイデンティティの主張にもとづくポリティクスと運動の生成：民族間関係 (the production of politics, movements based on native claims and identity claims; inter-ethnic relations)
- ⑦ 宗教の再構築 (the reconstitutions of the religious)
- ⑧ 儀礼のダイナミズム (the dynamics of rituals)
- ⑨ 親族の実態への理論的アプローチ (theoretical approaches to the facts of kinship)
- ⑩ アメリカ先住民言語の構文、意味論および語用論  
(the syntax, semantics and pragmatics of American Indian languages)
- ⑪ アメリカ研究の構築と変化  
(the construction of, and changes in, the field of American studies)

今回の滞在では、EREA の長でブラジル (カシナワ) 研究者のパトリック・デザイ (Patrick Deshayes) をはじめとした諸研究者の好意により、博士課程以上の学生が研究発表をおこなうゼミに参加した。今回の発表内容は、ブラジル先住民を対象とした映像あるいはパフォーマンスの人類学研究で、発表後は各研究者から様々な質問が投げかけられた。こうしたゼミは定期的に行われ、博士論文の推敲が図られる。

また EREA は、「アメリカ人類学 (Séminaire d'anthropologie américaniste)」、「エージェンシー (Séminaire « Agentivité )」、「イメージとラテンアメリカ Séminaire « L'Amérique latine par l'image et pour l'image »)」といった3つのセミナーを主催しており、本調査では、アメリカ人類学セミナーに参加した。

アメリカ人類学セミナーは、EREA、アメリカ世界研究センター (Le Centre de recherche sur les mondes américains: CERMA, MONDAM, UMR 8168)、および社会人類学研究室 (Le Laboratoire d'anthropologie sociale: LAS, UMR 7130) によって組織されるセミナーで、基本的に月に一度、パリにあるいずれかの研究機関で開催される。在フランスのアメリカ研究者が一堂に集う機会であり、その対象も先史から現代までと幅広い。会への参加人



数は毎回 15~40 名ほどで、現在の代表者は、CNRS と LESC の研究者ボニー・ショメイユ (Bonnie Chaumeil) とイザベル・ダイラン (Isabelle Daillant) である。前者は、アマゾンで長期的なフィールドワークをおこない、先住民社会 (ヤグア) の親族構造やケ・ブランリー美術館によるマルチメディアプログラムに従事してきた。また後者は、ボリビア先住民社会 (チマネーモステネ) の社会構造などを調査してきた人物である。

参加当日の出席者は 17 名で、会は 2 時間程度で終了した。社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales) のクラウス・アンベルジ (Klaus Hamberger) により「平原と北西海岸の先住民との比較からみる儀礼における一考察 (Perspectives rituelles dans les Plaines et sur la Côte Nord-Ouest)」と題した発表がおこなわれ、その後は出席者から様々な意見やコメントが寄せられた。発表は、フィールドデータに依拠しつつ、先住民社会間を比較することで、その儀礼構造を理解するという内容であった。理論面を強く打ち出したものではないが、学生のうちはフィールドデータにもとづく着実な研究が奨励される傾向があり、その後、次第に比較の視座などが好んで用いられるようである。

EREA での調査を通じて、既述の研究者だけでなく、フランスにおけるアマゾン研究の第一人者であるジャン＝ピエール・ショメイユ (Jean-Pierre Chaumeil)、ボリビアで先住民 (Leco) のアイデンティティなどに関する研究をおこなうフランシス・フェリエ (Francis Ferrié)、ペルーおよびエクアドルのアマゾンの先住民と開発、文化遺産についての研究者であるアンヌ＝ガエル・ビルー (Anne-Gaël Bilhaut)、さらにはボリビア先住民 (Yuqui) の社会構造や歴史などについて研究するダヴィ・ジャバン (David Jabin) などと、交流を深めることができた。

### 3-1-2. Archam (UMR8096) <http://www.mae.u-paris10.fr/archam/>

Archam は、世界の考古学を対象とする ArScAn から離れ、メソアメリカ、カリブ、アンデスおよびアマゾン社会を対象とする研究室として、CNRS の人文社会科学研究所 (Institut des Sciences Humaines et Sociales : INSHS) および生態環境研究所 (Institut de l'écologie et de l'environnement : INEE)、パリ第一大学の美術史と考古学コース (Histoire de l'art et Archéologie : UFR03) を中心に、2000 年に設立された。また、調査、研究を円滑に進めるため、ケ・ブランリー美術館や外務省、メキシコと中央アメリカ研究センター (CEMCA)、IFEA、文化通信省 (MCC-DRAC Guyane et Martinique) などとも協力関係にある。組織は、常勤研究者 19 名、非常勤研究者 1 名、PD 研究者 10 名、連携研究者 30 名、博士課程の学生 30 名からなる。さらに、Archam は、ヨーロッパの研究機関における考古学ネットワークに属し、先コロンブス期の考古学と芸術に関するヨーロッパ修士 (Master Europé en archéologie et art précolombiens : MEARAP) でもあるため、所属学生らは、スペイン、イギリス、ドイツといった連携諸大学の講義に参加可能である。

この Archam には、社会・政治・宗教的組織の再構築や技術経済システムの把握、生態環境と社会動態との関係などといった多岐にわたる研究が様々な地域を対象におこなわれているが、そのなかでも全体を貫く主研究テーマとして掲げられるのは以下の 5 つである。

#### ① 極限環境への適応 (Adaptations to “extreme” environments)

②セトルメント・パターンと社会政治組織

(Settlement patterns and socio-political organization)

③技術経済システム (Technological and economic systems)

④埋葬と儀礼実践の考古学 (mortuary and ritual practices archaeology)

⑤アメリカにおける危機の考古学 (The archaeology of crises in the Americas)

そのため 2013 年 12 月には、アンデスで動物考古学および環境と人間や動物との関係を研究するニコラス・グップフェルト (Nicolas Goepfert) により、「領土的な危機とダイナミクス:アンデスにおける移動、境界、支配 (Crises & Dynamiques: Mobilités, frontières & occupations dans les Andes)」と題した一般向けの学際的シンポジウムも開催された。

本調査では、研究室長かつメソアメリカ考古学者で埋葬や生贄の実践をテーマに掲げるグレゴリー・ペレイラ (Grégory Pereira) の協力によって、修士課程以上の学生を対象とした「葬送の考古学セミナー (Séminaire Archéologie funéraire)」に参加した。このセミナーはほぼ一月ごとに開催され、フランス在住の考古学者、形質人類学者と文化/社会人類学者を中心とした講演がおこなわれている。なお、参加した当日のテーマは、「埋葬の多様な運命 (Destins multiples des restes)」で、出席者は 29 名であった。

セミナーでは、まずエステラ・ワイス＝クレッジ (Estella Weiss-Krejci, ウィーン大学) が、「死はただのはじまりにすぎない: 死者の肉体の埋葬後の運命に関する通文化的比較 (Death is only the beginning: the postfuneral fates of dead bodies in cross-cultural perspective)」と題した講演をおこなった。次に、グレゴリー・ペレイラが、自らの調査データなどを用いて、「メソアメリカの供犠のコンテキストにおける埋葬処理についての差異 (Traitement différentiels des restes en contexte sacrificiel en Mésoamérique)」を論じた。そして最後に、ジャン＝ピエール・ショメイユは、「記憶と忘却の間。アマゾンにおける埋葬処理と多様な運命 (Entre mémoire et oubli. Traitements et destins multiples des restes humains en Amazonie)」を、アマゾンの様々なデータを用いて論じた。各発表ともに、ポストプロセスまたはコンテキスト考古学と称される流れに位置し、個別性や歴史性に主眼をおき、解釈学的あるいは認知の側面を強く意識したもので、非常に興味深い発表であった。各講演後には質疑応答の時間が十分にとられており、最終的には学生よりも常勤研究者からの批評やコメントが増すため、学生には大きな刺激となることが考えられる。

残念ながら、現在 Ar cham 常勤のアンデス研究者は、先述のニコラス・グップフェルトと、アンデス南部高地で交換システムの民族考古学調査や国家と称される先史社会の考古学的研究をおこなうパトリス・ルコック (Patrice Lecoq) の 2 人だけである。そのほか、アマゾン研究者が 1 人いるものの、スタッフの大半はメソアメリカ研究者である。この背景には、アンデス研究者の定年退官後に財政難などで公募がなかったことがあり、アンデス研究は非常に手薄といえる。こういう状況もあってか、学生の研究対象もメソアメリカが中心である。なお、常勤スタッフには、講義の義務が課せられていない場合も多いが、ほとんどの研究者がフランスの諸大学で講義を実施し、教育普及に努めている。

筆者は、Ar cham で上記の研究者のなかでもとくにニコラス・グップフェルトから、多大な協力をえて本調査を進めた。そして、今年または来年にも互いの調査地を訪問し、

意見交換をおこなうだけでなく、筆者の調査資料の分析などを皮切りに共同研究をおこなっていきことも話し合った。さらに、連携研究員でアンデスの戦争を研究するビンセント・チャムシー (Vincent Chamussy) とも交流を深めた。

### 3-2. パリ第1大学 (Univesidad de Paris 1, Panthéon-Sorbonne)

<http://www.univ-paris1.fr/ufr/ufr03/>

美術史と考古学コース (Histoire de l'art et Archéologie : UFR03) に上述のパトリス・ルコックが所属しており、現在、Archam やケ・ブランリー美術館と共同調査をしている。

彼を除いてアンデス先史研究者が存在しないにもかかわらず、博士課程には2名、修士課程には6名の学生を抱え、「先コロンブス期アメリカの考古学 (Archéologie de l'Amérique précolombienne)」と題するゼミを開いているが、1人ではカバーできない部分もある。こうした状況を打破するために、Archam に在籍する各研究者が、それぞれの専門を活かして講義を手伝うことも多い。また、ヨーロッパの研究機関のネットワークを利用して、学生たちは様々な大学で受講することできるなど、流動的な活動が可能である。

筆者は、パトリス・ルコックの協力により、彼のゼミに出席し、これまでの研究成果と今後の展望に関する発表をおこなった。また、パトリス・ルコックをはじめ、修士や博士課程に在籍する学生各自の研究発表を聞き、互いの研究に対する意見交換だけでなく、今後の研究方針を精緻化することができた。さらに、フランスでアンデス研究者が不足している現状を鑑み、学生たちのフィールドワークに際して協力体制をとっていくことも相談された。学生らの研究の特徴には、日本と比べて古い時期の研究があまりないことがあげられる。また、動物骨や土器、金属などのように資料の分析を中心にすえた研究テーマをもつ学生が多く、自ら発掘調査を実施しなくても他の研究調査に加わり、そのデータがシェアできれば、論文執筆へとつながる方針がとられていることもその特徴の一つである。

### 3-3. 社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales : 以下 EHESS)

人類学、考古学、歴史学、社会学といった社会科学に関わる諸分野の研究と研究者養成を目的とし、47の調査センターと37の共同研究プロジェクトを抱える組織である。

#### 3-3-1. 先史南アメリカ研究センター (Centre de Recherche Sur l'Amérique Préhispanique : 以下 CeRAP) <http://cerap.ehess.fr/index.php?220>

EHESS とパリ・ソルボンヌ (パリ第4) 大学 [Université Paris- Sorbonne (Paris IV) : 以下パリ第4大学] との共同で、先史アメリカ社会の研究を目的に、2000年に設立された研究センターである。常勤と連携研究員をあわせた14名の研究者と14名の博士課程の学生 (そのうちの4名がアンデス研究) が在籍しており、これ以外にも必要に応じて客員教授が招聘される。また、調査や研究、あるいは交換留学制度を含む研究者の育成を円滑に実施するために、メキシコ国立人類学歴史研究所 (Instituto Nacional de Antropología e Historia de México) やメキシコ国立自治大学美学研究所 (Instituto de

Investigaciones Estéticas de la Universidad Nacional Autónoma de México)、ペルーカトリカ大学 (Pontificia Universidad Católica del Perú)、メキシコ国立歴史人類学院 (Escuela Nacional de Antropología e Historia) と学術協定を結んでいる。現在は、ペルーとメキシコで一つずつのプロジェクトが進行しているが、これに参加する以外にも、学生らは協定先の考古学調査に参加することもできる。さらに、CeRAP の学生は、博士論文を二機関から提出し、両機関で博士の学位をえることが可能であるという。

本調査では常勤研究者で、ペルー南海岸で建築や埋葬、図像表現などから先史社会における宗教や経済、あるいは社会的政治的活動、それらと環境との関係を中心に、考古学調査を続けるアイシャ・バシール・バシャ (Aïcha Bachir Bacha) にインタビューをおこなった。現在、彼女は調査とその成果を出版するため、講義をもっていないが、基本的には CeRAP あるいはパリ第 4 大学で、自らの最新の調査成果や課題にもとづく講義やゼミをおこなう必要がある。調査、研究と教育をうまく連動させた形式であると考えられる。なお、パリ第 4 大学にはラテンアメリカ諸国から来た 5 人の留学生を含む 10 人の博士課程の学生がおり、一緒にフィールド調査をおこなっているが、パリ第 1 大学や CNRS との連携はとくにない。彼女によれば、CeRAP と大学での教育の差異は、大学教育では考古データそのものを重点的に分析し、CeRAP ではそれをふまえた発展的研究をすることにある。成果の社会還元については、調査期間の終盤に常に調査地で現地説明会や講演会を実施し、フランスやペルーなどでもシンポジウムをおこなっている。また、発掘時にはペルーの大学で考古学を専攻する学生を毎年 10 人程度受け入れ、教育普及に努めている。

### 3-3-2. 文化遺産のファクトリー：アメリカ先住民社会における記憶とポリティクス

(La Fabrique des “Patrimoine”: Mémoires, Savoirs et Politique en Amérique Indienne Aujourd’hui : 以下 Fabriq’Am) <http://fabriqam.hypotheses.org/>

ラテンアメリカにおける「遺産化 (Patrimonialization)」を中心的テーマに、37 名の人類学者によって 2012 年に結成された共同研究である。現在、遺産化は、多文化主義が重要な役割を演じるラテンアメリカ諸国のなかで、社会的政治的景観を視覚化し、認識するための主要手段となっている (例：鉱山などの開発プロジェクトと先住民共同体との関係や開発を契機とした共同体の政治的活動など)。その際に重要なことは、遺産化の多様な過程を理解することであるが、プロジェクトに関わる人類学者は、長期的フィールドワークの経験を有している。そのため、ローカルな事例や現象だけでなく、グローバル化や遺産化と関連するさまざまな問題を同時に議論することが可能である。この比較研究プロジェクトの目的は、単に多様なデータの類似性や差異から遺産化の過程を類型化するだけではない。むしろ、文化遺産と関わる意味や言説が築かれる過程などを比較し、個人や集団の戦略や政治性を明確にすることにある。そして、遺産化を介して、先住民社会がいかに現代社会や異なる知識、歴史性に対応したのか、ラテンアメリカで多文化主義的状况がいつ生じ、どのように展開したのかを明らかにすることも目的の一つである。

こうした多様な遺産化のプロセスを理解するためのキーワードが以下の 3 点で、各研究者はこれらを念頭におきつつ、調査や研究を進めている。

- ①時的/時間スケールの問題、歴史性と知識  
(temporality/ time-scale issues, historicity and knowledge.)
- ②遺産の「創出」：その社会的構築と政治的使用  
(the “making” of heritage, its social construction and political uses)
- ③遺産の論理と国際または国家遺産  
(Heritage logics and international or national heritage devices)

同プロジェクトでは月に一度、研究会 (Taller de Fabriq'Am) が開催される。今回は、研究代表者であり、メキシコ先住民集落を対象に伝統舞踊とカトリック教会との関係や、若者を中心としてはじまった手工業生産などを研究するアナッ・アリエル・ド・ヴィダ (Anath Ariel de Vida) を中心に、インタビューをおこなった。また、既述のイザベル・ダイランとアンヌ＝ガエル・ビルーからは、多くの協力をえた。なお、このプロジェクト内では、イザベル・ダイランはボリビア先住民社会における神話と歴史の対比を、アンヌ＝ガエル・ビルーは、ペルーとエクアドル先住民社会における博物館建設をめぐる諸問題、およびケ・ブランリー美術館収蔵資料の遺産化などを研究テーマとしている。同プロジェクトの特徴は、流行中の文化遺産をめぐる実践的研究であることと、これまで長年調査を続けてきたローカルな社会 (先住民社会) のあり方が、グローバル化が進むなかでどのように変化するかを、文化遺産を介して理解し、その成果を結晶化するところにある。最終的には、研究成果をシンポジウムや出版の形で社会に還元していくことを目指しており、そのための研究協力などについても話し合った。

### 3-4. 国立自然史博物館 (Muséum National d'Histoire Naturelle. 以下 MNHN)

#### 3-4-1. ローカルヘリテージ (Patrimones Locaux : 以下 PALOC) <http://www.paloc.ird.fr/>

2009年に設立された、開発研究院 (Institut de Recherche pour la Développement. 以下 IRD) と MNHN を軸とする人類学や地質学、地理学、博物館学、考古学などの諸分野からなる共同研究で、40名の研究者、49名の連携研究者と29名の博士課程の学生によって構成される。その目的は、持続可能な開発と生物多様性の保全をもたらす、自然、文化、領土に関わる遺産を築き、促進していくことであり、以下の4点に集約される。

- ①物多様性と文化遺産の構成要素の同定
- ②社会変化とローカルな (自然、社会) 環境、および両者の関係のダイナミクスの分析
- ③規制の効果とその社会的受容 (エコツーリズムやローカルな生産活動) に関する評価
- ④生態および社会システムの持続可能性に関する指針の精緻化への貢献

上記の目的の達成には、ローカルノレッジと生物多様性の持続的利用や保全との関係をさぐり、生態、政治、社会、経済といった諸側面の通時的変化を考察するとともに、社会的空間的ダイナミズムを研究し、遺産を継承する際に鍵となる博物館の分析や評価をおこなうことが必要となるため、この共同研究は高度に学際的な研究となっている。また、同プロジェクトには研究対象の通時的変化をとらえるために、6名の考古学者が加わっている。そのうちの一人が近年エクアドルで活発な調査を続ける IRD 所属のフランシスコ・バルデス (Francisco Valdez) である。近年ペルーよりもエクアドルで考古

学調査やシンポジウムが多い背景には、同プロジェクトとその成果公開が関連していると考えられる。

今回の調査では、食物（摂取）とその遺産化、食物（摂取）に関わる儀礼や遺産と子供の関係などを研究テーマとし、ラテンアメリカの広範囲で調査をおこなう二人の人類学者チャールズ＝エドワルド・ド・シュルマン（Charles-Edouard De Suremain）とエスター・カッツ（Esther Katz）にインタビューをおこなった。彼らによれば、このプロジェクトの特徴は、現在フランスで増加傾向にある遺産をテーマとした研究の先駆的かつ学際的研究ということにある。また、単に各調査地で遺産リストを作成するのではなく、調査地をより深く理解するための切り口として、遺産をとりあげる点も大きな特徴の一つである。そのため、地域研究を通じて、ユネスコの定める文化遺産の概念を問いなおすことも同プロジェクトの視野に入っているという。この二人は2014年5月に日本で開催される IUAES に参加予定で、その際に民博を訪れるほか、筆者および関連研究者と互いの研究やシンポジウム、共同研究に関わる議論をおこなう予定である。さらに、同プロジェクトの代表を務める人文地理学者で生態やサブシステムに関心をもつドミニク・ギョー（Dominique Guillaud）とも交流を深めることができた。そして、共同研究やシンポジウムを催すには、テーマを掘り下げ、具体的な研究課題を調整していく必要があることなども確認された。

### 3-5. ケ・ブランリー美術館（Museo de Quai Branly）

豊富な民族資料や考古資料を有する美術館として著名であり、ラテンアメリカ展示の大半は考古資料から構成される。その展示には賛否両論あることが知られているが、今回、聞き取り調査をおこなった他機関の人類学者は、ほぼ全員が展示に批判的なコメントをしていた。その要点は、アートの展示としてはよいが、各資料が文化的社会的コンテキストから離れて展示されている。資料に対するキャプションや説明もなく、インスピレーションをうけようとする人にはよいが、多文化を知るための場ではない、といったものである。

なお、アンデスとアマゾンセクションの担当職員であるパス・ニュネス・リゲイロ（Paz Nuñez-Rigueiro）は、フィールドワーク中で、インタビューの機会はえられなかった。

## 4. 総括

今回の調査を通じて、フランスの研究機関および共同研究プロジェクトは、複数の機関と有機的に連携しており、人類学をベースとした研究であっても、考古学、歴史学、地理学、社会学、経済学といった関連諸分野からなる学際的研究を展開していることが明らかとなった。この背景には、プロジェクトを立案する際に、特定の地域や学問領域に特化した研究では助成が受けにくく、包括的なテーマをもって研究を実施していく姿勢が求められていることがあると考えられる。なお、こうした共同研究は、研究ポストにつけず、研究費をもたないポストドクター研究者への救済措置ともなっている。

また、調査や研究の社会還元が強く求められていることも特徴の一つである。そのため、講演会やシンポジウム、出版などによって成果を公開してだけでなく、調査対象社会になんらかの利益をもたらそうと試みる姿勢が鮮明にみられた。

研究成果の社会還元には、大学教育も含まれているが、大半の機関で最新の調査成果を学生に還元することがうたわれている。このように研究と教育の有機関係が成立している一方で、とくにアンデス考古学を専門とする常勤の研究者が、ほとんどいないというのも現状である。これが近年、ペルーの研究が減少している大きな原因の一つであろう。この問題を解決するために、フランスでは研究者および研究機関同士の学術的ネットワークが構築されているが、これはむしろ現実に対処するための苦肉の策でもある。ただし、学生にとっては、複数の機関を自由に動きながら、研究を進めることができるという大きなメリットがあることも事実である。

総じて、共同研究を行う際に、複数の機関に属する研究者が円滑に集うことができる点は、民博の共同研究との類似点も多い。しかし同時に、学際的な研究体制が構築、推進され、多くの場面で学際的研究が実践されている点については、今後、民博で共同研究やシンポジウム、あるいは科研プロジェクトを遂行していく際に、参考となるであろう。また、個人的には、本調査を通じて多くのラテンアメリカ研究者と交流を図ることができたことが大きな収穫である。各自の研究成果を共有し、将来的には共同研究、シンポジウムや研究会の共同開催を念頭に研究交流を続けていくことが確認された。今後の調査研究活動に生かしていきたいと考えている。

(山本睦)

## ○ オランダおよび IUAES2013 におけるマテリアリティに関する人類学的研究の動向調査

### 調査の目的と概要

本調査は、マテリアリティ研究及び関連する人類学分野の最新の動向について、今夏英国マンチェスター大学で開かれた国際人類学民族科学連合 (IUAES) と、オランダのライデンとアムステルダムの研究施設や博物館を訪れて明らかにするものである。特に 1980 年代以降、モノやモノと人の関わりに着目する人類学的研究には、新たな理論的発展がみられ、日本国内でも多くの成果があがっている。本調査では、「マテリアリティ」をはじめとして「モノと身体」「芸術」「収集と展示」等の関連テーマにおいてどのような人類学的展開がみられるのかを考える。

マンチェスター大学では、8月5日～8月10日の期間中 212 のパネルが組織され、1480 の研究成果が発表された<sup>4</sup>。筆者はそのうちマテリアリティに関連するパネルを選び、発表を聞いた。オランダでは、7月30日～8月3日の期間中、ライデン大学、アムステルダムの熱帯博物館 (Tropenmuseum) 及び、ライデン市にある国立民族学博物館 (Rijksmuseum voor Volkenkunde) を訪れた。

実際の調査の順番とは前後するが、まず前半で IUAES の動向について分析する。IUAES の博物館関連のパネルの一つでは博物館における来館者の五感を通じた経験が中心的なトピックとなっていた。本稿の中盤では、オランダの博物館の展示やプログラムにおいて、異文化の物質性がどう表現され、展示資料と来館者との身体的な関わりがいかに関与しているのかについて考察する。また最後にライデン大学博物館における研究動向を紹介する。

調査期間：2013年7月29日～8月10日

### 1. IUAES 2013 マンチェスター大学

2013年8月5日から開催された IUAES の 2013 年大会では、materiality や object や tangibility を主題にしたパネルが複数開催されていた。同時に開催されたものも多く、全てを聞くことは出来なかったが、ここに全体の傾向について、筆者が抽出したキーワード毎にまとめた。

#### ■ Surface

マテリアリティに直接関連する最も大規模なパネルが「Surfaces: contesting boundaries between materials, mind and body」であった。T. Ingold と、S. Küchler<sup>5</sup>をコメンテーターにむかえて行われた。多くの人が Surface という概念をタイトルの中に入れて発表した。T. インゴルドの Surface をめぐる議論 (e.g. Ingold 2007) に触発された若手研究者が多く含まれるパネルであり、会場は賑わっていた。デザイン、服飾関係者、文学者など必

<sup>4</sup> 大会ホームページ <http://www.iuaes2013.org/>より

<sup>5</sup> S. Küchler University College London の人類学教授。後述する *The Handbook of Material Culture* や *Journal of Material Culture* の編者の一人。



ずしも人類学を専門としない者も多く含まれていた。表面性＝浅い、内側＝深い理解と位置づける古典的な思考を排し、内部と外部を分ける非透過性のものとしてではなく、モノや環境・心・身体が交わるアクティブな場（存在）として「表面」を考察するという趣旨のものである。

煙、水といった捉えがたいモノが儀礼において人々の身体内部と世界をつなぐ媒体として機能していると指摘する発表、北極の環境調査隊がどのようにして雪の内部や地中や海底の状況を把握するのかを分析し、雪面や水面といった表面が（何かを隠すのではなく、むしろ）人間に多様な情報を与えるのだと指摘する発表、様々な服を着替える事によって表面を大きく変化させる我々の肉体や、それが感覚する物質世界がいかなるものであるかに着目する発表、整然としているはずの都市の中で人々が移動式の屋台を開き自由に壁や道路に付け加えながら空間を再編成する韓国の市場を分析する発表などがあった。S. Küchler 氏の最後のコメントでは、表面を上から眺めるだけでなく、様々な角度から眺めること、物体を表面に囲まれた閉じたもの、としてみるのではなくて、表面の動きを見ることが重要であること、固定的な主-客の関係ではなく、シークエンスの問題として考えるべきであることなどが指摘された。

## ■ Mobility

“Mobile objects and transnational crafts”と題されたパネルでは、特に移民・移住に伴うモノの移動が、モノの意味やアイデンティティや形をどのように変化させるのか（あるいはさせないのか）という点に着目する発表が集められた。例えば、移民やインターネットを通じて広がるアフロ・アメリカン・カルトの事例では、女神像など儀礼に用いられるモノが、移民先のスペインで様々な形を変え、また多様な場面で用いられているという。そして信仰者たちは信仰に必要なモノを購入するために特定の店にやってきてそこで同郷（同胞）と出会う。モノのエージェンシーと言っても良いこの働きは、人々の間で新しい関係性を生んでいるという（ちなみに、日本ほどエージェンシーという言葉は使われなかったという点も印象的である。）

このパネルでは、人がモノをもって何かを表象しているのではなく、それを使って世界を変えようとしているのだということが強調された。新たな土地で生きてゆく人々をモノが支えたり、モノが新たな関係を生み出したりするという点に着目していた。またモノそれ自体の移動のほか、インターネットを通じたイメージの移動にも触れられた。先述のカルトの研究では、神のアイコンがインターネット上で多様にコラージュされながら拡散している現状に着目し、それがカルトの空間的な拡がりを与える影響などが指摘された。

そのほか、身体の移動性や運動に着目したパネル “Exploring the moving body: movement, materiality and lived experience”も開催された。動くという身体の特質について、社会生活や文化との関わりから考察するパネルで、身体の動きと関わるモノに着目した研究もあった。例えばニューヨークの巨大な吊り橋についての研究では、そこを渡る人々の身体感覚や感情が橋によって大きく触発されることを指摘している。

なお、マテリアリティに関連するか否かに関わらず、mobilityは「移民」や「観光」のテーマと絡めながら今回様々なパネルで取りあげられていた。学会中には、The

European Association of Social Anthropologists (EASA) で mobility をテーマとした研究の情報交換ネットワークを強化することが話し合われた。

## ■ Senses and Museum

博物館における来館者の五感の経験を主題としたパネル “Experiencing collections: display, performance and the senses” が催された。展示されるモノと来館者との身体を介した出合いを促す展示がどのように実践されているか、あるいは実践されうるのか、またその効果はいかなるものであるのかを考えるパネルであった。マルチメディアの利用、手を触れることのできる展示、においの利用、参加型イベントなどの事例が報告された。

Pitt Rivers Museum の事例では、自由に引きだしをあけてガラス越しに展示物をみることが出来る展示棚がいかに来館者（特に子ども）の興味を引き出したのかが報告された。彼らの身体の動きや、それと連動するモノの動きが詳細に報告され、直接は触れられない、ラベルが見えないといった「阻害」の部分も含めて、この棚の存在が彼らの展示物への関わりや理解を促進した指摘された。またウィッチ・クラフトをテーマとした博物館の事例では、展示方法は概ね静的でありながら、そこで展示されている呪物や儀礼の道具が（ある者にとっては）「生きている」存在として多様な語りや感情を喚起するということが指摘された。この博物館では観る者によって、同じ展示物でも非常に異なる意味をもつことから、博物館の展示を見るという経験の多様性が議論された。また、視覚障害者に対する西洋美術展示の試みや、展示物や言葉を介さずに音響や光刺激のデジタル技術などを用いてアマゾンの感覚世界を体感させる、人類学者とアーティストによる共同プロジェクトなどの事例も紹介された。パネルの主催者である David Howes からは、触覚的な美的感覚を考える重要性や、大人とは異なる子供の感覚を考慮する必要も強調された。

## 2. オランダ調査

最後に紹介したパネルの議論を受けて、以下ではまずオランダの博物館を2つ紹介し、展示やプログラムの特徴を、特に展示されるモノと来館者の身体的で感覚的な関わりがいかにつまされているのかという視点から考察する。また、オランダのライデン大学の人類学の動向について述べ、博物館との連携における近年の傾向についても紹介する。

### 2-1. 熱帯博物館 Tropenmuseum

熱帯博物館は、王立熱帯研究所 (Koninklijk Instituut voor de Tropen) の元にある博物館である。KIT は、旧オランダ植民地を中心とする発展途上国についての調査研究、開発支援、オランダ国内での理解促進を目的とする組織であり、その中の文化の紹介、保存、交流を目的とした施設として博物館が位置づけられている。

博物館は、オランダの植民地統治に関する展示が大きな部分を占めるのが特徴的であるが、現代までを含めた非西洋世界の文化を展示している。子供を対象とした博物館 Tropenmuseum Junior をその中に併設しており、主に小学生に向けたプログラムを有しているのが特徴的である。

## ■本体のミュージアム（常設展）

この館では、来館者が身体的なレベルで異文化や歴史の世界を経験するための仕掛けが随所に見られる。等身大の蠟人形や、その蠟人形が語りかけてくる音声テープを利用しながら、人間の姿を、質感を伴いながら展示しているのが特徴的である。ビデオ・音声資料の多用も指摘できる。アニメーションを用いて、キャラクターがキュレーターの役割をし、展示物についての解説をするビデオコーナー、現地の風景写真とともに環境音や現地の人々の語りの音声を流し展示物の背景を飾るといった演出も多用される。展示場は、モノだけでなく、それを文脈に位置づけることを目的とした音・動きに溢れており、静かにモノを鑑賞する場ではない。この館では、東オランダ会社の船に使われていた椅子に坐る、あるいは遊牧民のゲルの中に入るなど、来館者が身体を使って物質文化を味わうための仕掛けが随所に見られる。

## ■子供のミュージアム（企画展 MIX MAX Brazil）

モノにあふれ、それらと来館者の直接的な関わりが最も顕著なのは、実は子供のミュージアムの方である。1975年設立のこの博物館では、小さな常設の部分を除き、2年半ごとに新しいプログラムに変わる。筆者が来館した際には、MIX MAX Brazil と題された、現代ブラジル文化や芸術（リサイクル素材を用いた芸術実践を含む）を中心に紹介する企画展（プログラム）が開催されていた。多様な文化背景を持った人々が住まうブラジル社会の文化的多様性や、生き物と人間の交わり、現実とイマジネーションの世界の交差、伝統絵画と現代ストリートアートの同居などを、MixMax というテーマに乗せて表現している。担当者である Liesbet Ruben 氏の案内のもとプログラムを見学し、細部に込められた数々の意図について伺うことができた。以下この企画展を中心に考察したい。

数十人の子供達（6歳～13歳）が、90分ほどのプログラムに参加する。これを率いるのは3人の大人のインストラクターである。この中にはオランダ在住のブラジル人も含まれている。子供達が靴を脱ぎブラジル産のカラフルなサンダルに履き替え会場に入ると、インストラクターの動く物音がする。次にこれに応える別の物音が現れ、次第に音楽に変わる。こうしてブラジルのある町の一角へと賑やかに導かれた子供たちは、その後①音楽②踊り③工作の3チームに分かれてワークショップを受ける。最後にはそれらの成果を、親たちを招いて発表する。

企画展会場には説明書きはない。そこにあるのはモノ、そして解説してくれる人間である。Lisbet氏は人間こそが最高のメディアと語る。ほとんど全てのモノは触れることができる。本体の博物館が所蔵する貴重な古い粘土細工を除き、ガラスケースに入られているものは無かった。子供たちは、ブラジルのアーティストが作った家具に座り、ブラジル風のジューススタンドで飲み物を飲み、ペットボトルの蓋で敷き詰められた床を踏みしめ、歯磨き粉のチューブを再利用して作られたテーブルクロスの上で工作の作業をする。

そして各展示は、物語に媒介されながら、相互に関連している。企画展に併せて絵本が制作されている。子供たちはこの本を用いて学校で事前学習をしている。この絵本の内容は、ブラジルのある少年とある少女を主人公とした架空の物語である。そしてその

中に、現代ブラジルの風景、大人や子どもの生活、展示に作品を寄せているアーティストやその作品、作品のモチーフとなったマングローブの森、サンダル、楽器が登場する。絵本の主人公の少年・少女の視点に導かれながらこれらの人・モノ・自然を知った子供達が、その後展示場にやってきて実際のそれらのモノと対面するのである。またプログラムでは、子供達が会場の全ての部屋に実際に入ってみようになっている。これは子供達が会場の世界を「自分のもの」と感じられるようにする工夫であるという。また子供達の工作の成果物は次々と博物館に飾られ、仮想のブラジルの街角の一部となる。

このように博物館では、子供たちが身体レベルで、ブラジルの物・人・音と戯れるプログラム構成になっている。芸術作品や、楽器、踊りにつかう傘といったモノは、現代ブラジルの一部を、質感をもって伝えるだけでなく、彼らの創作意欲を刺激し、また絵本で学んだ物語と彼らの身体世界とをつなぐ。その中で子供らは単に異文化を知るだけでなく、美術館の空間・モノとの自分の関係を築いてゆく。

なお熱帯博物館は、ここ数年の間に劇場と図書室を閉鎖した。これは政府の予算削減によるものである。2013年7月に新しいディレクターを向かえ、今後は博物館の他館（次に紹介する国立民族学博物館およびアフリカ博物館）との統合が進められることが発表されている（2013年9月現在）。

## 2-2. オランダ国立民族学博物館 Rijksmuseum Volkenkunde

ライデン市にある国立民族学博物館は、1937年に公開されたシーボルトのコレクションの誕生を主要なきっかけとして設立されたもので、ヨーロッパで最初の科学的な民族学博物館とされる（The National Museum of Ethnology 1962 : 3-4）<sup>6</sup>。訪問時、企画展は準備中であり、常設展のみを観覧した。

大型のものを除けば多くの展示資料が全面ガラスばりのケースの中に置かれている。ガラスケースは、テキストによる説明を極力排除しているという特徴がある。これは、文字情報が来館者の関心を展示物からそらしてしまうことを防ぎ、展示物と来館者の直接的な出会いを促すための工夫である（The National Museum of Ethnology 2003 : 123）。より詳細に知りたい来館者は、展示ケースの前にあるタッチパネルで情報を検索することができる。

熱帯博物館と同様、映像（動画・静止画）と録音資料が多用されている。展示物の背後にある曇りガラスや、展示室の壁には様々な動画や静止画が映され、現地の環境音になっている。また所々に設置された小型の画面からも展示物に関する人々の語りが映され、展示物は動きとざわめきの中にある。その画像や動画は、展示物の文化的文脈を紹介するものであったり、当該地域の現代的な風景を紹介するものであったりする。

賑やかな地域別展示室とは対照的に、The Budha-room という、無地の壁にかこまれ、音楽もかかっている部屋もある。人々はこの静かな空間で仏像（ケースに入れられていない）と対面する。禅や瞑想の場を連想させもするこの部屋は、博物館の中でも独特

---

<sup>6</sup> 2001年に大規模改装を終え、現在は主に非西洋の各地域をテーマとした常設展のスペースと企画展エリアから構成されている。

の存在感をはなつ。解説文によれば、改装時に取り壊されたものの、来館者の希望によって復活させられたものであるという。

日本美術と物質文化がご専門のキュレーターMatti Forrer 博士に、近年の博物館の状況についてうかがった。今後に向けて、日本の芸者をテーマとした企画展も計画中のForrer 博士によれば、企画展の場合、収蔵品の展示自体の割合はかなり低くなる。現在の動向として、博物館は家族で来館できるような企画を求めており、「まるで博物館ではないみたい」と感じられるような空間作りが目指される。来館者が異文化体験できるアクティビティや、映像、講演、およびデモンストレーションの比重を高めている。例えばマオリの企画展の際には、現地から人を呼んで、カヌーとカヌー庫を作るプロセス自体を展示し、また地元の大学生が近隣の川でカヌーこぎをデモンストレーションした。

Forrer 氏によればライデンにおいて物質文化に関する研究は長らく盛んではない。この博物館では、多くの収集品が博物館から遠く離れた収蔵庫に保存されていることもあり、実際の展示物を手に取る経験が不足しているキュレーターが多い。収集物の画像を含めたデータ・ベースを利用することがスタッフ側から推進されており、実際の大きさや質感を体験することないまま、研究を進めてしまうケースが少なくないという。

### 2-3. ライデン大学 社会・行動科学大学院／学部 (Graduate school/ Faculty of social and behavioral science)

ライデン大学では、人類学者は、主に社会・行動科学部の中の「文化人類学と開発専攻」というプログラムに所属している<sup>7</sup>。人類学のチェアである Gerard A. Persoon 博士に話しを聞いた。かつては博物館と大学の両方に勤務する人類学者が今よりも多く、彼らの間で、物 (1917-1997) は、物質文化研究に映像人類学を取り込み、66年よりライデン大学の教授として教育にあたっていた。彼はモノをどのようにして映像や写真と関連付けて見せるかということを考えていた。また「モノの言葉 language of things」という題の講義を行い、モノが運ぶメッセージを読み取ることが大切と教えていた。しかし彼の後、物質文化研究はそれほど盛んではなかった。また大学と博物館の関係も薄れ、研究者は、どちらか一つに所属するケースが増えていった。モノに関する研究が再び盛んになってきているのは、最近 Patricia Spyer 博士を迎えてからである。Spyer 氏は広義の物質文化研究の近年的な成果を幅広く集めた論文集 Handbook of Material Culture (2006) の編者の一人である。

現在大学院では主要テーマの一つとして、“Media, Visual and Material Culture”を設定している。これは、メディア研究、映像人類学、物質文化研究を交差させるという試みであり、イメージ、音、モノや情報の流通が、人間の知覚や経験をいかに形どるのかを考察する。Persoon 博士によれば、これまでも同類の試みは部分的に行われてきたが、大学院の組織だったプロジェクトとしてとりあげられたのはここ数年のことであるという。

このプロジェクトの具体的な内容を、そこに参加し執筆されている博士論文のテーマ

---

<sup>7</sup> その他、地域研究 (Leiden University Institute for Area Studies) やアフリカ研究所のなかにも少数であるが人類学者が在籍している。

から知ることができる。たとえば、ベニンで宣教師たちが使用したビデオ映像の働きや受容を考察するものがあるが、ビデオ媒体と再生機の物質性や見る者の身体性にも注目している。また、南アフリカのクワズール・ナタール州で 1880 年代から半世紀の間に宣教師が作成した写真を分析する研究では、写真の移動とそれに伴う役割の変化（社会的文化的履歴）に着目している。その他、上海万国博覧会におけるチリ共和国の展示に関する研究では博覧会の展示物がいかに取捨選択されたのかに注目している。このように、メディア分析の中で、モノや物質性に着目したアプローチを（部分的に）採用する傾向がみられる。

なお、この *Media, Visual and Material Culture* のテーマに、特に博物学からアプローチすることも出来る。映像、博物館、物質文化研究の架橋という意味で、A. A. Gerbrands が追求した分野の延長線上にあると言えるかもしれない。

## 総括

IUAES では、移動、文化遺産、博物館といった人類学の主要なトピックにおいてモノの働き、意味の変化、形や姿の変容、物質性、あるいは人間の身体との具体的な関わりへの着目がみられた。またモノや物質環境世界をいかに人類学的に分析しうるかといった方法論自体を主題化する研究（具体的には *Surface* のパネル）もみられた。テキストスタイルの模様の象徴分析など、旧来型の研究もあったが、モノの象徴的な意味や静的な位置づけよりも、モノの移動や、意味やイメージや形の可変性に着目した分析が多かった。IUAES 全体では、*mobility* を扱う研究が目立ったが、その中でもマテリアリティに関連する分析がなされていた。モノ・空間・人の関わりを考える研究の重要性が高まっているものと考えられる。

IUAES では博物館における来館者の五感を通じた理解が重要なトピックとして取り上げられたが、オランダの 2 つの博物館の調査からは、展示における映像・画像や音声記録の重要性の高まり、来館者の参加型イベントの重視、展示物と来館者の直接的で身体的な関わりへの重視の 3 点を指摘できる。博物館は静的な展示や文字による抽象化を離れ、来館者が動きや音の中で、異文化を体験できる場となることを目指す。

かつて博物館と深く関わっていたライデン大学の人類学では、現在物質文化に関する研究をメディア研究および映像人類学と結びつけるプロジェクト “*Media, Visual and Material Culture*” が始まっている。ここでは、メディア分析を中心としながら、そこに現れるモノや、メディアの物質性、メディアと関わる人間の身体性への着目もなされている。また、博物学と関連付けた研究も可能となっており、博物館と映像人類学と物質文化研究の間の連携を深める可能性を有している。ただし、オランダでは予算削減の問題から、民族学系の博物館の統合が進められている。今後、どのような形で博物館が再編されるのか、注視してゆく必要がある。

## 参考文献

Ingold, Tim

2007 ‘Materials against Materiality.’ in *Archaeological Dialogues* 14(1): 1-16.

The National museum of Ethnology

1962 National Museum of Ethnology Leiden 1837-1962, Leiden: Mouton & Co.

2003 In side out, on site in: redesigning the National Museum of Ethnology, Leiden, the Netherlands. Leiden: BIS Publishers.

Tilley, C., W. Keane, S. Küchler, P. Spyer & M. Rowlands eds.

2006 Handbook of Material Culture. London, California, New Delhi: Sage Publication.

(吉田ゆか子)

## 資料 2. RA による研究動向調査

### 中国南部からベトナム北部への山地民の移住の歴史と現状に関する 研究動向調査

今井彬暁

#### 1. 調査の目的

本調査の目的は、中国からベトナムへと移住した各山地民の移住の歴史をベトナム側の文献資料に基づいて概観し、その上で、民族の移住の結果として生じたベトナム北部の地域状況に関する研究の動向を探ることである。なお、具体的な例示として、本研究は中国雲南省と国境を接するラオカイ省に居住する 4 つの少数民族を取り上げ、ベトナム側の資料に基づいて移住の歴史および文化的現状を概説する。

#### 2. ベトナム西北地方ラオカイ省の民族人口統計

ラオカイ省の人口は、2007 年時点の統計資料によると、593,600 人である。同省にはベトナム多数民族キン族を含む 25 の民族が居住しており、その内、少数民族が占める割合は約 64% である。つまり、同省には 379,900 人の少数民族が居住している。各少数民族の内訳は、多数民族キン族 (Kinh) が 35.9%、次いでモン族 (Hmông) が 22.21%、タイ族 (Tày) が 15.84%、ザオ族 (Dao) が 14.05%、ザイー族 (Giáy) が 4.7%、ヌン族 (Nùng) が 4.4%、そして残りをフーラー族 (Phù Lá)、サンチャイ族 (Sán Chay)、ハニ族 (Hà Nhi)、ラチ族 (La Chí) などが占める (ラオカイ省 HP 2008)。本調査では、民族数が大きく資料も比較的多い民族、すなわちモン族、タイ族、ザオ族、ザイー族の 4 民族を取り上げ、それぞれの民族の移住の歴史を記述し、その上で山地民に関する研究動向を記す。

#### 3. ベトナム北部山地民の移住の歴史

##### 3.1. モン族

ベトナムにおけるモン族の人口はおよそ 788,800 人であり、言語はモン・ザオ語群に属す。モン族は、中国における封建領主に対する抗争の結果、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて数度の波に分けて移住し、当初、現在のハザン省 (Hà Giang) およびラオカイ省 (Lào Cai) に村を築いたとされている (Viện Dân tộc học 1978: 293, Đặng Nghiêm Vạn et al. 2010: 175-176)。かつては焼畑を営んでいたが現在は定住定耕を営む民族として記述され、略奪婚の慣習は現在も続けられている文化的慣習として紹介されている (Đặng Nghiêm Vạn et al. 2010: 178-180)。

##### 3.2. タイ族

ベトナムに居住するタイ族の人口は 1,500,000 を超え、キン族に次いで最も人口の多い民族である。言語は、タイ・ターイ語群に属する。居住地はクアンニン省 (Quảng Ninh)、ラオカイ省 (Lào Cai)、イエンバイ省 (Yên Bái)、カオバン省 (Cao Bằng)、バ



ッカン省 (Bắc Cạn)、タイグエン省 (Thái Nguyên)、トゥエンクアン省 (Tuyên Quang)、ハザン省 (Hà Giang) などである。タイ族は同地周辺に元々居住していた民族であったとされている (Đặng Nghiêm Vạn et al. 2010: 121)。長きにわたるキン (ベト) 族との共存の中でキン族の影響を大いに受けており、葬送儀礼や宗教をはじめ、ベト族と文化的、社会的に類似点の多い民族としてしばしば紹介される (ibid: 124)。

### 3.3. ザオ族

ザオ族は、今日、ベトナムで 621,000 の人口を有する。言語は、モン・ザオ語群に属する。ベトナムの資料によると、ザオ族の中国からベトナムへの移住は明の時代に最も多かったが、その前後にも 12-13 世紀から 20 世紀前半まで継続的に移住を行っていた (Chu Thái Sơn 2005: 12-13)。現在の福建省、広東省、広西チワン族自治区を故地とし、主にベトナム北部に居住している。ザオ族は最も多様な地方グループを有する民族の一つであり、ある資料では 7 つに区分され (Chu Thái Sơn 2005: 12)、別の資料では 11 以上の地方グループに区分されている (Đặng Nghiêm Vạn et al. 2010: 183)。民族学院の資料では、移住の歴史に関してそれぞれの地方グループごとの移住の来歴が記されている (Viện Dân tộc học 1978: 312-313)。仏教、儒教、道教の影響を受けており、中国の文字を長きにわたり宗教関連の書物や系譜に利用している (ibid: 190)

### 3.4. ザイー族

ベトナムのザイー族は、タイ・ターイ語群に属し、ベトナムにおける人口は約 50,000 人である。バットサット省 (Bát Xát)、バオタン省 (Bảo Thắng)、ラオカイ省ムオンクオン県 (Lào Cai, Mường Khương)、ハザン省イェンニン県 (Hà Giang, Yên Ninh) およびドンバン県 (Đồng Văn)、そしてライチャウ省フオントー県 (Lai Châu, Phong Thổ) およびムオンテー県 (Mường Tè) に居住する。およそ 200 年前に、数世帯のザイー族が中国の故地からベトナム北部に移住し、その後、数十年のあいだに、他の世帯も最初の移住者に追随したとされる (Đặng Nghiêm Vạn et al. 2010: 142)。中国ではプイ族として知られ、タイ族、ターイ族、そして中国のプイ族と、言語、衣服、文化慣習において多くの共通性を持つとされている (ibid: 142-143)。

## 4. ベトナム北部山地における研究動向

### 4.1. 最初期の研究動向

ベトナムの山地民に関する民族誌的研究の最初期の蓄積は、古くはフランス植民地時代のフランス人やベトナム戦争時代のアメリカ人によってなされてきた。ベトナム北部の山地民に関する研究には、アバディ (1944 (1924)) や Schrock et al. (1972) などがあり、南部の山地民に関する研究には、Le Pichon (1938) や Mole (1970) などがある。戦時中における山地民に関する調査研究実施の背後には、それぞれの山地民を理解し見方につけることで戦争を有利に進めたいという思惑があった。

### 4.2. 民族識別作業に関する研究

ベトナムの国土に居住する各民族を識別するベトナム国家の試みは、ベトナム民族学

の萌芽的著作である『ベトナムの各少数民族』（*Các dân tộc thiểu số ở Việt Nam*）に遡る（著者名無し 1959）。民族識別作業にまつわる一連の研究は、戦後から取り込まれてきた民族学的調査に基づいており、それらは多様な各山地民に固有な伝統文化を記述するための研究である。こうした研究の背景には、南北統一後のベトナムにおいて、国土全域に居住する多様な民族を多民族国家として一つの国家の下に統合するという目的があった。一連の研究に顕著な特徴は、山地民を外界から切り離された存在として位置付け、外部からの働きかけによって彼らを教化し発展させるという姿勢であった。しかしそうした研究姿勢に対して、近年では、民族識別作業が科学的な民族学的分類に基づくものであるというよりも、極めて政治的な分類であることを指摘する批判的研究がなされている（例えば、Keyes 2002、伊藤 2008）。

#### 4.3. 山地民のエージェンシーに関する研究

上記の民族識別作業にまつわる研究が主に国家的な視点に関連して各民族の現状を分析するアプローチをとっていた一方、1990年代後半からは、土地政策や開発政策などのベトナム政府の政策的介入に対する山地民側からの主体的な働きかけ、すなわち山地民のエージェンシーに着目する研究の視座が導入され始める。そうした研究により、国家の政策と山地民の主体的働きかけとのあいだの相互作用が、地域的に極めて多様な生計活動のあり方を生み出していることが次第に明らかにされつつある（Sikor 2011: 12-14）。

研究の事例としては、市場経済化後の民族間の経済関係の生起および変容について、モン族とキン族のあいだの民族織物の取引関係を扱った Turner (2007) や、同じくモン族とキン族のあいだのカルダモンという商品作物の取引関係を扱った Tugault-Lafleur と Turner (2009)、また市場経済化前後のザオ族とキン族のキャッサバなどの取引関係の変容を扱った Nghiêm & Yanagisawa (2011) がある。市場経済化後の土地、森林政策に関する研究には、土地政策の実施による二つのタイ系民族（Thái, Tày）のコミュニティ内の社会、政治関係の変容を扱った Mellac (2011) や、市場経済化後の森林政策に対し、二つのザオ族の村落がそれぞれの仕方で既存の慣習に基づいた対応を行っている事例を紹介する Sowerwine (2004) がある。

#### 4.4. 山地居住民に付与されてきた既存の範疇の見直し

上述の研究動向に加えて特に近年積極的に取り組まれているのは、山地居住民に対して付与されてきた既存の範疇を掘り崩す作業である。Scott (2009) は、山地民のエージェンシーに着目し、ゾミア（Zomia）に広がる山地民の歴史的な国家機構への抵抗を論じた。これに対し、Michaud (2010) もまたゾミアあるいは東南アジア山塊（Southeast Asian Massif）というキーワードを手掛かりに、国家的枠組みにおいて研究されてきた同地域一帯の山地民を、その枠組みから解き放って考える必要性を論じている（Forsyth & Michaud 2011、Michaud 2010）。国家の枠組みを超えた民族の文化的、社会的営為については、中国の壮族とベトナムのヌン族・タイ族のあいだの国境を越えたラオトン関係に関する研究報告（塚田 2013）や、中国—ベトナムの国境をまたいだキン族商人と漢族商人の取引を記述した研究（Schoenberger & Turner 2008、Turner 2010）がある。また、

既存の範疇を見直す作業のもう一つの方向性は、従来の研究で前提とされていた山地民—平地民という区分への反省を促すものである。Sikor (2011)によると、山地と平地という区分は、空間的多様性を指し示す一つの指標にはなりえるが、それは空間的多様性を形成する原因として解釈されるべきではない。この前提に基づき、彼は、山地—平地の二分法を所与とするのではなく、「山地民」という区分を形成してきた社会過程に照準を絞りなおす研究視座の必要性を指摘している (2011: 24)。

## 5. 今後の研究の展望

上述の整理から、これまでの研究の傾向とこれからの研究の展望について、簡単にまとめる。現在までの研究の動向においては、概して、物質文化および精神文化といった各民族に固有な文化的特質は主にベトナム人研究者によって詳細に記述され、国家や他民族との関わりのなかでの各山地居住民のエージェンシーに着目した研究は海外の研究者によりこぞって取り扱われてきた。しかし山地民のエージェンシーのあり方は一様ではなく、各民族の地域ごとの文化的特質が色濃く反映されていることが近年の研究で明らかにされつつある。こうした前提に立つならば、各民族の地域ごとの文化的特質を十分に踏まえた上で、各民族のエージェンシーを描き出す作業が必須の工程となる。現状のベトナム北部山地における研究蓄積においては、上述の作業工程を経た民族誌的資料は決して豊富とは言えない。すなわち、これからの研究における展望としては、特にベトナム人研究者により蓄積されてきた各民族の地域ごとの文化的特質に関する文献資料と、近年の学術的発展を土台とした各民族のエージェンシーに照射する研究方法、という二者の研究蓄積の営為を接合した民族誌的資料の作成が課題であると考えられる。そうした接合により、国家と民族の関係、また多様な民族間関係を再考し、より望ましい共存のあり方を模索していくことが、ベトナムの民族研究において学術的にも社会的にも要請される課題である。

## 参考文献

【英語】

Chu Thái Sơn chủ biên

2005 *Người Dao*. Nhà Xuất Bản Trẻ.

Đặng Nghiêm Vạn, Chu Thái Sơn, Lưu Hùng

2010 *Ethnic Minorities in Vietnam, Fourth Edition*. Hanoi: Thế Giới Publishers.

Dương Bích Hạnh

2011 Changing Labour Relations in a Hmong Village in Sa Pa, Northwestern Vietnam. In *Upland Transformations in Vietnam*. Thomas Sikor, Nghiêm Phương Tuyền, Jennifer Sowerwine and Jeff Romm (eds), pp. 244-258. NUS Press, National University of Singapore.

Forsyth, Tim and Jean Michaud

2011 Rethinking the Relationships between Livelihoods and Ethnicity in Highland China, Vietnam, and Laos. in *Moving Mountains: Ethnicity and Livelihoods in Highland China, Vietnam, and Laos*. Jean Michaud and Tim Forsyth eds. Vancouver, Toronto:

University of British Columbia Press.

Keyes, Charles

- 2002 Presidential Address: "The People of Asia"—Science and Politics in the Classification of Ethnic Groups in Thailand, China, and Vietnam. *The Journal of Asian Studies* 61 (4): 1163-1203.

Khong Dien

- 2002 *Population and Ethno-demography in Vietnam*. Silkworm Books.

Mellac, Marie

- 2009 Territorial Construction and Ethnic Relations in the Context of Collectivization. In *Inter-Ethnic Dynamics in Asia: Considering the Other through Ethnonyms, Territories and Rituals*. Christian Culas and Francois Robinne eds. Routledge.

Mellac, Marie

- 2011 Land Reform and Changing Identities in Two Tai-Speaking Districts in Northern Vietnam. In *Moving Mountains: Ethnicity and Livelihoods in Highland China, Vietnam, and Laos*. Jean Michaud and Tim Forsyth eds. Vancouver, Toronto: University of British Columbia Press.

Michaud, Jean

- 2010 Editorial – Zomia and beyond. *Journal of Global History* 5: 187-214.

Michaud, Jean and Sarah Turner

- 2000 The Sa Pa Marketplace, Lao Cai Province, Vietnam. *Asia Pacific Viewpoint* 41 (1): 85-100.

Mole, Robert L.

- 1970 *The Montagnards of South Vietnam: A Study of Nine Tribes*. C. E. Tuttle Co.

Nghiêm Phương Tuyên and Masayuki Yanagisawa

- 2011 Market Relations in the Northern Uplands of Vietnam. in *Upland Transformations in Vietnam*. Thomas Sikor, NghiêM Phương Tuyên, Jennifer Sowerwine and Jeff Romm (eds), pp. 1-24. NUS Press, National University of Singapore.

Scott, James C.

- 2009 *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven, CT: Yale University Press.

Schrock, Joann L. et al.

- 1972 *Minority Groups in North Vietnam*. Joann L. Schrock et al. pp. 1-35. Washington DC: Headquarters of the Department of the Army.

Schoenberger, Laura and Sarah Turner

- 2008 Negotiating Remote Borderland Access: Small-Scale Trade on the Vietnam-China Border. *Development and Change* 39 (4): 667-696.

Sikor, Thomas

- 2011 Introduction: Opening Boundaries. in *Upland Transformations in Vietnam*. Thomas Sikor, NghiêM Phương Tuyên, Jennifer Sowerwine and Jeff Romm (eds), pp. 1-24. NUS Press, National University of Singapore.

Sowerwine, Jennifer

- 2004 Territorialisation and the Politics of Highland Landscape in Vietnam: Negotiating Property Relations in Policy, Meaning and Practice. *Conservation & Society* 2 (1): 97-136.

Tugault-Lafleur, Claire and Sarah Turner

- 2009 The Price of Spice: Ethnic Minority Livelihoods and Cardamom Commodity Chains in Upland Northern Vietnam. *Singapore Journal of Tropical Geography* 30: 388-403.

Turner, Sarah

- 2007 Trading Old Textiles: the Selective Diversification of Highland Livelihoods in Northern Vietnam. *Human Organization* 66 (4): 389-404.
- 2010 Borderlands and border narratives: a longitudinal study of challenges and opportunities for local traders shaped by the Sino-Vietnamese border. *Journal of Global History* 5: 265-287.

#### 【フランス語】

Abadie, Maurice

- 1924 *Les races du Haut-Tonkin de Phong-tho à Lang-son*. Paris: Challamel. (モオリス・アバディ 1944 『トンキン高地の未開民』民族学協会調査部訳、三省堂) .

Le Pichon

- 1938 *Les Chasseurs de sang*. Amis du Vieux Hué.

#### 【日本語】

伊藤正子

- 2008 『民族という政治：ベトナム民族分類の歴史と現在』、三元社。

塚田誠之

- 2013 「もう一つの親族、“ラオトン”：チワン（壮）族とベトナム民族とのネットワークの一側面」『中国の「国境文化」の人類学的研究』平成 22～24 年度科学研究費補助金、基盤研究（B）研究成果報告書。

#### 【ベトナム語】

Công Thông Tin Điện Tử (ラオカイ省 HP)

- 2008 Giới thiệu chung: Dân số  
(<http://laocai.gov.vn/gioithieuchung/Trang/danso.aspx>)

Viện Dân tộc học

- 1978 *Các dân tộc ít người ở Việt Nam (các tin phía Bắc)*, Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội.

著者名無し

- 1959 *Các dân tộc thiểu số ở Việt Nam*. Nhà Xuất bản Văn hóa, Hà Nội.

# 近現代内モンゴル社会文化変遷に関する研究動向文献調査

白福英

## 1. 調査目的

近現代内モンゴル社会文化変遷に関する研究の動向を明確にする。

## 2. 調査方法

主にみんぱくの図書室を利用し、文献を収集する。そして収集した資料を研究テーマごとに整理する。

## 3. 近現代内モンゴル社会文化変遷に関する研究動向文献調査

内モンゴル社会文化の変容をめぐっては、漢民族移民による開墾、定住化、環境問題、移動範囲の縮小、牧畜形態、社会組織機能の喪失、生業転換、資源開発、移住、生態移民などを対象とした研究が行われてきた。

ソーハン・ゲレルト[2001]は牧地退化を発生させる根本的な原因は社会的変化にあると指摘している。また、内陸アジアの牧畜地域の環境問題は定住化によって起こった牧畜システムにおける移動性の停止と関連づけて論じられている[ Humphrey and Sneath 2001]。これに対して、尾崎[2003]は人の定住化は家畜の非移動を意味しないと反論している。とはいえ、定住化によって移動の縮小化[Humphrey and Sneath 2001 ; 小長谷 2001a ; 阿拉騰 2002]及び季節移動パターンの変遷[小長谷 2003]や遊牧型草原牧畜業から定住定牧型牧畜業へと牧畜形態の変遷[阿部 1984 ; 周ら 1995]がもたらされ、定住後の牧畜経営が多様化した[小長谷 2001b]のは事実であろう。特に、遊牧生産技術とそれを支える生産基盤が崩壊し、遊牧社会組織の諸機能が失われつつあることは多くの論者が指摘するところである。例えば、定住化に伴う請負制によって、牧民間の連帯が衰退し、アトム化<sup>8</sup>的な状況が生じた[楊海英 2001 ; 海山 2004 ; 王晓毅 2009]ことである。

また、定住化によって牧畜民の生業構造に変化がみられ[松原 2004 ; 平田ら 2007]、牧畜民の貧困化をもたらした[海山 2004]。さらに定住化に伴う農耕の導入や異民族の入植により牧畜地域の生態退行を引き起こした[稲村、尾崎 1996 ; 色音 1998 ; 敖仁其 2004 ; 閻天靈 2004 ; 田曉利 2005 ; 平田 2007]ことにも触れておかねばならない。

以上に述べた定住化政策に関する研究は定住化に否定的な傾向があるが、これらの研究に対し、梅棹[1990]は定住化が畜舎を利用する家畜管理や家屋の固定化を導き、その結果として牧畜形態の完成に近づいていると考えている。

内モンゴル牧畜地域では、定住化後の2003年より、環境保全を目的に過放牧が行われている地域の牧畜民を移住させ、草原の生態回復を試みる「生態移民政策」が実行された。その結果、牧畜民の生業転換がみられ[マイリーサ 2004 ; スエー 2005 ; 那木

---

<sup>8</sup> ホトアイルと呼ばれる生産単位が解体して、一世帯が一つの生産単位になることを指す。

拉 2009]、貧困を招いた[児玉 2005]という指摘がある。

以上に述べたように、内モンゴル牧畜研究は定住化、砂漠化、牧畜形態などさまざまな視点から研究されてきた。しかし、研究の多くは、シリングル盟とオルドス地域に集中している一方で、ホロンボイルとオラド地域での研究が少なく、対象地域に偏りがみられる[池谷 2006 : 30]。

漢化の現象を分析した研究について、色音[1998]はシンバラグ、バーリン、トゥメト、オンノード、ホルチンモンゴルなど五つのモンゴル地域の社会文化変容について事例分析し、農耕社会の影響により遊牧生産生活が変容したと指摘している。包智明[1999]はジリム盟（現在の通遼市）科左後旗の四つのモンゴル農耕ガチャー（村）を研究対象にし、この四つのガチャーの半農半牧経済形態は多数の漢族移民による開墾によるものと論じている。王玉海[2000]は清代末期内モンゴル東部における「支援辺境」政策により、東部モンゴル族が牧畜から農耕へと生業転換した過程を明らかにした。ブレンサイン[2003]はモンゴル族農耕村落の形成はモンゴル社会内部で自然にできたものではなく、漢族移民による開墾の結果と指摘している。閻天靈[2004]は清朝及び民国時代に移入してきた漢族移民の影響により、内モンゴルの民族構造、行政制度、経済に歴史的な変化が生じ、これによって内モンゴルは遊牧社会から蒙漢雑居、旗県両立、農牧発展した多元社会へと変貌したと指摘している。

これらの研究に対し、雲肖梅[2007]はトゥメト・モンゴル人のアイデンティティの変遷を考察し、トゥメト人は、すでに 1940 年代に漢文化から深刻な影響を受け、モンゴル語を喪失したが、衣食住、結婚、葬式礼儀などの面においては、トゥメト人独特の文化要素を有していると主張している。

以上の研究から、近現代内モンゴル社会文化変遷に関する研究の動向は牧畜に焦点を当てた研究と、現地の人々はいかに民族文化を失い、漢化の現象を分析した研究がなされてきたことがわかる。

## 参考文献

### 【日本語】

阿部治平

1984 「内モンゴル牧畜業における新スルク制の登場と問題点」『モンゴル研究』7 : 57-87。

阿拉騰

2002 「内モンゴルにおけるチャハル人の生計活動の変化」『東北アジア諸民族の文化動態』煎本孝[編]、pp. 441-464、北海道大学図書刊行会。

稲村哲也、尾崎孝宏

1996 「『中国内蒙古自治区における環境と人口』調査報告—漢族移住、生産様式の変化と環境問題—」『リトルワールド研究報告』(13) : 57-89 野外民族博物館リトルワールド。

池谷和信

2006 『現代の牧畜民：乾燥地域の暮らし』（日本地理学会『海外地域研究叢書』4）古今書院。

梅棹忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集 2 モンゴル研究』 中央公論社。

雲肖梅

2007 「トゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティの変遷」 煎本孝、山田孝子編『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』163-190 頁、京都大学学術出版社。

尾崎孝宏

2006 「モンゴル国東部牧畜地域における開発と移住」、伊藤亜人先生退職記念論文集編集委員会編『東アジアからの人類学—国家・開発・市民—』、pp. 207-222 風響社。

海山

2007 「内モンゴル遊牧経済転換の地理的分析」『東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告Ⅱ モンゴルの環境と変容する社会』（東北アジア研究センター叢書第27号）pp. 187-198 明倫社。

小長谷有紀

2001a 「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営」、佐々木信彰[編]『現代中国の民族と経済』pp. 185-207 世界思想社。

2001b 「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の牧畜経営の多様化：牧地配分後の経営戦略」横山廣子[編]『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』国立民族博物館調査報告(20)：15-43 国立民族学博物館。

2003 「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷—錫林浩特市の事例から」塚田誠之[編]『民族の移動と文化の動態』pp. 69-106 風響社。

黒河功・プルジャップ

1998 『遊牧生産方式の展開過程に関する実証的研究』農林統計協会。

周建中、大槻恭一、神近牧男

1995 「中国内モンゴル自治区における牧畜業の変遷」『沙漠研究』5：71-84。

シンジルト

2005 「中国西部辺境と「生態移民」」小長谷有紀、シンジルト、中尾正義編『中国の環境政策 生態移民』昭和堂。

スエー

2005 「「生態移民」による新たな草原開拓—内モンゴル自治区シリングル盟鑲黄旗における牧畜民の事例から」小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編『中国の環境政策 生態移民』pp. 77-96 昭和堂。

ズリフェイヤ マイマイティ・志賀永一・黒河功

2004 「中国における遊牧民の定住化施策に関する考察—新疆ウイグル自治区における事例分析—」『農経論叢』60：43-53。

田曉利

2005 「現代中国の経済開発と遊牧社会の変容—内モンゴル自治区を事例に」政治経済研究所[編]『政経研究』84：91-105。

2011 「中国におけるエネルギー資源開発の現状と課題—内蒙古自治区を事例に—」



愛知大学現代中国学会[編]『中国 21 (特集) 国家・開発・民族』34 : 95-116  
東方書店。

那木拉

2009 「牧畜民から生態民へ—内モンゴル・シリーンゴル盟を事例として—」『千葉  
大学人文社会科学研究』18 : 111-128。

平田昌弘ら

2007 「中国新疆ウイグル自治区昌吉市阿什里合薩克族郷における定住化政策と牧  
畜形態の変遷」『沙漠研究』17 (3) : 123-132。

平田昌弘

2007 「モンゴル中央部における宿営地の季節移動システム—モンゴル牧畜民の定  
住化はあり得るのか?—」『沙漠研究』17 (2) : 71-76。

ブレンサイン

2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』 風間書房。

プルジャップら

2006 「新疆地域における遊牧業展開基盤の変容 : 遊牧民の定住化施策の背景をめぐ  
って」『北海道大学農経論叢』62 : 77-87。

マイリーサ

2004 「西部大開発の中の少数民族の生態移民 - 肅南ヨゴール族自治州における調査  
報告」、『中国 21 (特集) 中国西部大開発』18 : 79-86。

楊海英

2001 「遊牧から定住へ」小長谷有紀『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴  
史民族学的研究』pp. 91-100 国立民族学博物館・民族学研究開発センター。

### 【中国語】

敖仁其[主编]

2004 『制度变迁与游牧文明』内蒙古人民出版社。

包玉山

2003 『草原畜牧业的历史与未来』内蒙古教育出版社 pp. 39-40。

郝维民

1991 『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社。

色音

1998 『蒙古游牧社会的变迁』内蒙古人民出版社。

王玉海

2000 『发展与变革—清代内蒙古东部由牧向农的转型』内蒙古大学出版社。

王晓毅

2009 『环境压力下的草原社区—内蒙古六个嘎查村的调查』社会科学文献出版社。

张秉铎

1987 『畜牧业经济辞典』内蒙古人民出版社。

闫天灵

2004 『汉族移民与近代内蒙古社会变迁研究』民族出版社。

【モンゴル語】

包智明

1999 『ホルチンモンゴル農民の生活』（モンゴル語）遼寧人民出版社。

Caroline Humphrey、David Sneath （ナゾンバヤルら訳）

2001 『内陸アジアの文化と環境』 内蒙古人民出版社。

# 歴史的空間・建築物の博物館としての保存・活用に関する研究動向調査

邱君妮

## 1. 研究目的

今日、世界各地において「文化遺産」をテーマとしたコミュニティ振興が顕著に見られるようになり、コミュニティ振興と結びつきながら文化遺産の保存・活用に力を注ぐ博物館が各地に設けられるようになってきている。「こうした世界的な文化遺産をめぐる動きに伴い、これまで有形文化遺産の収集・保存・研究・公開の場として位置づけられてきたミュージアム（博物館・美術館）にも、その遺産の創造的な継承に向けて、新たな役割が求められてきている」（吉田 2011）。

文化遺産のうち、特に歴史的建築物は、時代の証拠であるとともに文化の蓄積であり、それらを保存・活用することは、文化財のハードの部分を再利用するだけでなく、そこに蓄積された歴史・文化の価値や記憶の保存・継承につながることを期待される。すなわち、歴史的建築物が持っている歴史と文化の価値や記憶が、博物館を通じて保存されながら、その所在する地域の人々に自己の歴史・文化を注視することを促したり、文化的アイデンティティを高めること、さらには地域社会に新たな価値や記憶を創出することなどが期待されているのである。

このように物質的なモニュメントのみならず非物質的な記憶・象徴も保存・活用しようとする歴史建築物を活用した博物館の活動は、例えばエコミュージアム構想やまちかど博物館の試み、あるいは歴史的遺構をその場で保存するサイトミュージアム等のかたちで、世界各地で展開されるようになってきている。

しかし、急速に変化してゆく社会の中で、歴史的建築物が地域文化を表象するメカニズムをどのように伝承するのか、あるいは博物館として活用されることによって、地域社会とどのように結びつき、時代に合わせて再生されていくのか、という問題点は、世界中の博物館の共通の問題点であり、博物館学界の重要な研究課題の一つと指摘されているにも関わらず、未だ十分な議論はなされていないのが現状である。

そこで、本調査では、これからの地域社会において文化遺産を保存・継承するための博物館のあり方、または歴史建築物を活用した博物館の歴史的展開及び地域に与える影響や効果について現状の問題点と今後の可能性について検討するため、日本と台湾を中心に、「歴史的空間・建築物を博物館として保存・活用する」先行研究について渉猟し、どのように研究されてきたかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

今回の戦略 RA では、「歴史的空間・建築物を博物館として保存・活用する」研究動向についての文献調査を行うため、主に国立民族学博物館の図書室及びデータベース等を利用しながら、日本と台湾を中心に、各国の先行研究<sup>9</sup>を狩猟する。

## 3. 「歴史的空間・建築物を博物館として保存・活用する」研究動向調査結果

---

<sup>9</sup> 文献の調査対象は中国語、日本語、英語の3言語とする。

これまで、歴史的建築物を博物館として保存・活用することに関する研究の多くは、建築学の視点から、歴史的建築物を博物館として保存・活用することの方法論に関する研究（例えば、Relph 1973、稲垣 1984、半澤 1991、Delafons 1997、張旂彰 2000、鈴木 2001 などがある）に限られており、そのほか、歴史的建築物を保存・活用することによるまちづくりへの貢献についての事例研究も多くなされている（例えば、大河編 1997、清水ほか編 1999 などがある）。

一方、博物館学的な視点からは、単体の博物館やエコミュージアム及びまちかど博物館などの事例を博物館経営の手法として考察するという先行研究（例えば、角野 1996、張正侖 2008、里見 2011 などがある）はすでに見られるが、その多くは事例報告にとどまっている。

そのほか、博物館展示の実態について分析した研究がある。康（2011）は、建築史から空間概念をまとめて、アンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre）の「空間的生産（The production of space）」の「空間文化」の概念を基礎とし、エドワード・ソジャ（Edward William Soja）の「第三空間（Third space）」の概念を加えて、旧土地銀行の建物を国立台湾博物館の分館として保存・活用した事例の歴史的空間と展示の関係を分析している。すなわち、博物館はいかに「空間文化」の概念で、歴史的建築物を「研究（research）」、「解釈（interpretation）」、「展示（exhibit）」するかについて分析した上で、博物館を通じて歴史的建築物が代表している空間文化の再現及び文化価値を展示する方策について述べている。また、楊（2009）は、同じ建築学の空間概念を使って、歴史的建築物の博物館化という視点から、台湾の北、中、南部の代表的な事例を総括分析している。

しかし、これらの先行研究は、あくまで建築学の空間概念を使って、歴史的建築物を博物館として保存・活用する際、建築物内部空間における博物館の展示活動のみを重視しているに過ぎず、歴史的建築物を博物館として保存・活用することが「歴史的建築物にどのように活かされるのか」ということまでは言及していない。

一方、文化行政に関する多くの研究は、「未使用空間を再利用する」の政策の視点から分析している。例えば、高（2012）と方（2006）は、それぞれ大稲埕と新竹の事例を分析することによって、文化政策に従って歴史的建築物を保存・活用することが、いかに都市開発に貢献するかということについて述べている。そのほか、黄（2008）は、文化政策によって、歴史的建築物を保存・活用することが文化観光開発の資源として経済波及効果をもたらすことを指摘している。廖（2009）は、台北市における歴史的建築物を博物館施設として保存・活用することに関する法令を分析している。

これらの個別事例を検証することは、歴史的建築物に関する文化政策の問題点を明らかにし、将来の政策に向けた提言までつなげる研究アプローチとして大変参考になる。しかし、台湾における「未使用空間を再利用する」政策の視点からの分析は、歴史的建築物の「文化遺産の保護」や「文化的アイデンティティの形成」などについてまでは触れていない。

一方、木内ほか（2008）と垣内（2011）は、環境価値の計測手法でよく使われた仮想的市場評価法（CVM; Contingent Valuation Method）とコンジョイント分析（Conjoint analysis）等の表明選好法（アンケート）の手法を用いて、文化財の価値を評価し、地域の文化資源の保存と活用について新たな分析手法を提示している。これらの個別事例

を検証することは、文化財保存・活用の受益者は誰か、その便益の規模はどのくらいなのか、できるだけ客観的に定量に推定しようとする研究方法として、大変参考になる。

上述のように、歴史的建築物を博物館として保存・活用することとコミュニティ振興のつながりを博物館学的な視点から理論的かつ実証的に考察した研究は、管見の限り見あたらない。しかし、共通の観点に基づく関連の研究としては、次のようなものが参照できる。

博物館における、歴史・文化の価値・記憶について、Kavanaugh (2000) は、博物館と感情に関する概念を探るため、北米、オーストラリア及びヨーロッパの研究を分析しながら、「博物館見学は、記憶と現在が分離することのない唯一無二の経験である」と述べている。

Mack (2008) は、博物館を「記憶の場 (site of memory)」として捉え直す。まずは、博物館とそのコレクションに対して、記憶は単に「静的な判断の基準 (a static point of reference) ではなく、現在進行中の動き (on-going dynamic) である」、「有形と無形の文化遺産を結びつけるものである」、「歴史の固定観念に挑戦し、過去について様々な解釈を許容し、可能性ある未来を開く」とし、最後に、これらの動きは、「コレクションを博物館資料と見るのか、物語の触媒と見るのか、または博物館を貴重品金庫と見るのか、現在における記憶の場と見るのか」という新たな見方を実現するための挑戦と記述している。

吉田 (2011) は、Mack の概念を踏まえ、博物館のコレクションだけではなく、実際に広島平和記念資料館、ホロコースト記念博物館、大阪人権博物館を事例とし、記憶の場であり、記憶の継承を最も重要な使命としている博物館のあり方を考察している。博物館を固定した歴史記述の場とするのではなく、そこに観客の参加、観客個人の記憶の想起というプロセスを組み込むことで、多様な歴史像を創出し、過去についてのより深く豊かな理解が生み出されることを示唆すると指摘している。

これらの先行研究において明らかにされた現代社会における多様な価値観を配慮しながら、記憶を伝承するための新たな博物館のあり方をどのように考えるか、という観点を踏まえつつ、博物館が歴史的建築物の保存によって、地方の記憶を継承することの課題と可能性を明らかにすることが今後の研究には求められる。

博物館とコミュニティの関係について、Bennett (1988) は、博物館とコミュニティの関係は対立ではなく、博物館とコミュニティの対話性を注視し、博物館がコミュニティ振興の方法になると主張している。

さらに、博物館が地域社会とのつながりをより強く持つことが求められる現代において、様々な視点から地域博物館を焦点化し、今後の地域博物館のあり方を探る研究が多くなされている。例えば、伊藤 (1993) は利用者側に主体を置き、市民の地域生活と関わる学習・研究活動を育み、支援する博物館のあり方を示す「地域博物館」を提唱している。川添ほか (2001) は、博物館を拠点にした地域振興は博物館の展示により推進されることを、展示の企画立案から開館の際まで検証している。また、金山 (2003) は博物館の社会的役割を地域住民と共に考え、その実践活動を通じてまちづくりに及ぶ効果があることを示し、こうした博物館は今後の博物館のあるべき姿であると提唱している。

Crook (2006) は、博物館がコミュニティの発展を促進することに注目し、南アフリ

カ (District Six Museum)、メキシコ (community museum networks) 及び北アイルランド (community exhibitions)における事例研究を行い、「コミュニティ (community)」の単語は、「観衆 (audience)」、「公衆 (public)」、「来館者 (visitor)」という言葉に置き換えられ、博物館はより理解しやすく、歓迎され、適切なサービスを創造することを目指すようになっていることを反映している、と述べている。そして、イギリスとアメリカにおける博物館政策の変化を分析することにより、博物館はコミュニティに対して2つの役割を果たすべきであるとする。すなわち、文化遺産を通じてコミュニティ・アイデンティティを表現することと、コミュニティの多様性を認識しながら、社会変化とともにコミュニティの発展及び社会問題の改善に努力することである。また、博物館は「地元のアイデンティティ (local identity)」と「誇り (pride)」を醸成する方法であることを示す一方で、コミュニティ及び「社会的包摂 (social inclusion)」が政治的に利用される場合は、「排他性 (exclusions)」を伴う危険性もあると指摘している。

これらの先行研究において明らかにされたコミュニティ博物館の概念と、地域に対して博物館が果たすべき役割は、今後の研究の視点として大変参考になる。

以上のような先行研究では、博物館における歴史・文化の価値・記憶の継承や、地域に与える影響、さらに歴史的建築物などの文化遺産の文化的真正性 (cultural authenticity) 等についてまで、一連の視点から明らかにするような研究は、未だ十分には進んでいないと考えられる。

## 主な参考文献

【日本語】

青木隆浩

2013 『地域開発と文化資源—歴博フォーラム民俗展示の新構築』東京：岩田書院、185p。

網野善彦、後藤宗俊、飯沼賢司編

2000 『ヒトと環境と文化遺産：21世紀に何を伝えるか』東京：山川出版社、248p。

有川智、阪田知彦、木内望、武藤正樹

2008 「価値評価手法の適用可能性と課題：近代期における歴史的公共建築物の保全における価値評価に関する研究 その4(価値評価,建築経済・住宅問題)」『学術講演梗概集 F-1』、pp1301-1302。

石川宏之、大原一興、山方桂

1998 「歴史的建造物の転用による博物館施設運営上の課題—歴史的建造物の保全活用に関する研究その2—」『日本建築学会学術講演梗概集 E1』 pp111-112。

岩崎美紗、大原一興、藤岡泰寛

2008 「歴史的建造物活用による博物館施設の地域との関わりに関する研究—歴史的建造物の保全活用に関する研究その3—」『日本建築学会学術講演梗概集 E1』 pp33-36。

岩本通弥

2013 『世界遺産時代の民俗学—グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』東京：風響社、418p。

上山信一、稲葉郁子

2003 「進化するミュージアム—地域と人々の潜在力の開拓」『ミュージアムが都市を再生する』東京：日本経済新聞社、pp65-100。

王惠君、二村悟

2010 『図説台湾都市物語：台北・台中・台南・高雄』東京：河出書房新社、143p。

大河直躬編

1997 歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』東京：学芸出版社、254p。

大貫良夫

1997 「ものの見せ方—博物館と展示」『「もの」の人間世界』東京：岩波書店、pp263-281。

大原一興、石川宏之、山方桂

1998 「歴史的建造物を利用した博物館における活用手法の実態—歴史的建造物の保全活用に関する研究その1—」『日本建築学会学術講演梗概集 E1』pp109-110。

荻野昌弘編

2002 『文化遺産の社会学—ルーヴル美術館から原爆ドームまで』東京：新曜社、348p。

垣内恵美子

2011 『文化財の価値を評価する』東京：水曜社、203p。

角野幸博

1996 「まちづくりと文化施設」大堀哲編『ミュージアム・マネジメント博物館運営の方法と実践』東京：東京堂、430p。

金山喜昭

2001 日本の博物館史』東京：慶友社、243p。

2003 『博物館学入門—地域博物館学の提唱』東京：慶友社、251p。

金子淳

2001 『博物館の政治学』東京：青弓社、205p。

川添登、日本展示学会展示学講座実行委員会

2001 『地域博物館への提言—討論・地域文化と博物館』東京：ぎょうせい、239p。

川那部浩哉編

2000 『博物館を楽しむ：琵琶湖博物館ものがたり』東京：岩波書店、236p。

木内望

2008 「歴史的・文化的価値を有する近代期の建造物の再生と活用に関する研究(特集 国土技術政策総合研究所におけるプロジェクト研究)」『建設マネジメント技術』(365)、pp23-26。

国立歴史民俗博物館編

2003 『歴史展示とは何か—歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来』東京：株式会社アム・プロモーション、247p。

里見親幸

2011 「地域を活かすエコミュージアム」『静岡県博物館協会研究紀要』(35) pp12-17。

住宅総合研究財団、民家研究委員会

2001 『古民家の保存・活用のための方法論的研究—古民家の地域内保全と民家展示

- 施設の考察一』東京：住宅総合研究財団、82p。
- 清水真一、三船康道、蓑田ひろ子、大和智編  
1999 『歴史ある建物の活かし方—全国各地 119 の活用事例ガイド』東京：学芸出版社、175p。
- 新建築学大系編集委員会  
1999 『歴史的建造物の保存』東京：彰国社、483p。
- 鈴木博之  
2001 『現代の建築保存論』東京：王国社、221p。
- 瀬川昌久編  
2003 『文化のディスプレイ』東京：株式会社風響社、262p。
- 田川泉  
2005 『公的記憶をめぐる博物館の政治性：アメリカ・ハートランドの民族誌』東京：明石書店、295p。
- 玉村雅敏  
2013 『地域を変えるミュージアム—未来を育む場のデザイン』東京：英治出版、320p。
- 日本建築学会近畿支部環境保全部会編  
1993 『近代建築物の保存と再生』千葉：都市文化社、222p。
- 野田邦弘  
2007 「都心の歴史的建築物にアーティストが集う」佐々木雅幸、総合研究開発機構編『創造都市への展望—都市の文化政策とまちづくり—』東京：学芸出版社、pp245-268。
- 土生田純之編  
2009 『文化遺産と現代』東京：同成社、257p。
- 浜口哲一  
2000 『放課後博物館へようこそ：地域と市民を結ぶ博物館』東京：地人書館、年、239p。
- 半澤重信  
1991 『博物館建築—博物館・美術館・資料館の空間計画』東京：鹿島出版会、346p。
- 平井京之介  
2013 「タイのコミュニティ博物館についての一考察：博物館か、寺院か？」国立民族学博物館研究報告 37(3)、pp281-310。
- 福西加代子  
2011 「ミュージアム展示をめぐる人びと—広島県呉市・大和ミュージアムを事例に」田中雅一、稲葉穰編集『コンタクト・ゾーンの人文学(第2巻)Material Culture/物質文化』京都：晃洋書房、pp38-60。
- 藤木庸介編著  
2010 『生きている文化遺産と観光—住民によるリビングヘリテージの継承—』東京：学芸出版社、230p。
- 吉田憲司  
1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：



岩波書店、267p。

2011 『博物館概論』東京：財団法人放送大学教育振興会、298p。

2013 『文化の「肖像」—ネットワーク型ミュージオロジーの試み』東京：岩波書店、256p。

劉素真

1999 「歴史的視座から見る台湾の博物館の役割」『美術教育学:美術科教育学会誌』(20)、pp433-443。

アロイス・リーグル著、尾関幸訳

2007 『現代の記念物崇拜—その特質と起源』東京：中央公論美術出版、100p。

アンリ・ルフェーヴル著、斎藤日出治訳・解説

2000 『空間の生産』東京：青木書店、22p。

エドワード著・レルフ著、高野岳彦ほか訳

1999 『場所の現象学』東京：筑摩書房、341p。

#### 【英語】

Bennett, T.

1995 *The birth of the museum: history, theory, politics*. London: Routledge. 278p.

Boswell, D. & Evans, J. ed.,

1999 *Representing the nation: a reader: histories, heritage, museums*. London: Routledge. 488p.

Cameron, D. F.

2004 The museum, a temple or the forum. In Anderson, G. ed. *Reinventing the museum: historical and contemporary perspectives on the paradigm shift*. Walnut Creek, Calif: AltaMira Press. pp61-73.

Clifford, J.

1997 Museum as contact zones. In *Routes: travel and translation in the late twentieth century*. Cambridge, Mass: Harvard University Press. pp188-219.

Corsane, G.

2004 *Heritage, museums and galleries: an introductory reader*. London: Routledge. 392p.

Delafons, J.

1997 *Politics and preservation: a policy history of the built heritage 1882-1996*. London: Routledge. 215p.

Dodd, J. & Sandell, R. ed.

2001 *Including museums: perspectives on museums, galleries and social inclusion*. Leicester: Leicester Research center for Museums and Galleries. 133p.

Feilden, B. M.

1982 *Conservation of historic buildings*. Oxford; Woburn: Architectural Press. p6.

Fitch, J. M.

1982 The architectural museum: indoors and out. In *Historic preservation: curatorial management of the built world*. Charlottesville: McGraw Hill Higher Education.

pp219-241.

Greenhill, E. H.

1992 *Museums and the shaping of knowledge*. London; New York: Routledge. 232p.

Hudson, K.

1987 *Museums of influence*. Cambridge: Cambridge University Press. 220p.

Jokilehto, J.

2002 *History of architectural conservation*. London: Routledge. 370p.

Karp, I. & Kreamer, C. M. & Lavine, S. D. ed.

1992 *Museums and communities: the politics of public culture*. Washington: Smithsonian Institution Press. 614 p.

Kavanagh, G.

2000 *Dream spaces: memory and the museum*. London: Leicester University Press. 208p.

Macdonald, S.

2006 *A companion to museum studies: Blackwell Companions in Cultural Studies*. Malden, Mass.: Blackwell Pub. 592p.

Mack, J.

2003 *The museum of the mind: art and memory in world cultures*. London: British Museum Pubns Ltd. 160p.

2010 Museum & Object as Memory-Site. In Yoshida, K. & Mack, J. ed. (2010). *Preserving the cultural heritage of Africa: Crisis or Renaissance?* Suffolk: James Currey. pp13-26.

Peers, L. & Brown, A. K. ed.

2003 *Museums and source communities: a routledge reader*. London: Routledge. 280p.

Relph, E.

1976 *Place and placelessness: Research in planning & design*. London: Routledge Kegan & Paul. 156p.

Soja, E. W.

1996 *Thirdspace: journeys to Los Angeles and other real-and-imagined Places*. Cambridge, Mass: Blackwell. 334p.

Watson, S. ed.

2007 *Museums and their communities*. London: Routledge. 568p.

Witcomb, A.

2003 *Re-imagining the museum: beyond the mausoleum (museum meanings)*. London: Routledge. 208p.

#### 【中国語】

方迺中

2006 『都市再生與閒置空間再利用策略之研究』台南市：國立交通大學、116p。

王志弘

2011 『文化治理與空間政治』台北市：群學、403p。

- 王嵩山  
2012 『博物館與文化』 台北市：國立臺北藝術大學、299p。
- 王嵩山  
2012 『博物館蒐藏學』 台北市：原點出版、188p。
- 王韻涵  
2010 『古蹟博物館營運之發展研究—以淡水古蹟博物館為例』 新北市：淡江大學、179p。
- 行政院文化建設委員會編  
2010 『文化法規彙編』 台北市：行政院文化建設委員會、1274p。
- 林華苑  
2002 『古蹟保存政策與再利用策略之研究』 台北市：國立政治大學、149p。
- 林會承  
2011 『臺灣文化資產保存史綱』 台北市：遠流、242p。
- 徐純  
2011 『文化載具：博物館的演進腳步』 台北市：臺灣博物館專業協會、247p。
- 高如萱  
2012 『台灣地區文化帶動區域再生之研究—以「都市再生前進基地」進駐大稻埕為例』 台南市：國立臺南藝術大學、114p。
- 康綉蘭  
2011 『歷史建築空間的文化詮釋與再現—以國立臺灣博物館為例』 台北市：國立臺北藝術大學、116p。
- 張正依  
2008 『博物館與文化產業的傳播分析—以淡水古蹟群為例』 新北市：淡江大學、155p。
- 張旂彰  
2000 『再利用歷史性建築為展示館之研究』 台南市：國立成功大學、151p。
- 張寶釧  
2005 『揭開紅毛城四百年歷史-淡水紅毛城修復暨再利用國際學術研討會論文集』 新北市：臺北縣立淡水古蹟博物館、205p。
- 張寶釧  
2008 『以淡水古蹟博物館經營做為地方發展觸媒之研究』 桃園市：中原大學、205p。
- 傅朝卿  
2000 「歷史建築的定義與意義」『歷史建築保存與再生研討會』 台南市：國立成功大學、pp12-15。
- 黃雅雯  
2008 『台南安平樹屋二度閒置空間再利用之研究』 嘉義縣：南華大學、265p。
- 黃瑞茂  
2007 『區域型文化資產環境保存及活化計畫—台北縣淡水地區文化資產環境保存及活化計畫』 規劃報告書』 新北市：臺北縣立淡水古蹟博物館、160p。
- 楊姍儒  
2009 『臺灣文化資產再利用為博物館之探討—以古蹟與歷史建築為例』 台南市：國立

成功大學、180p。

廖世璋

2009 「文化資產空間做為博物館再利用之法規研究—以臺北市為例」『博物館學季刊』  
23(1)、pp25-45。

顧素瑜

2009 『淡水發展觀光對居民生活品質影響之研究』台北市：世新大學、243p。

#### インターネット資料 (2014/1/15)

日本から台湾の世界遺産登録を応援する会：<http://www.wh-taiwan.com/index.html>

文化部文化資産局：<http://www.boch.gov.tw/boch/>

國家教育研究院：<http://terms.naer.edu.tw/>

國家教育研究院雙語詞彙、學術名詞暨辭書資訊網：<http://terms.naer.edu.tw/>

國家實驗研究院科技政策研究與資訊中心：[http://grbsearch.stpi.narl.org.tw/GRB\\_Search/grb/](http://grbsearch.stpi.narl.org.tw/GRB_Search/grb/)

閒置空間再利用政策之檢討- 國家政策研究基金會：<http://www.npf.org.tw/post/2/4332>

# 日本の鳥獣行政におけるヨーロッパ狩猟制度の参照

東城義則

## 研究の方向性

RA従事者は日本国内の猟区制度に注目した狩猟制度の変遷、ならびに北海道道東山間部地域における狩猟活動の統括団体「猟友会」の組織的活動について研究をしている。

近年の日本の農山間地域において、野生鳥獣の増加による獣害被害の深刻化が指摘されている。加えて深刻化する獣害に対応するために必要な狩猟者も、野生動物管理学内部においては「絶滅危惧種」と指摘されるほどの高齢化が進み、鳥獣駆除能力の低下が問題とされている [松浦・伊吾田 2012]。こうしたなか、日本の野生鳥獣行政に携わる科学者・研究者・行政担当者は、ヨーロッパの狩猟制度を参照することで狩猟制度の新たな見直しを進めている。

そこで、本稿では明治期以降参照しているヨーロッパの狩猟制度について文献調査を試みることを目的とし、最後にヨーロッパの狩猟制度を参照する日本の野生動物管理学の動向について言及することとした。

**ヨーロッパにおける狩猟制度** (以下は、[Bubenik 1989]をもとに、[野島 2009]によって補足した)

一般にヨーロッパにおける狩猟では、狩猟活動は森林の利用方法として考えられてきた。森林所有は王族・貴族によって独占され、そこに生息する鳥獣類も彼らの所有物として扱われていた [池田 1971]。

ヨーロッパの狩猟制度については、長らく Free-hunt system (日本語では乱場という概念に相当する。土地所有者の許可、ならびに土地使用料を支払えば、該当地域において猟を行うことができる制度) が採られてきた。そして 1800 年代中葉に、Revier system (日本語でいう猟区制度を指す。地域社会の管理者の許可によって、狩猟者は初めてその土地における狩猟を許可される) が採用され、狩猟者の倫理と知識の改良が図られてきた経緯がある。

第一次世界大戦中には、狩猟倫理と知識の向上を図るために猟区制度にも改良が加えられていった。その新しい狩猟法はポーランドにおいて発祥し、後にドイツ (ナチスドイツ) によって整備され合法化された (1934 年にドイツ帝国狩猟法が公布され、1936 年に施行される。農林業に配慮した狩猟獣の保護育成義務・狩猟計画書の提出・猟区を管理する狩猟組合の設置・狩猟倫理の遵守が盛り込まれた。これらの内容はオーストリア狩猟法、スイス狩猟法へと継承される)。この新しい狩猟制度は、ドイツ帝国狩猟法 (Reichsjagdgesetz) として知られ、当該期のヨーロッパにおける狩猟者と狩猟獣に対して最善の方策を敷いた制度であった。その一方で、(1) 組織的な狩猟獣の間引きによって、劣ったトロフィーの遺伝的源基の改良につながる誤認、(2) 有益な狩猟と迷惑な狩猟との区別、の 2 点について、今日の狩猟政策上における誤りを犯していた。そのため第二次世界大戦後、猟区制度はさらなる改良を加えられ、1970 年代に現在における狩猟行政の基礎が固まる。

猟区の管区 (Revier) は、個人・団体・国による 75~150 ヘクタール以上の土地にあたり、管区を所有して、猟区に登録した狩猟者に開放する。数千ヘクタールの以上の土地を管区として設定している場合、管区の土地を管理する猟区管理人 (gamekeeper) が雇われる。猟区管理人は、狩猟学校における 3 年間の実習、ならびに試験への合格が要求され、彼らによって猟区内の土地は管理される。また猟区制度 (Revier system) は、現在までにつながるスポーツハンティングの普及にもつながっている。スポーツハンティングは、銃砲・弾薬・狩猟着を装着して狩猟を楽しむ。ハンティングの産業化をもたらした。ただしスポーツハンティングを行う狩猟者にとって、装備品の消費は射撃場が中心であり、実際のところ猟場における消費は副次的である。

最後に 20 世紀後半の趨勢について紹介する。第二次世界大戦による軍隊の駐留により森が荒廃したことから、造林による再森林化が進められた。この際、林業経済優先のため、林学者をはじめ生態学、マスメディア等により、北アメリカの free-hunt system に依った猟区制度の導入と給餌の抑制による狩猟獣の餓死とが便宜的に宣伝された時期があった (宣伝が展開された背景には、左翼政党の政策的支持も見受けられる)。

猟区制度 (Revier system) は 1989 年段階において、E E C (現在の E U) に加盟する議会にて制度の改訂を行い、E E C の狩猟証取得と、狩猟試験・狩猟期間の解放・捕獲計画とをひとつの制度とすることが試みられている。しかし狩猟に対する倫理感の涵養と狩猟者の知識向上とを達成する制度の統一は、さらなる制度上の改正が必要とされている。

### 狩猟管理学の導入 [梶・伊吾田・鈴木編 2013]

2013 年に野生動物管理に携わる研究者によって出版された『野生動物管理のための狩猟学』では、日本国内において生態学を規範とした科学的な「狩猟学」を築くために、イギリス・ドイツ・ノルウェーを中心としたヨーロッパの狩猟制度・狩猟動物の利用の概要についてまとめられている。

さらに同書においては、一般の狩猟者とは異なる、学的な知識を身につけた野生鳥獣の専門的な捕獲技術者 (野生動物管理士とも呼ばれる) の必要性が指摘されている。ヨーロッパをはじめとする海外の狩猟制度は、日本国内の置かれている獣害被害対策や野生動物管理の担い手不足といった鳥獣行政の問題点を照射するものとして常に参照され、日本国内の状況に合わせた新たな狩猟制度を構築するための土台として位置づけられている。

### 参考文献

【日本語】

池田真次郎

1971 『野生鳥獣と人間生活』インパルス。

梶光一・伊吾田宏正・鈴木正嗣編

2013 『野生動物管理のための狩猟学』朝倉書店。

野島利彰

2009 『狩猟の文化：ドイツ語圏を中心として』春風社。

松浦友紀子・伊吾田宏正

2011 「ニッポンのハンターを絶滅から救え！」『哺乳類科学』51(1): 152-153。

【英語】

A. B. Bubenik

1989 Sport hunting in continentak Europe, Robert J. Hudson. (eds.), *Wildlife production systems: economic utilisation of wild ungulates*, Cambridge University Press.

## 平成 26 年度

大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立民族学博物館共同研究募集要項





申請にあたっては、共同研究（一般）と共同研究（若手）のどちらかを選択して申請してください。重複申請することはできません。

## ■ 目次

### I. 共同研究（一般）

1. 共同研究（一般）の課題区分	3
2. 共同研究（一般）の構成	3
3. 共同研究会の開催場所	3
4. 共同研究（一般）の期間	3
5. 応募資格	4
6. 募集件数	4
7. 申請方法等	4
8. 採否	4
9. 経費	5
10. 研究成果の公開	5

### II. 共同研究（若手）

1. 共同研究（若手）の課題区分	6
2. 共同研究（若手）の構成	6
3. 共同研究会の開催場所	6
4. 共同研究（若手）の期間	6
5. 応募資格	6
6. 募集件数	6
7. 申請方法等	6
8. 採否	7
9. 経費	7
10. 研究成果の公開	7

## ■ 目的

国立民族学博物館は、創設以来今日に至るまで、大学共同利用機関として、我が国の学術研究の総合的推進を目指し、文化人類学・民族学及び関連諸科学の発展に貢献する高度なレベルの共同研究を推進してきました。

近年、本館に対して、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む新しい研究の創出、一般社会から寄せられる期待への積極的対応が求められています。そのような多様な研究の推進をめざして共同研究を募集します。共同研究には一般と若手のふたつの区分を設けており、共同研究（若手）は、若手研究者を育成・支援することを目的としています。

### I. 共同研究（一般）

#### 1. 共同研究（一般）の課題区分

共同研究（一般）の課題区分は、次のとおりです。

課題1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題2. 本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究

#### 2. 共同研究（一般）の構成

共同研究（一般）には、日本国内に在住する研究者（10～15名程度）が参加できます。

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、参加者の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

なお、共同研究が採択されたときは、本館の専任教員がその運営を支援します（申請時に本館の専任教員が含まれている必要はありません。）。

特に必要があると認められた研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また、研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、共同研究会を館外で開催する場合には旅費を支給できません。また特別聴講者には旅費の支給はありません。

#### 3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は原則として本館で開催することとします。ただし、研究上必要と認められる場合は、理由書を提出し、妥当と認められれば、本館以外（国内に限る。）で開催することも可能です。ただし、本館以外での開催の回数は原則として1回限りとします。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

なお、従来の共同研究では、年間3～6回程度の共同研究会が開催されています。

#### 4. 共同研究（一般）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め3年半以内とします。延長は認められません。なお、3年半計画の場合、最終年度の研究会開催回数は3回まで、前年度実績の2分の1以内の予算規模で行っていただきます。

#### 5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、大学その他の研究機関の専任の教授、准教授、講師、助教、助手、または、これと同等の研究能力があると館長が認めた者（ただし、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者を除く。）です。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。

申請者が過去に共同研究の代表者であった場合には、研究成果が公開されていることを、申請の条件とします。

## 6. 募集件数

当該年度につき5～10件程度とします。

## 7. 申請方法等（共同研究（若手）と重複申請することはできません）

### (1) 申請手続き

- ① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。
- ② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。
- ③ 応募の際には、共同研究（一般）に参加される共同研究構成員の名簿を添えてください。

### (2) 応募書類及び申請期限と申請方法

- ① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

ア 平成26年度国立民族学博物館共同研究（一般）計画申請書（様式1-1（公募用））または平成26年度共同研究（一般）申請書（様式1-2（館内用）） 1部

イ 研究業績書（様式5） 1部

ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意） 1部

- ② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成26年4月25日（金）までに必着するように、メール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類のイ研究業績書（様式5）、及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

### (3) 提出先

住所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページ URL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がありましたら、書面またはFAXにより照会してください。

## 8. 採否

- (1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成26年7月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成26年6月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサイトに掲載します。）のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテー

ションに係る旅費は支給されません。

(2) 採否の判定は、共同研究（一般）の審査基準（別紙）により行います。

## 9. 経費

研究代表者、共同研究員、及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。また、必要に応じて、会場使用料（本館以外で開催の場合）を支給いたします。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

## 10. 研究成果の公開

### (1) 研究代表者の義務

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

- ア 共同研究年次報告書（様式3）の提出（各年度末）
- イ 共同研究実績報告書（様式4）の提出及び共同研究成果報告会での発表（研究終了時）
- ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告（原則、毎年）
- エ 研究成果を取りまとめ刊行または発表（原則として研究終了後2年以内）

※なお、公開に際しては、本館共同研究の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

### (2) 研究成果の内容

研究成果とは以下のものを指します。

- ア 『国立民族学博物館論集』、あるいは *Senri Ethnological Studies (SES)* で刊行される論文集
- イ 出版社等から刊行される論文集
- ウ 特別展示、企画展示で刊行された論文集に相当する図録
- エ 公開のシンポジウム、フォーラム、ワークショップ、学会分科会などの研究集会で刊行された、*Proceedings* か論文集
- オ 代表者及びその他構成員が『国立民族学博物館研究報告』または学会誌（電子ジャーナルを含む）などに投稿した個別の論文
- カ 特許

※特別展示、企画展示、ホームページ、データベース、資料集等は、研究成果の一部として認められますが、別に最終的な論文集等の出版が求められます。また、書評等、研究について、学会や社会から評価された資料を併せて提出してください。

※研究終了後、2年を経過した段階で、研究成果の公開状況について、調査を行います。

## II. 共同研究（若手）

### 1. 共同研究（若手）の課題区分

共同研究（若手）の課題区分は、次のとおりです。

課題 1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題 2. 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

### 2. 共同研究（若手）の構成

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、共同研究構成員の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

特に必要があると認められた日本国内に在住する研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、特別聴講者には旅費の支給はありません。

### 3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は本館で開催することとし、館外での開催は認められません。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

### 4. 共同研究（若手）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め2年半以内とします。延長は認められません。

### 5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、申請時39歳以下の研究者で、共同研究を遅滞なく遂行する能力をもつものとします。研究代表者以外の共同研究構成員の条件については、特に定めませんが、その趣旨に添い、基本的には研究代表者と同様の年齢層の若手研究者等で構成されるものとします。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。また、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者は応募することはできません。

一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

### 6. 募集件数

当該年度につき3件程度とし、1件について年額70万円を上限規模とします（ただし、初年度は、年額の半分程度とします。）。

### 7. 申請方法等（共同研究（一般）と重複申請することはできません）

#### (1) 申請手続き

① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。

② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。

- ③ 応募の際には、共同研究（若手）に参加される研究者の名簿を添えてください。
- (2) 応募書類及び申請期限と申請方法

① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

- ア 平成26年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書（様式1-3） 1部  
イ 研究業績書（様式5） 1部  
ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び研究会における役割についての説明書（様式任意） 1部

② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成26年4月25日（金）までに必着するようにメール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類のイ研究業績書（様式5）、及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書1ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

(3) 提出先

住 所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページURL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がありましたら、書面またはFAXにより照会してください。

## 8. 採否

(1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成26年7月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成26年6月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサイトに掲載します。）のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテーションに係る旅費は支給されません。

(2) 採否の判定は、共同研究（若手）の審査基準（別紙）により行います。

## 9. 経費

研究代表者、共同研究員、及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

## 10. 研究成果の公開

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

- ア 共同研究年次報告書（様式3）の提出（各年度末）  
イ 共同研究実績報告書（様式4）の提出及び共同研究成果報告会での発表（研究終了時）  
ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告（原則、毎年）  
エ 『国立民族学博物館研究報告』へ論文または研究ノートとして投稿（共同研究終了後2年以内）  
※共同研究成果を論文集などで公開する予定がある場合には、『国立民族学博物館論集』、あ

るいは **Senri Ethnological Studies (SES)** で刊行することも可能です。ただし、本館からの刊行助成による外部出版はできません。その他の媒体による研究成果の公開については、共同研究（一般）に準じます。

※研究成果を公開した場合は、本館共同研究会の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

## 共同研究（一般）の審査基準

### (1) 研究課題の学術的重要性

これまでの研究経緯や目的などに関する記載から、学術的重要性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (2) 研究組織の妥当性

メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (3) 研究計画の妥当性

開催日程や開催方法（公開、非公開等）などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (4) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (5) 研究課題の発展性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている



## 共同研究（若手）の審査基準

### (1) 研究の目的や内容等

若手主体の挑戦的な研究であり、個人研究の範囲をこえて共同で行う必要性が明らかな研究であること。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (2) 研究組織の妥当性

プロジェクトの趣旨に沿い、若手研究者を主体として組織されていること、メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (3) 研究計画の妥当性

研究テーマ、共同研究構成員の役割分担、開催日程などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (4) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (5) 研究課題の発展性、成果アウトプットへの期待

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。本共同研究に応募した課題を発展させて、共同研究構成員が新たなプロジェクト等への申請につなげていく意欲があるものが望ましい。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

## 平成 26 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（一般用）

共同研究（一般）を申請する者が共同研究（若手）に重複して申請することはできません。

### 【研究課題】

研究期間が 3 年半以内であることを踏まえて記入してください。

### 【共同研究構成員】

- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在学学生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在学学生は本館以外の研究者に区別してください。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者は 2 つ以内、館内の教員は 5 つ以内です。

### 【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。

### 【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

### 【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 26 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。

## 平成 26 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（館内用）

共同研究（一般）を申請する者が共同研究（若手）に重複して申請することはできません。

共同研究（若手）は若手用申請書にて申請してください。

### 【研究組織】

- ・ 研究代表者が客員教員又は特別客員である場合は、申請時の当該研究組織に本館の専任教員を必ず含むものとします。
- ・ 共同研究に参加される本館以外の共同研究構成員については、平成 26 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・ 専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。
- ・ 共同研究に参加される本館の教員については、住所等の記入は不要です。
- ・ 大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・ 本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者は 2 つ以内、館内の教員は 5 つ以内です。

## 平成 26 年度国立民族学博物館共同研究計画申請書記入要領（若手用）

共同研究（若手）を申請する者が共同研究（一般）に重複して申請することはできません。

一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

### 【研究課題】

研究期間が 2 年半以内であることを踏まえて記入してください。

### 【共同研究構成員】

- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在学学生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在学学生は本館以外の研究者に区別してください。
- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者は 2 つ以内、館内の教員は 5 つ以内です。

### 【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。
- ・年額 70 万円が上限ですので共同研究構成員数を考慮してください。（ただし初年度は半分程度とします。）

### 【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。本館の機関研究員および機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

### 【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 26 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。
- ・共同研究構成員の年齢も審査において考慮しますので、必ず記入してください。

平成26年度国立民族学博物館共同研究 (一般) 計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名	印	
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
	所属機関の住所	〒	
	TEL	( )	FAX ( )
2. 研究課題区分 (該当する課題番号1つに○をつけてください。)	課題1	文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究	
	課題2	本館の所蔵する資料 (標本資料, 文献資料, 映像音響資料等) に関する研究	
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード)	( )	( )
	(英文)		
	(Keyword)	( )	( )
4. 研究計画	共同研究の目的, 意義等について, 研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計	内	本館以外の研究者
	人	訳	本館の教員 人
参加される研究者の氏名, 所属機関, 職名等を研究組織表に記入してください。			
6. 共同研究会 開催回数	平成 26 年度	回 (予定)	平成 27 年度 回 (予定)
	平成 28 年度	回 (予定)	平成 29 年度 回 (予定)
<h2 style="margin: 0;">承 諾 書</h2> <p style="margin: 10px 0;">上記申請者 (研究代表者) が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。</p> <p style="margin: 10px 0;">平成 年 月 日</p> <p style="margin: 10px 0;">所属長 (部局長)</p> <p style="margin: 10px 0;">職 名</p> <p style="margin: 10px 0;">氏 名</p> <div style="border: 1px dashed black; width: 80px; height: 40px; margin: 10px auto; text-align: center; line-height: 40px;">公 印</div>			

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

# 略 歴 書

ふりがな		生年月日	昭和	年	月	日生
氏 名		電話番号	(自宅)	( )		
		FAX 番号	(自宅)	( )		
		メールアドレス				
ふりがな						
自宅住所	〒					
<b>学 歴</b> (大学から記入してください。)						
大学名・学部等名		就 学 期 間			卒・修了・退学の別及び学位	
		昭和	年	月	～	昭和
		平成	年	月	～	平成
		昭和	年	月	～	昭和
		平成	年	月	～	平成
		昭和	年	月	～	昭和
		平成	年	月	～	平成
		昭和	年	月	～	昭和
		平成	年	月	～	平成
<b>職 歴</b>						
自 年 月	至 年 月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)				
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
所属学会および受賞等						
<b>本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況</b>						
自 年 月	至 年 月	共同研究の課題名、その他事項			研究代表者名・備考	
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					
昭和	昭和					
年	年					
月	月					
平成	平成					

# 研 究 計 画

申請者氏名 \_\_\_\_\_

1. 共同研究の課題区分（下記の課題番号1つに○をつけてください。）

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

2. 研究課題

（和文）

\_\_\_\_\_

(キーワード) ( ) ( ) ( )

（英文）

\_\_\_\_\_

(Keyword) ( ) ( ) ( )

3. 研究の目的（400字程度）

4. 研究の意義（400字程度）

5. 期待される成果（400字程度）

6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成26年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額（円）	開催場所	備考
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
計				

※開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。

※本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。

館外開催理由

- ・ 月 日（開催場所： ）  
理由：



研 究 組 織

申請者氏名

ふりがな		年 齢	共同研究内での	
氏 名		才	役 割 分 担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での	
氏 名		才	役 割 分 担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での	
氏 名		才	役 割 分 担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での	
氏 名		才	役 割 分 担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での	
氏 名		才	役 割 分 担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

## 平成26年度 共同研究 (一般) 申請書

※共同研究(若手)は若手用申請書にて申請してください。

1. 共同研究の課題区分 (下記の課題番号から1つ選択して○をつけてください。)

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究

2. 研究代表者

代表者(氏名)

(所属・職名)

3. 研究課題

(和文)

---

(キーワード) ( ) ( ) ( )

(英文)

---

(Keyword) ( ) ( ) ( )

4. 研究期間 (下記の研究期間から1つを選択して○をつけてください。)

ア 1年半

イ 2年半

ウ 3年半

5. 研究の概要

5-1. 研究の目的 (400字程度)

5-2. 研究の意義 (400字程度)

5－3. 期待される成果（400字程度）

5－4. 研究の実施計画（800字程度）

6. 研究成果の公開計画（200字程度）

7. 関連プロジェクト（本研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

8. 研究代表者が過去5年間に実施した共同研究の実績

（1）研究課題

研究期間

研究成果（共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ）

(2) 研究課題

研究期間

研究成果（共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ）

9. 経費（平成26年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額（円）	開催場所	備考
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
計				

※開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。

※本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。

館外開催理由

- ・ 月 日（開催場所： ）  
理由：

研 究 組 織

申請者氏名

ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役割分担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役割分担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役割分担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役割分担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢		
氏 名		才	共同研究内での 役割分担	
所属機関名		学部名等		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

平成26年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名	印	
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
	所属機関の住所	〒	
	TEL	( )	FAX ( )
2. 研究課題区分 (該当する課題番号1つに○をつけてください。)	課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究 課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究		
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード) ( ) ( ) ( )		
	(英文)		
	(Keyword) ( ) ( ) ( )		
4. 研究計画	共同研究の目的，意義等について，研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計 人	内 訳	本館以外の研究者 人 本館の教員 人
			参加される研究者の氏名，所属機関，職名等を研究組織表に記入してください。
6. 共同研究会 開催回数	平成 26 年度	回 (予定)	平成 27 年度 回 (予定)
	平成 28 年度	回 (予定)	
<h2>承 諾 書</h2> <p>上記申請者（研究代表者）が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。</p> <p>平成 年 月 日</p> <p style="text-align: center;">所属長（部局長）</p> <p style="text-align: center;">職 名</p> <p style="text-align: center;">氏 名</p> <div style="border: 1px dashed black; width: 100px; height: 50px; margin-left: auto; margin-right: auto;"></div>			

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

略 歴 書

ふりがな				生年月日	昭和	年	月	日	生	
氏 名				電話番号	(自宅)	( )				
				FAX番号	(自宅)	( )				
				メールアドレス						
ふりがな										
自宅住所	〒									
学 歴 (大学から記入してください。)										
大 学 名 ・ 学 部 等 名				就 学 期 間				卒・修了・退学の別及び学位		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
職 歴										
自	年	月	至	年	月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)				
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
所属学会および 受賞等										
本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況										
自	年	月	至	年	月	共同研究の課題名、その他事項			研究代表者名・備考	
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							

# 研 究 計 画

申請者氏名 \_\_\_\_\_

1. 共同研究の課題区分（下記の課題番号1つに○をつけてください。）

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

2. 研究課題

（和文）

\_\_\_\_\_

(キーワード) ( ) ( ) ( )

（英文）

\_\_\_\_\_

(Keyword) ( ) ( ) ( )

3. 研究の目的（400字程度）

4. 研究の意義（400字程度）

5. 期待される成果（400字程度）



6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成26年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数（人）	所要額（円）	開催場所	備考
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
月 日～ 月 日				
計				

※ 共同研究（若手）の共同研究会は館内開催に限られる。

研 究 組 織

申請者氏名 \_\_\_\_\_

ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

国立民族学博物館共同研究年次報告書 ( 年半計画の 年度目)

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) ( ) ( ) ( )

(英文)

(Key word) ( ) ( ) ( )

2. 研究代表者

氏 名 所 属 機 関 職 名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織 (共同研究員として参加された方)

氏 名 所 属 機 関 職 名

5. 研究目的 (400字程度)

6. 本年度の研究実施状況

7. 研究成果の概要 (400字程度)

8. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

国立民族学博物館共同研究実績報告書

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) ( ) ( ) ( )

(英文)

(Key word) ( ) ( ) ( )

2. 研究代表者

氏名 所属機関 職名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織 (共同研究員として参加された方)

氏名 所属機関 職名

5. 研究目的 (400字程度)

6. 研究成果の概要 (800字程度)

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

研 究 業 績 書

共同研究代表者： \_\_\_\_\_

専門分野	
------	--

<b>【著書】</b> (著者名編者・刊行年次・書名・出版地および出版社)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○
<b>【論文】</b> (著者・刊行年次・論文の標題・収録雑誌等巻号・収録ページ・雑誌等の出版地および出版社)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○
<b>【その他】</b> (映像作品など)
1. ○○○○○○ 2. ○○○○○○ 3. ○○○○○○

※提案したプロジェクトに関連した研究業績を記載すること (合計10点以内)

※直近のものから順次記載すること



#### 資料4. みんなく若手研究者奨励セミナー



## 平成25年度みんなく若手研究者奨励セミナー 「アートを考える——人類学からのアプローチ」

国立民族学博物館では、若手研究者による共同利用を促進するため、「みんなく若手研究者奨励セミナー」を開催します。当セミナーでは、弊館の機関研究「マテリアリティの人間学」をテーマに、本館教員による発表に続いて、参加者による個人研究発表を行ないます。

日時：2013年11月20日（水）～22日（金）  
場所：国立民族学博物館 第6セミナー室（2階）

### プログラム

#### 11月20日（水）

開会挨拶 10：00～10：15 久保正敏（国立民族学博物館・副館長）  
趣旨説明 10：15～10：30 丹羽典生（国立民族学博物館・准教授）

教員発表 司会：丹羽典生（国立民族学博物館・准教授）

① 10：30～11：30 吉田憲司（国立民族学博物館・教授）

「アートと人類学のあいだ」

② 11：30～12：30 飯田 卓（国立民族学博物館・准教授）

「くらしに伝わる技の遺産化：マダガスカルの事例より」

◇セッション① 司会：吉田ゆか子（国立民族学博物館・機関研究員）

13：30～14：20 伏木香織（大正大学非常勤講師）

「Heritageの形成——シンガポールの南音に見る人と音の移動が紡ぐ文化遺産としてのパブリック・メモリー」

14:20～15:10 古沢ゆりあ（総合研究大学院大学博士課程）

「フィリピンの聖母崇敬と聖画像の現地化」

◇セッション② 司会：浜田明範（国立民族学博物館・機関研究員）

15:30～16:20 緒方しらべ（総合研究大学院大学博士課程）

「アフリカ美術とつくり手の実践——ナイジェリア地方都市の『アーティスト』の事例から」

16:20～17:10 山越英嗣（早稲田大学博士課程）

「<伝統>をメンテナンスする——メキシコ・オアハカ市の芸術家集団 ASARO によるストリートアートを用いた実践」

11月21日（木）

10:30～12:30 「カムイノミ」見学 & 展示場見学

◇セッション③ 司会：山本睦（国立民族学博物館・機関研究員）

13:30～14:20 吉田優貴（東京女子大学非常勤講師）

「『芸術』としてのアートから、『くらしのわざ』としてのアーツへ——我々はなぜ、ケニアの豊の子供のダンスに魅惑されるのか？」

14:20～15:10 左地（野呂）亮子（筑波大学博士特別研究員）

「住まうことのアート——マヌーシュのキャラヴァン居住を事例に」

◇セッション④ 司会：河合洋尚（国立民族学博物館・助教）

15:30～16:20 ヘイリー・マクラレン（一橋大学博士課程）

「『生きているアート』——彫り物の『アート』とエージェンシー」

16:20～17:10 阿部朋恒（首都大学東京博士課程）

「山地農耕民ハニの服飾をめぐる二つの審美的水準」

懇親会 17:30～ 第3セミナー室（2階）

11月22日（金）

◇総合討論 10:30～12:00 司会：丹羽典生（国立民族学博物館・准教授）

13:00～16:30 共同利用制度と施設の紹介、アンケートの記入

16:30～17:00 講評・表彰・閉会挨拶





## 2013 年度若手奨励セミナー・アンケート

国立民族学博物館（みんぱく）は大学共同利用機関であると同時に、博物館をもつ研究所でもあります。さらに総合研究大学院大学文化科学研究科の2専攻がおかれ、教育機関としての機能も果たしています。こうした多様な側面をもつみんぱくの共同利用制度を改善するために、セミナーに参加された皆様からご意見をいただきたいと思ひます。みんぱくがもつ研究資源へのアクセスに関する制度的な問題やメリットなどについて、忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。皆様からのご意見は、みんぱくの内部資料としてとりまとめ、今後の事業運営の参考にさせていただきます。

### I 大学共同利用機関としてのユーザビリティ

みんぱくには、特別利用共同研究員・外来研究員などの若手研究者の受け入れ制度や、1) 本館展示・特別展示などの展示物、2) 民族学アーカイブズ・HRAF・文献資料などの図書室の資料、3) 映像音響資料・標本資料、4) みんぱくデータベースといった各種資料の共同利用制度、また共同研究・ワークショップ・シンポジウムなどがあります。本日の説明を参考とし、以下の該当する項目を選んで、質問にお答えください。

- ① みんぱくを利用した経験のある方は、これまでどのようなかたちで共同利用制度利用したか、また、どのような点を改善する必要があると感じたかお書きください。
- これまで、みんぱく所蔵の図書および映像資料を閲覧させてもらったことがある。HPで所蔵資料を細かく検索することができて便利だと感じた。また、自分では資料の中身や内容がよくわからなかった資料に関しても、担当者の方が詳しく説明、整理してくれたので、非常にスムーズに目的とする資料にたどり着けた。HRAFについては知らなかったもので、今後利用してみたいと思う。今後の改善点に関して、私がたどり着けなかっただけかもしれないが、図書室に机の数が少ない。図書室で持ち込みのパソコン等を利用して、長時間の資料の閲覧やメモができる机があればよいと思った。
  - 総研大院生として、展示場や図書館を自由に利用でき、非常に便利であった。場合によっては、共同研究会にオブザーバーとして参加させてもらったり、シンポジウムにアルバイトとしてお手伝いすることで発表を聴けるという機会もあって良い経験になった。ただ、図書館のHRAFはまだ利用したことがない。自分がきちんと理解・利用しようとしていないことが問題だが、その機会がなかった。
  - 本館展示・特別展示を拝見させていただいたことがありますが、他の共同利用制度については利用したことがありません。今日は2) から4) まで各種資料の利用についてご説明させていただきましたが、いずれも大変興味深く、今後はすべての制度を利用させていただきたく思いました。
  - 大学学部生の研修旅行の一部で、施設案内と講義を受けるという形で利用したことがあるのみです。図書館の相互利用で資料請求をすることはありますが、遠隔地に住んでいるため、施設自体を利用する機会がほとんどありませんでした。もし、著作権等が切れているものがあれば、資料等のデジタル化、データベース化が済んだものを、オンラインで公開していただけると嬉しいです（とくに音響・映像資料）。
  - 展示物、図書室、データベース、ワークショップ、シンポジウムを利用しました。改善の必要があると思ったのは、データベースの所蔵品検索で少し不便な点がありました。それは、1) 標本資料の写真があるものかないものがあり、あるものでも肝心の部分が写っていないものがある（例えば箱形祭壇の箱の外見だけが写っていて扉を開いた内部の写真がないなど）。2) 標本名や情報に誤りがあるものがある（物と名称が一致していない。現地名の日本語訳がおかしいなど）。3) 標本資料のサイズ表記に一貫性がない。（どこを縦で、どこを横とするかなど）

- ② みんなくを利用した経験のない方は、今後どのようなかたちで共同利用制度を利用していきたいか、お書きください。
- ・ 共同研究やシンポジウムを立ち上げられればと思います。同じ課題を抱えながらも、専門領域、経歴、(可視的な)業績の少なさの壁により、独創的な視点を持っていても一人の力ではなかなか結実に至らない、そうした人たちと、すでに地道な研究の成果を形にした人たちが一緒になって、地に足がついているけれども新しい切り口の研究ができればと思います。
  - ・ これまで使用したことはありませんでしたが、今後、図書室の資料などを外部図書館から取り寄せして利用したいです。
  - ・ 文献資料と図書館質の資料を利用したいです。

## II 大学院生、ポスト・ドクターの支援制度

大学院生またはポスドク研究者が、みんなくで研究活動が続けるための受け入れ制度として、特別共同利用研究員、外来研究員、機関研究員を設けています。また、若手研究者の共同研究を支援する制度として、共同研究(若手)も公募もしています。本日の説明を参考とし、これら現行の若手研究者支援制度への感想、または今後の改善点について教えてください。また、現行の制度以外に、どのような支援制度があれば望ましいか教えてください。

- ・ 若手研究者支援制度は、今日具体的なお話を伺って、どういうものか理解することができました。そして利用したいと思いました。支援制度としましては、調査助成があればと思います。また、みんなくが発行している論文誌のなかでの奨励賞があればいいと思いました(ただし、投稿権利がある人が限られているように思いますので[思い違いましたらすみません]、必ずしも奨励賞の設置がよいとは限らないですが)。
- ・ 民博に在籍していない研究者でも共同研究に応募できるとはじめて知った。ぜひ利用したいと思う。
- ・ 博士号を取得したあとのことが非常に不安なので、とりあえずであっても、所属先や、関西での拠点(人、資料、研究会などとの接点)として、外来研究員制度があることはとてもありがたい。特別共同利用研究員は、毎年応募者が少ないようだが、とてももったいないと思う(総研大院生にとっても、他大学の院生の人と交流する機会になる)ので、毎年もっと人が集まると良いと思う。機関研究員については、話を限りでは、とても敷居が高そう(競争率が高い)で、現実的じゃないと感じてしまうので、それと比べて、特別共同利用研究員や外来研究員はいくらか申請しやすいようなので、良いと思った。ただ、外来研究員について、ひとつ、「研究者番号」について(その番号をもつ、もたないがどれだけ重要かわからないが)、お金を払えばもらえる、という条件があったと思うが、その説明を聞いた限りだと、お金の有り・無しに左右されてしまうのか、と少し残念だった。(とくにポスドクにとって経済的問題はとても大きいから)
- ・ 機関研究員の制度に興味を持っています。博士論文を提出後の進路として検討させていただきたいと思います。
- ・ 私は博士課程後期在学中ですが、まずは外来研究員としてみんなくの資料を利用させていただきつつ学位論文執筆を進め、同時にテーマの合う共同研究には積極的に参加したいとも考えています。研究員制度は、研究者としての各ステップにおいてそれぞれ利用しやすいよう整備されていると思います。
- ・ 外来研究員の枠は比較的受け入れが広いようなので、活用しやすいのかな、と思います。特別共同利用研究員については、大学院生が対象なのであれば、もう少し早い段階で周知したほうが良いように思いました。共同研究(若手)について、特に若手に対する枠があるのはいいと思います。ただし現状では40歳を超えても常勤になれない、さまよえる研究者(専任非常勤講師)も多く、そのひとりとしては、応募に躊躇してしまうこ

とが多いです。年齢という条件だけではなく、研究成果の公開の可能性などにおいて、研究者番号がどこからももらえないような状況に置かれている場合、科研費や、科研の研究公開費の請求などもできず、機関助成による研究成果公開の可能性がないため、共同研究に応募したとして、採択される可能性が低い、というのが原因です。こうした研究者に対する研究支援、研究成果公開に対する助成制度があると望ましいと思います。

### Ⅲ 今回の「みんなく若手奨励セミナー」の感想

1. セミナーの開催をどのように知ったかをお答えください。
  - ・ ホームページ上。関係者からの情報。
  - ・ 研究仲間からの情報提供、およびみんなくHP
  - ・ 所属大学院（総研大）の大学院生用のメーリングリストに情報が転送されてきた。
  - ・ 日本文化人類学会のメールで知りました。
  - ・ 日本文化人類学会と所属大学のメーリングリストを通じて知りました。
  - ・ 文化人類学会の際（だったと思う）にみんなくブースにおかれていたチラシ
  - ・ メーリングリストと指導教員のお知らせで。
  - ・ チラシ・ポスター
2. 応募するにいたった経緯・動機についてお答えください。
  - ・ 関係者から、関係機関にリクルートがあり、それで決断しました。全体テーマが決まっているセミナーは応募が難しく、セミナーの存在を知ってはいても積極的に応募しようと思ったことはありませんでした。ただ、自分の研究内容を「仮に」でも全体テーマに引き付けた場合、どのような発表ができるか、またどのような批判を受けるか、そういうことを知るにはよい機会だと思い、応募することにしました。
  - ・ 若手を対象としたセミナーで応募しやすかったこと、また、民博の先生方、および他の研究機関に属す研究者と意見交換する良い機会であると考えたため
  - ・ セミナーのテーマが自分のテーマと一致するようにみえたから。また、そのテーマ・研究をわかちあえる研究者の方々と出会える良い機会になると思った（自分には、所属大学院関係者など限られた人たち以外、研究者の知り合いがほとんどいないから）。
  - ・ 今回のテーマが自分の研究に大きく関係していたためです。同じような研究を行っているほかの研究者と知り合う良い機会と考えました。
  - ・ 関心を持ちつつ深めるきっかけのなかった「アート」というテーマについて、セミナー参加をきっかけとして焦点化してみたいとの動機から応募いたしました。
  - ・ チラシにあった「アート」という用語の使い方には大きな問題を感じましたが、切り口が多様だったことで応募してみようかな、と思いました。実際にはまさか採用されるとは思っていなかったの、提出期限ぎりぎりまで、応募するかどうかを迷っていて、結局、せまったメ切に背中をおされる形で、ダメもとで応募したものです（熟慮が足りなかったかもしれません）。
  - ・ 博論の一部の中心となる部分を発表して、意見・批判などを受けてとても役に立つ機会になると思って応募しました。
  - ・ 今回のセミナーのテーマと、自分の現在の研究テーマが合致していたため。
3. プログラムの内容や時間、議論・討論は適切でしたか。
  - ・ はい。
  - ・ 個人発表については、人数にもよりますが、もう少し、発表時間がほしかったです。現実問題として無理だと思いますが、40分の発表時間で20分の質疑応答が理想的です。全体討論について、圧倒的に時間が足りないと思いました。課題をいくらか共有できたとは思いますが、討論で提出された課題について、もう少し深く突っ込んで議

論したかったです。それから、指名制もよいのですが、「まんべんなく質疑応答に参加させる」ということを主催者側で規定せずに、もっと自由に発言できればよかったです。

(指名制が発動されるタイミングが早かった気がします)

- ・ 総合討論の時間をもっと長くとっても良いと思ったが、全体的にプログラムの流れはちょうど良かった。
  - ・ 内容に関して大変満足のいくものでした。
  - ・ これは自戒を含めて申し上げますが、発表者によって発表と質疑応答の時間配分が前後しており、討議を深める時間的余裕がない場合があったように思います。各発表の割り当て時間をもう少し増やせばより徹底した討論が図れるのかもしれませんが。
  - ・ 「アート」という概念の設定に、かなりの疑問をもちました。いろんな議論が可能だったとは思いますが、結局、総合討論において、その話題に触れることになったのはよかったのですが、今後の継続的な討論が必要なのではないかと思います。それを考えると、プログラムの全体構成として、もう少し改良が必要なのかな、と思います。今回の研究については、まず、「アート」という概念をめぐる討論があってもよかったと思います。あるいは事前に「アート」についての問題点を参加者に投げかけておいてもらって、それに対する参加者のリアクション、という形で討論が始まってよかったと思います。そのうえで、個々の事例発表を行い、総合討論に進むと、より深い議論ができたのではないかと思います。また個人の発表時間は短かったのではないかと思います。発表時間が長く(45分~60分程度)できれば、質疑応答の段階で、もう少し議論を深めることができたと思います。今回は、発表内容をはしょった方がかなりいましたが、肝心の質疑応答、討論の際に、はしょった部分を結局説明することになったのは、時間配分の工夫で、なんとか少しは改良できるのではないかと思います。
  - ・ 30分の発表で20分の質問時間という時間割は良かったと思ったが、総合討論がもっとできたらいいと思いました。民族学アーカイブズ・HRAF・文献資料などの図書室の資料の紹介が最終日で行なったことは、ちょっと残念だと思いました。
4. セミナーの開催時期(11月末の平日に3日間開催)は適切でしたか。
- ・ はい。
  - ・ 適切です。平日の方がありがたいです。
  - ・ 適切。
  - ・ わたし自身の場合、アルバイトを休まないといけなかったもので、できれば週末がよかった。もちろん、個々の事情による。
  - ・ 学会などを重複しないため、適切であると思います。
  - ・ 適切だったと思いますが、より徹底した議論を行うためにはあと一日開催期間を延ばしてもよいとも思います。
  - ・ 適切だとは思いますが、水曜日、公園がしまっていて、結局、入れなかった(モノレールに乗りなおし、東口までまわりました)のは、残念でした。
  - ・ 平日で良かったと思いました。
5. 「みんぱく若手セミナー賞」について、どのように思いますか。
- ・ 気にするなど言われても、よっぽど欲のない方でなければ、意識してしまうと思います。その一方で、どのような基準で授賞対象が決まるかということを知る機会になる点ではよいのではないかと思います。それは、周囲の評価に迎合するという意味ではなく、自分自身の研究内容や姿勢に何が足りなかったかを知ることができると思うからです。
  - ・ 適切な該当者がいなければ毎回無理に授与する必要はないが、受賞者には励みになると思う。
  - ・ 賞はおかしい、とは思わないが、賞はいらないと思う。せっかく「若手」が集まって発表・討論する場なのに、賞を先生がたの審査によって「あたえられる」ということには

矛盾を感じなくもない。賞よりも、もっと大事なことがあると思う。たとえば、目にみえるものでいうならば、民博研究報告の投稿権がずっと魅力的だし、それが奨励だと思うから、それでじゅうぶんだと思う。

- 研究のさらなるモチベーションになる、良い制度ではないかと思います。
  - 若手研究者の激励という意味で、良いと思います。
  - 特に意識していませんでした。申し訳ありません。
  - 若手研究者の業績作りや、励みになるという点で有意義だと思います。
6. 次回のセミナーではどのようなテーマがふさわしいと思いますか。
- 思いつきません。
  - 「アート」と来たので、「テクノロジー」。もしくは、「ライティング・カルチャー」以後を真剣に考えることや、「Alfred Gell」後の新たなマテリアリティ論を考えるのも良いと思う。
  - いますぐは思い浮かばないけれど、今回のようなテーマおよびその募集内容はあまりに広いので、そのようなテーマ設定は不適切だと思う。もちろん、いろいろな人を集めるのは面白いことだけれど、もう少し、そのテーマが人類学においてどんなふうに議論されてきたかを主催者側が検討するべきだと思う。討論の場で尋ねてみた結果、「大人の事情」というひとつの答えをもらったが（それはわかるけれど）、私自身の問題として考えると、「大人の事情」じゃすまされないというか、学問の場でそんな言い訳があってはいけないなあと感じる。そういうことに対して正面からぶつかって、議論していくのが、「若手」がやるべきことなんだと思う。あまりに「アート」を「広く」とらえすぎていて、「いろいろある」という話で終わりがちで、かえって、「アートを考えていない」ことになりがちだから。
  - おそらく多くの研究者が参加を志望しても、テーマに沿わずに諦めてしまった方も多いのではないかと思いますので、あまり狭いテーマではなく、むしろ一般性のあるテーマを選んでいただければと思います。
  - ややプラクティカルに過ぎるかもしれませんが、今回の討議でもフィールドワーカーのポジショナリティが論じられる場面がありましたので、フィールドワークの手法および成果の取り扱いなどを共有するためのテーマを設定しても良いのではないのでしょうか。調査倫理や新しい機器や情報技術の利用について論じることもできるように思います。
  - 今回、総合討論の際に、ポジショナリティ、構えといった問題が出てきたので、これを問うテーマであってもいいと思います。Writing Culture以降の議論を踏まえたもので、これを問う討論とその成果を聴いてみたいと思います。
  - 身体をめぐるテーマ
  - 現在、人類学やその周辺領域で議論が活発なテーマ（例えば、災害や気候変動、文化財・文化遺産とアイデンティティなど）
7. セミナー全体についての感想をお答えください。
- とても収穫のある、濃厚な3日間でした。少人数なので、お互いの顔が見えて、個人的にいくらかお話ができました。これまで、どこかでお会いしたことのある方（過去のそれぞれの発表の聴衆として知っていたとか、自分の発表のすぐ次の発表を〔そのときは気づかなかったが〕していたなど）と交流できました。これまで（ご著書などでは知っていても）直接的にはあまり接点のなかった先生方にいろいろご意見をうかがえたのは大きな収穫でした。「この先生に読んでいただきたい」「自分の研究を知っていただきたい」と思っても、突然論文をお送りすることはなかなか難しいので、こうした機会は貴重でした。いままで、薄々気づいてはいた自分の研究の足りない部分をはっきりと具体的な課題として設定できた点で、とてもよかったです。ありがとうございました。
  - セミナー全体を通して、さまざまな分野の研究者と、研究内容や研究活動に関して、活

発な意見交換ができたのが非常に良かった。普段、学会等でも直接お話しする機会のない、民博の先生方から貴重なコメントを頂くことが出来たのも良かった。民博の共同利用に関しても、自身の研究活動において活用できる制度や施設があることがわかったので、今後、積極的に活用したいと思う。

- ・ 応募時は、発表の場としてよい機会だとか、テーマが自分の研究に関連しているからよい機会、としか思っていなかったけれど、実際に参加するなかで、参加者と主催者それぞれからいろいろな話（発表以外でも）をきけたことがかなり参考・勉強になった。今回のテーマ設定については（自分は「アート」←文字通り「art」について、研究の核のひとつとしてずっと考えてきているだけに）、もっと主催者の人たちも一緒に考えていく必要があると感じていて、その点は心残りだけれど、それ以外は、機関研究員の方々、先生方にとってもよくしていただき、すごく満足している。参加させてもらえて本当によかったと感じているし、来年以降、ほかの人たちにもどんどんおすすめしたい。とくに、機関研究員の方々、同じ「若手」であるのに、手本をみせてくれたり、道しるべをあたえてくれたり、気さくに相談にのってくれたり、仕事とはいえ研究で忙しいなか参加者の面倒をみてくれたので、感謝している。もちろん、先生方もふくめ、主催して下さった方々みなさんありがとうございます。
- ・ こうした場を設けてくださったことに対して、感謝いたします。大変有意義な場であったと感じました。ただ、議論に際しましては、それぞれの研究方法やベースとなる理論が異なるため、ある種の困難さも感じました。また中には専門性が高く、発表が十分に理解できないように感じる場面もありました。あらかじめ要旨などを交換し合って、ある程度の認識を共有しておくほうが議論に際して、より深いコメントができるのではないかと思います。
- ・ 民博の各先生方や同じく若手研究者である参加者の方々と知り合い、研究関心を交換することができた点で、非常に学ぶところ大でした。また、さまざまな地域についての報告を聞き、カムイノミを参観することもできたことで、人類学という学問の懐の広さと可能性を感じることができました。貴重な機会を与えていただいたことに、あらためて感謝申し上げます。
- ・ プログラム全体としては、施設見学やカムイノミ見学、展示見学などもあって、盛りだくさんで、非常に楽しかったです。また先生方とお話する機会ができたこともありがたいと思いました。スタッフの皆さま、先生方、ありがとうございました。
- ・ セミナー全体はとても良かったです。
- ・ 全体として、充実していてとてもよかったです。ただ、当初、テーマ設定のカバーする範囲が多様性に富むもので、全体趣旨がはっきりしないまま、発表者に投げっぱなしで始まった印象を受け、全体討論でも、まとめ（今回の成果としての見解）を提示できないで終わった感じがしました。しかし、各自が今後考える上での刺激をたくさん受け、今後の交流の可能性が開けたという意味ではよかったです。発表者たちは、いわゆる西洋近代の概念でのアートを相対化するような対象やアプローチの発表の人ばかりだったので、逆に、従来の狭い意味での「アート」を対象に美学や芸術学から研究している発表もあれば、もっと議論の軸が増えて相対化も進んだのかもしれないと感じました。今回は一般公開ではありませんでしたが、一般公開された年もあったと聞きました。そのあたりの一貫性はどのように決められているのでしょうか。わたしは今回初めての参加ですが、今回に限って言えば、非公開であることで、少人数で密な議論ができたのでよかったです。しかし、テーマに興味を持っている人から、「一般公開されなくて残念」という声も聞きました。成果をなんらかのかたちで公開するでしょうか（ホームページにプログラムと要旨を公開するなど）

資料 5. 文献図書資料整備状況

平成 25 年度図書室関連統計

[受入部門]  
年間受入冊数

資料種別		日本語	外国語	計
図書	購入	1,244	1,648	2,892
	寄贈	1,895	1,241	3,136
	館内刊行物	10	9	19
図書 (小計)		3,149	2,898	6,047
マイクロ資料		1	3	4
AV 資料		101	70	171
図書+マイクロ+AV (小計)		3,251	2,971	6,222
製本雑誌		385	593	978
合計		3,636	3,564	7,200

\* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

蔵書冊数

種別		日本語	外国語	計
蔵書総冊数	図書	231,026	329,964	560,990
	製本雑誌	33,240	61,885	95,125
合計資料		264,266	391,849	656,115

\* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

\* 除却資料は除く。

雑誌購入タイトル数

日本語	外国語	計
174	422	596

(タイトル)

\* 電子オンリー契約タイトルは含まない。

雑誌所蔵種類数

日本語	外国語	計
10,090	6,818	16,908

(タイトル)

電子ジャーナルタイトル数

パッケージ名称	タイトル数
BioOne	203
Cambridge Journals	320
Cell Press	28
JSTOR	1,200
ProjectMUSE	353
ScienceDirect	184
SpringerLINK	1,814
Wiley-Blackwell	1,587
その他	75
合計	5,764

\* 3/31 現在で E-Journal Portal で閲覧可能なタイトル数。

電子ジャーナル・データベース 年間アクセス統計

単位:件

形式	名称	2011年	2012年	2013年	導入時期
電子ジャーナル	BioOne	-	-	-	2006.5
	Cambridge Journals	174	222	230	2008.1
	JSTOR	-	-	-	2002
	Oxford Journals	24	39	51	2006.1
	Project MUSE	256	438	734	2006.1
	Science Direct	256	258	183	
	SpringerLINK	247	337	1,868	
	Wiley-Blackwell	-	-	-	
データベース	Anthropological Index Online	-	-	-	
	Anthropology Online		332	105	2012.4
	Art Index・Humanities Index・Social Sciences Index (EBSCO host)	48	77	68	2007.7
	CNKI	0	306	618	2011.1
	Hapi Online	2	7	15	2004
	Index Islamicus	181	224	157	2006.1
	KISS	122	144	62	2011.1
	MAGAZINE PLUS	48	43	34	2005.4
	ProQuest Dissertation & Theses	217	273	163	2008.1
	ProQuest Research Library	177	235	181	2010.1
	RILM	179	212	156	2009.8
	Scopus	-	-	-	2005.4
Web OYA-bunko	10	4	10	2006.6	
辞典類	Encyclopaedia Britannica Online	2,326	1,978	3,399	2006.1
	Oxford Dictionary of National Biography	5	28	8	2005.1
外部情報検索	Dialog	38	0	1	
	G-Search	0	0	60	
	日経テレコン21	5,269	7,480	7,785	







平成25年度学術潮流サロン

# 身体の更新

第1回 10月 1日 (火)

武村 政春 (東京理科大学・准教授)

「複製的な『ゆらぎ』が身体をつくる」

第2回 10月21日 (月)

都甲 潔 (九州大学・教授)

「味と匂いを目で見る」

第3回 10月29日 (火)

舟橋 國男 (大阪大学・名誉教授)

「ヒトの動き：建築計画学における行動研究」

第4回 11月29日 (金)

宮田 久嗣 (東京慈恵会医科大学・教授)

「依存の脳科学的構造と新規治療薬の可能性

: 違法性薬物から、嗜好品、ギャンブル、インターネット依存まで」

**場所：特別研究室**

**時間：15:30～17:00**

## 資料 8. 人間文化研究機構連携研究

### 連携研究一覧

#### ■連携研究「人間文化資源」の総合的研究

民博	総括班	田村 克己
民博	人間文化資源の保存環境研究	園田 直子
民博	映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用	福岡 正太

#### ■人間文化研究連携共同推進事業 小型連携研究

##### カテゴリーⅠ

民博	「画中画」の世界	宇田川 妙子
民博	驚異と怪異の現象－比較研究の試み	山中 由里子

##### カテゴリーⅢ

民博	文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究－大学共同利用機関の視点から	日高 真吾
----	---	-------

##### カテゴリーⅣ

民博	第2回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存」の開催	菊澤 律子
----	------------------------------------	-------

機構連携研究活動一覧

■機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：研究集会・シンポジウム関係

班	日時	場所	内容
総括班	7月3日	情報システム研究機構 会議室	総括班会議
	3月13日	人間文化研究機構	総括班会議
園田班	5月27日	国立歴史民俗博物館	打ち合わせ
	2月13日	民博 第6セミナー室	研究会
福岡班	5月25日～26日	民博 第3演習室	研究会
	9月22日～23日	大阪人権博物館リバティホール	上映会、打ち合わせ
	10月2日	中野ポレポレ座	打ち合わせ
	10月31日～11月1日	中野ポレポレ座	映像公開、解説
	11月9日～10日	静岡文化芸術大学	打ち合わせ、研究成果発表
	2月18日、22日	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	映像番組上映

■小型連携研究：研究集会・シンポジウム関係

カテゴリー I

※「画中画の世界」(宇田川班)については、今年度の研究会・シンポジウムの活動はなし。

班	日時	場所	内容
山中班	9月20日～10月14日	ドイツ	学会参加
	11月25日～27日	国際日本文化研究センター	国際研究集会、打ち合わせ
	3月18日～19日	東京大学総合博物館インターメディアテク、 国立歴史民俗博物館	打ち合わせ

カテゴリーⅢ

班	日時	場所	内容
日高班	5月15日～16日	民博	打ち合わせ
	5月18日～19日	金沢学院大学、 能登中居鋳物館	意見交換
	5月26日	国立歴史民俗博物館	研究会
	6月4日	東京文化財研究所	意見交換
	6月8日～9日	関東大震災復興記念館、 東北歴史博物館	打ち合わせ
	6月11日～12日	民博	研究会、展示場見学、意見交換
	6月15日～16日	民博	意見交換
	7月7日	東京文化財研究所	情報交換
	8月31日～9月3日	新潟県立歴史博物館、 長岡市立図書館、 長岡震災アーカイブセンター きおくみらい、 中越メモリアル回廊	意見交換
	9月17日～20日	岩沼市ふるさと展示室、 東北歴史博物館、 気仙沼市旧月立中学校	打ち合わせ
	11月18日～21日	東北歴史博物館	打ち合わせ
	11月22日～24日	民博	打ち合わせ
	11月23日	民博	講演
	12月14日～16日	リアスアーク美術館、 岩手県花巻市内	打ち合わせ
	12月14日～16日	気仙沼ホテル一景閣、山水閣	調査報告
1月11日～13日	東北学院大学	ワークショップ	

日高班	1月25日	津田ホール	公開シンポジウム
	1月26日	JPタワー	打ち合わせ
	1月18日～19日	東大寺総合文化センター	意見交換
	2月7日～8日	東北学院大学、月立中学校	ワークショップ、打ち合わせ
	3月16日	民博 第5セミナー室	公開シンポジウム、打ち合わせ
	3月20日～21日	東北歴史博物館	打ち合わせ

カテゴリーⅣ

班	日時	場所	内容
菊澤班	4月27日～28日	民博	打ち合わせ
	5月16日	民博	打ち合わせ
	8月12日	民博	打ち合わせ
	8月23日	民博	打ち合わせ
	9月26日～30日	民博	国際シンポジウム、 フォローアップミーティング

■機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：調査研究関係

班	日 時	場 所
福岡班	9月4日～6日	三島村役場硫黄島出張所
	10月14日～16日	南九州地方、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館、三島村役場
	1月31日～2月2日	徳之島
	3月1日～3日	徳之島

■小型連携研究：調査研究関係

カテゴリーⅠ

※「画中画の世界」（宇田川班）については、今年度の調査研究活動はなし。

班	日 時	場 所
山中班	3月23日～31日	イスラエル、ドイツ

カテゴリーⅢ

班	日 時	場 所
日高班	5月3日～5日	四国民家博物館、広島県立歴史博物館、日本はきもの博物館
	5月31日～6月2日	宮崎県立図書館
	6月8日～9日	関東大震災復興記念館、東北歴史博物館
	6月15日～16日	関東大震災復興記念館、東北歴史博物館
	6月29日～7月2日	リアスアーク美術館、旧月立中学校、東北学院大学、東北歴史博物館
	8月7日～8日	萩博物館
	8月11日～13日	九州国立博物館、雲仙岳災害記念館、萩博物館
	8月28日～29日	萩博物館、萩市須佐歴史民俗資料館



日高班	8月31日～9月3日	新潟県立歴史博物館、長岡市立図書館、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい、中越メモリアル回廊
	10月10日～12日	萩博物館、萩市須佐歴史民俗資料館
	11月16日～17日	萩博物館、萩市須佐歴史民俗資料館
	11月30日～12月1日	原野農芸博物館
	12月14日～16日	リアスアーク美術館、岩手県花巻市内
	12月21日～23日	長岡震災アーカイブセンター、やまこし復興交流館おらたる、新潟県立歴史博物館
	3月27日～19日	宮城県南三陸町防災対策庁舎、岩手県釜石市鶴住居鶴住神社、岩手県宮古市田老海岸

平成25年度科学研究費補助金課題一覧 (H25. 10. 30現在)

(単位：千円)

研究種目	審査区分	所属	職	氏名	計		
基盤研究 (S)		研究戦略センター	教授	關 雄二	37,960	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	
	1件				37,960		
基盤研究 (A)	一般	民族社会研究部	教授	小長谷 有紀	5,850	モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究	
	海外		名誉教授	山本 紀夫	9,490	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究－「高地文明」の発見に向けて	
	一般	民族文化研究部	教授	竹沢 尚一郎	11,310	世界の中のアフリカ史の再構築	
	一般	民族社会研究部	教授	西尾 哲夫	9,190	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト－エジプト系伝承形成の謎を解く	
	4件				36,140		
基盤研究 (B)	一般	民族文化研究部	准教授	山中 由里子	3,640	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	
	一般	民族文化研究部	准教授	鈴木 紀	5,590	社会的包摂のための実践人類学的研究	
	海外	研究戦略センター	教授	岸上 伸啓	3,380	北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権	
	海外	研究戦略センター	教授		4,160	台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用	
	海外		名誉教授	田辺 繁治	8,060	東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動	
	海外	先端人類科学研究部	教授	寺田 吉孝	1,300	インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究	
	海外	民族社会研究部	准教授	P. J. Matthews	1,300	南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究	
	海外		外来研究員	辻 輝之	1,950	宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として	
	一般	文化資源研究センター	教授	園田 直子	5,990	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発	
	一般	文化資源研究センター	准教授	福岡 正太	4,810	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	
	新規、転出	海外	民族文化研究部	准教授	白川 千尋	3,380	東南アジア・オセアニア地域における呪術と科学の相互関係に関する文化人類学的研究
新規	海外	民族文化研究部	教授	杉本 良男	6,110	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	
11件 (-転出1件)				45,890			
基盤研究 (C)	一般	民族文化研究部	教授	森 明子	1,170	21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究－ベルリン外国人集住地区の事例	
	一般	民族文化研究部	教授	吉本 忍	1,300	アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究	
	一般	民族社会研究部	教授	韓 敏	1,690	現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ	
	一般	民族文化研究部	教授	笹原 亮二	1,300	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	
	一般		外来研究員	松岡 葉月	130	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究	
	新規	一般	研究戦略センター	教授	平井 京之介	650	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究
	新規	一般	研究戦略センター	准教授	丹羽 典生	1,300	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大島の移民を事例に
	新規	一般	先端人類科学研究部	准教授	飯田 卓	1,300	パイバス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容
	新規	一般	先端人類科学研究部	教授	鈴木 七美	1,950	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究
	転入	一般		外来研究員	出水 力	1,560	海外生産の技術移転の実態調査
	10件				12,350		
若手研究 (A)	転出	先端人類科学研究部	准教授	陳 天璽	910	グローバル化時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研究	
0件 (-転出1件)							
若手研究 (B)		現代インド拠点	研究員	宮本 万里	910	ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究	
			外来研究員	増野 高司	520	東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究	
			外来研究員	吉本 康子	910	チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究	
	転出		外来研究員	風戸 真理	1,170	生産現場における人とモノの関係性における社会主義経験の多様性と普遍性	
	転出	研究戦略センター	助教	小川 さやか	780	中古品と非正規品の越境取引にみる現代アフリカの消費文化に関する研究	
			外来研究員	相島 葉月	1,040	現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究	
	新規		外来研究員	鈴木 博之	1,170	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究	
	転出		機関研究員	松本 雄一	2,470	ペルー中央高地における初期文明形成過程の研究	
	新規		外来研究員	武田 和久	3,120	17-19世紀南米ラプラタ地域イエズス会布教区の住民名簿に関する歴史人類学的研究	
	新規	研究戦略センター	助教	河合 洋尚	1,300	漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究	
	新規	文化資源研究センター	助教	川瀬 慈	910	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	
	新規	研究戦略センター	機関研究員	加賀谷 真梨	1,430	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究	
	新規	民族社会研究部	准教授	太田 心平	1,170	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	
	10件 (-転出3件)				12,480		
挑戦的萌芽研究		文化資源研究センター	教授	久保 正敏	1,820	動的共創型デジタルアーカイブズ構築—梅神忠夫資料に基づいて	
1件				1,820			
研究活動スタート支援			外来研究員	柳沢 英輔	910	ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態—楽器の製造・流通に着目して	
			外来研究員	新本 万里子	1,170	生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から	
		文化資源研究センター	機関研究員	呉屋 淳子	1,300	現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究	
	転入		外来研究員	長坂 康代	1,170	ベトナム・ハノイにおける都市民衆の相互扶助に関する人類学的研究	
	転入		外来研究員	猪股 (松井) 智子	1,560	女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に	
	新規	先端人類科学研究部	機関研究員	浜田 明範	780	西アフリカにおける生権力の複数性：ガーナ南部における結核対策を事例に	
	新規	先端人類科学研究部	機関研究員	吉田 ゆか子	390	モノからみる芸能文化のグローバル化—バリの仮面と楽器を事例として	
7件				7,280			
研究成果公開促進費	学術図書		外来研究員	大場 千景	1,800	無文字社会における歴史の生成と記憶の技法	
	学術図書		外来 (学術PD)	岡部 真由美	1,500	「開発」を生きたる仏教僧	
	学術図書		外来研究員	舟橋 健太	1,200	現代インドに生きる (改宗仏教徒)	
	データベース	文化資源研究センター	教授	久保 正敏	5,100	梅神忠夫資料のデジタルアーカイブズ	
4件				9,600			
特別研究員奨励費			PD	梶丸 岳	800	民族誌記述による一般歌掛討論の人類学的構築	
			PD	八塚 春名	1,200	タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究	
			PD	岡部 真由美	1,100	タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究	
	新規		PD	市川 彰	1,300	紀元後5世紀イロバング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究	
	新規		PD	比嘉 夏子	1,200	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究：ポリネシアにおける贈与の全体性	
			外国人特別研究員	小長谷有紀/CAIJILAHU	700	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	
6件				6,300			
総 計					169,820		

資料 10. 機関研究プロジェクト

平成 26 年度 機関研究採択プロジェクト一覧

(平成 26. 4. 1 現在)

代表者氏名	所属 研究部 職 名	研究プロジェクト名	研究期間	館内 研究員	共同 研究員 (機関研究)	国際 共同 研究員	総 数
1) 包摂と自律の人間学 (領域代表: 研究戦略センター長 塚田 誠之)							
韓 敏	民族社会 研究部 教授	中国における家族・民族・国家のディスコース	平成 24 年 4 月 1 日 ～平成 27 年 3 月 31 日	10	12	3	25
2) マテリアリティの人間学 (領域代表: 先端人類科学研究部部長 寺田 吉孝)							
佐々木 史郎	先端人類科学 研究部 教授	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究—ロシア民族学博物館との国際共同研究	平成 24 年 4 月 1 日 ～平成 27 年 3 月 31 日	8	3	7	18
菊澤 律子	先端人類科学 研究部 准教授	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	平成 25 年 4 月 1 日 ～平成 28 年 3 月 31 日	7	15	7	29
飯田 卓	先端人類科学 研究部 准教授	文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	平成 25 年 4 月 1 日 ～平成 28 年 3 月 31 日	19	7	3	29

※館内研究員には代表者を含む。

総計	44	37	20	101
----	----	----	----	-----

平成25年度 機関研究研究成果公開活動一覧

領域	研究プロジェクト名	研究代表者 所属・氏名	成果公開のプログラム名	実施形態	実行責任者	日程
包摂と自律の人間学	近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティスペイン領アメリカの集住政策の研究	先端人類科学研究部 准教授 齋藤 晃	公開セミナー「トレドの集住政策研究の新展開」	国際研究者	先端人類科学研究部 准教授 齋藤 晃	H25. 10. 24
	ケアと育みの人類学	先端人類科学研究部 教授 鈴木 七美	国際シンポジウム「社会運動と知の生産—東アジアにおける政治・アイデンティティ・社会変化」	国際研究者	先端人類科学研究部 教授 平井 京之介	H26. 2. 22- 2. 23
	中国における家族・民族・国家のディスコース	民族社会研究部 教授 韓 敏	国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」	国際研究者	民族社会研究部 教授 韓 敏	H25. 11. 18- 19
マテリアリティの人間学	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究	先端人類科学研究部 教授 佐々木 史郎	国際ワークショップ「民族学資料の記録化・情報化の諸問題」	国際研究者	先端人類科学研究部 教授 佐々木 史郎	H25. 9. 23- 9. 27
			国際シンポジウム「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化—収集、保存、展示方法の検討」	国際研究者	先端人類科学研究部 教授 佐々木 史郎	H25. 10. 13- 10. 14
			国際ワークショップ「コンピュータとドキュメンテーション—民族学資料のデジタル化とその利用」	国際研究者	先端人類科学研究部 教授 佐々木 史郎	H26. 3. 4
	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	先端人類科学研究部 准教授 菊澤 律子	語順に関する国際ワークショップ	国際研究者・一般	先端人類科学研究部 准教授 菊澤 律子	H25. 9. 27
			言語の記述に関する国際ワークショップ	国際研究者・一般	先端人類科学研究部 准教授 菊澤 律子	H25. 9. 28
			第2回手話言語学と音声言語学に関する国際シンポジウム (SSL12) 「言語の語順と文構造」	国際研究者・一般	先端人類科学研究部 准教授 菊澤 律子	H25. 9. 29
			みんなくセミナー 暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」	一般	先端人類科学研究部 准教授 菊澤 律子	H25. 12. 1
	文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	先端人類科学研究部 准教授 飯田 卓	国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか？—アフリカの事例から」	一般	先端人類科学研究部 准教授 飯田 卓	H25. 5. 27- 5. 28
			国際ワークショップ「武器をアートに—モザンビークにおける平和構築の営みを考える」	一般	文化資源研究センター 教授 吉田 憲司	H25. 7. 13
			公開フォーラム「負の文化遺産の保存と展示をめぐって」	一般	先端人類科学研究部 教授 竹沢 尚一郎	H26. 1. 18
		H26. 3. 31現在の役職				

資料 11. 研究成果公開プログラム

平成 25 年度館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」一覧

年月日	申請者	共同申請者		種別
H25.4.19-20	民族社会研究部 小長谷有紀教授		国際会議「モンゴルの文化遺産;サンクトペテルブルグおよびウランバートルにおける史料とアーカイブズ・コレクション」	国際研究集会への派遣
H25.6.25-28	民族社会研究部 池谷和信教授		第10回国際狩猟採集社会会議での研究報告	国際研究集会への派遣
H25.7.2-6	先端人類科学研究部 佐々木史郎教授		第10回 全ロシア人類学者民族学者会議 シンポジウム8『研究史と研究方法論』セッション31「18世紀のロシア社会近代化におけるクンストカメラと科学アカデミー」による研究報告	国際研究集会への派遣
H25.7.11-17	先端人類科学研究部 寺田吉孝教授		国際伝統音楽評議会 第42回世界大会における研究発表	国際研究集会への派遣
H25.7.14	研究戦略センター 宮崎広和 外国人研究員	研究戦略センター 丹羽典生准教授	研究フォーラム「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」	研究フォーラム
H25.8.5-10	文化資源研究センター 川瀬 慈助教		第17回国際人類学民族学会議における民族誌映画作品特集のコーディネート	国際研究集会への派遣
H25.10.13	文化資源研究センター 久保正敏教授		国内シンポジウム「渋沢敬三を語る—偉大なる学問の庇護者」	館のシンポジウム
H26.1.8-9	民族社会研究部 小長谷有紀教授		研究フォーラム「ロシアと中国の国境:諸民族の混住する社会における「戦略的パートナーシップ」とは何か?」	研究フォーラム
H26.1.26	研究戦略センター 關 雄二教授		研究フォーラム「古代文明の生成過程—西アジアとアンデス」	研究フォーラム
H26.3.18-22	研究戦略センター 加賀谷真梨 機関研究員		第74回応用人類学会大会における研究発表	国際研究集会への派遣
H26.3.29	研究戦略センター 岸上伸啓教授		公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」	館のシンポジウム

平成 25 年 5 月 16 日

## 平成 25 年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 民族社会研究部・教授

氏 名 小長谷有紀

印

(※共同提案者

所属・職名

氏 名

印)

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長名

塚田誠之

印

### 1. 研究課題名

(原題) The International Conference “Cultural Heritage of the Mongols; Manuscripts and Archival Collection” in St. Petersburg and Ulaanbaatar

(和題) 国際会議「モンゴルの文化遺産；サンクトペテルブルグおよびウランバートルにおける史料とアーカイブズコレクション」

(英題)

### 2. 研究目的

ロシアのなかでもサンクトペテルブルグの諸学術機関には、モンゴルに関する一級の資料が多く保管されており、この学術的利用を促進するために、モンゴル側との協定にもとづいて、初めての国際会議が実施される。協定は2国間であるが、会議にはロシアおよびモンゴル両国以外からも参加することによって、国際的な学術利用のための公開が果たされることになる。この重要な会議に、日本から参加することは、モンゴル研究の日本のプレゼンスを示すうえで重要である。

### 3. 研究組織

氏 名

所 属 ・ 職 名

(館外)

代表者 I. F. ポポワ ロシア科学アカデミー東洋学史料研究所・学術秘書 ロシア側主催者

協力者 S. チョローン モンゴル科学アカデミー歴史学研究所・所長 モンゴル側主催者

### 4. 研究実施状況

ロシア各地各研究機関およびモンゴルからの研究者のみならず、中国、ハンガリー、ポーランド、日本からの研究者が、およそ30名参加して、2日間にわたって国際会議が開催された。

### 5. 研究成果の概要(800字程度)

ロシア人研究者の関心もつばら古典的なチベット仏教学の観点に偏っており、チベット語・モンゴル語の言語学的な検討に集中しているのに対して、他の地域からの研究者は、さまざまな資料の利用の可能性を示した。たとえば、ハンガリーのシャルコジは、チベット仏教の研究の一貫として「地獄絵」をとりあげつつ、その描写が民族誌として利用できることを明示した。

日本から参加したのは、東京外国語大学 AA 研の中見立夫氏と小長谷であり、中見氏は日本におけるモンゴル学関係の資料を概説し、小長谷はモンゴル文化財の海外流出に関してレポートした。小長谷の発表は、文献資料ではないために、ひとり異質ではあったが、学術資料の国際的な公開という点で、本会議の意図に沿っており、今後の国際協力が期待された。とくに、ポーランドの研究者の発表が、ポーランド人の研究者がモンゴルから持ち帰った資料を利用するものでありながら、モンゴル人による研究成果を非難し、あたかも自国だけの宝物であるかのようにふるまう傾向にあったため批判が寄せられ、ひとたび流出した在外資料が誰のものか？という問題をなげかけることとなった。資料を現在所有する側と、資料の発祥地である側との二項対立ではなく、資料を利用するという第三者の立場のかかわりがあることによって、対立を避ける「円卓化」が可能になることがあきらかとなったことは、意義深い。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

現在、フルペーパーが集められており、2013 年中にサンクトペテルブルグから、3ヶ国語（英語、ロシア語、モンゴル語）で刊行される予定である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		230			230	

※ 1. 終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2. ①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3. この報告書電子データを研究戦略センターへ E-mail にて提出願います。

平成 25 年 7 月 16 日

## 平成 25 年度館長リーダーシップ経費報告書

### (研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 民族社会研究部・教授  
氏 名 池谷和信

印

※共同提案者

所属・職名  
氏 名

印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長名 塚田誠之

印

#### 1. 研究課題名

(原題) 10th Conference on Hunting and Gathering Societies

(和題) 第 10 回国際狩猟採集社会会議での研究報告

(英題) 10th Conference on Hunting and Gathering Societies

#### 2. 研究目的

国際狩猟採集社会会議は、世界の狩猟採集民研究者が一堂に集まる会議である。そこでは最先端の研究が報告され、最新の調査内容などの情報交換が行なわれる。このため、この会議で個人研究を報告することによって、世界のなかでの自分の位置を確認することが目的である。

#### 3. 研究組織

氏 名 所 属 ・ 職 名  
(館内)

(館外)

#### 4. 研究実施状況

今回の会議では、世界中からおおよそ 250 名の研究者が会議に参加をして、世界の狩猟採集民に関する歴史、現状、将来について活発な論議がなされた。なかでも熱帯の狩猟採集民であるアフリカのピグミーやハツア、東南アジアのプナンなどの研究報告が多かった。同時に、今回は第 10 回目であるが、Richard Lee や James Woodburn などのように第 1 回から参加をしている研究者が報告をしているのみならず、初めて参加する若手の研究者の数も多かった点は注目される。さらに、



日本での研究が遅れている行動生態学、遺伝学、言語学などの視点からの研究も目立っていた点も新たな研究傾向として指摘できる。

#### 5. 研究成果の概要（800字程度）

今回の会議は、上述したようにアフリカやアジアにおける熱帯の狩猟採集民を対象にした研究があまりにも多く、極北や中南米の研究はほとんどなかった。また、各研究者の関心も専門地域に限定することが多く、世界的な視野をもつような研究者がほとんどいないことがわかった。この点で、報告者が代表を努めた「狩猟採集民と隣人とのかかわり」(Hunter-Gatherers and their Neighbours) というセッションは、ユニークなものであったと確信している。つまり、これは、本会議のなかで最大規模のものであり、報告は2日間にわたり17件(17名、8カ国)の報告がなされたのみならず、アフリカ、アジア、南アメリカの熱帯地域に加えてアマゾンやオリノコ地域、日本のアイヌ、ロシアのエヴェンキの事例もまた紹介された。また、隣人とは農耕民に限定することなく牧畜民、商業民、行政施行者など様々であり、その関係の年代も17世紀から現在までを対象にしている。今回の個別の研究をうまく統合することは、これまでの狩猟採集民研究をこえる新たな研究枠組みの構築につながるであろう。

その一方で、報告者による個別の報告(Historical changes of the relationship between hunter-gatherers and farmers in Botswana)では、カラハリ論争の議論を整理して、自らのフィールドでのエスノヒストリー研究を報告した。これは、これまで研究蓄積のあるカラハリ地域において新たな事実を提示するのみならず、これまでの狩猟採集民と農耕民とのかかわりをめぐる多様な事例をまとめあげる一つのモデルを提示することになったであろう。

#### 6. 研究成果の発表(公開)計画

今回の国際会議への参加によって得られた知見は、民博研究報告に研究論文として投稿する計画である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		297			297	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①(館のシンポジウム)、②(研究フォーラム)の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 先端人類科学研究部 教授  
氏 名 佐々木 史郎

印

※共同提案者

所属・職名

氏 名

印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長名 塚田 誠之

印

1. 研究課題名

(原題) X Конгресс этнографов и антропологов России

Симпозиум 8. История науки и методология исследовательской деятельности.

Секция 31. Кунсткамера и Академия наук в социокультурной модернизации России XVIII в.

(和題) 第10回 全ロシア人類学者民族学会議

シンポジウム8『研究史と研究方法論』

セッション31「18世紀のロシア社会近代化におけるクンсткаメラと科学アカデミー」

(英題) The 10th Congress of Ethnologists and Anthropologists in Russia

Symposium 8 "History of science and methodology of research activities"

Session 31 "Role of Kunstkamera and Academy of Sciences in the sociocultural modernization of Russia in the eighteenth century"

2. 研究目的

ロシア人類学者民族学会議は今年20周年を迎え、10回目の記念大会となった。この大会において、申請者は本館と学術協定を結んでいるロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館より、当博物館が計画しているセッションへの参加を呼びかけられた。そのセッションは「2. 課題名」にある通り、『研究史と研究方法論』というシンポジウムの枠組みに組み込まれたセッション31「18世紀のロシア社会近代化におけるクンсткаメラと科学アカデミー」である。そこにおいて申請者は「18世紀のアカデミーによる千島列島調査がアイヌ研究に残したもの」("Contribution to the Ainu Study: by the Russian Academic Expedition to the Kuril Islands in the eighteenth century")というタイトルで、報告を行うことにした。そこで、ロシア科学アカデミーが行ったカムチャツカ探検とその波及効果で進展した千島探検、そして千島アイヌとの接触がロシアのアイヌ研究、あるいは極東研究にどのような貢献を残したのかという点を明らかにしていきたい。

3. 研究組織

氏 名

所 属 ・ 職 名

(館内)

(館外)

#### 4. 研究実施状況

2013年7月3日にロシア科学アカデミー民族学人類学研究所（住所：ロシア連邦モスクワ市レーニン大通り32番）の727番会議室にて、セッションを実施した。セッションは18世紀に創立されたロシア科学アカデミーが、18世紀のロシアにおける学術調査研究に話した役割と今日的な意義を問い直す内容で、代表者はユーリー・チストフロシア科学アカデミー人類学民族学博物館長だった。そこで報告者は「18世紀のアカデミーによる千島列島調査がアイヌ研究に残したもの」（原題は、Вклад к изучению по айнам: Русскими академическими экспедициями на Курильские острова в XVIII веке）という発表を行い、ベーリング、クラージェニンニコフ、ステラーらをはじめとする18世紀のロシア科学アカデミーのメンバーによるカムチャツカ・千島調査が、その後のアイヌ研究に果たした役割と意義について述べた。彼らの調査そのものはロシアでは有名だが、それを国際的なアイヌ研究という視野から評価したのは今回が初めてである。

#### 5. 研究成果の概要（800字程度）

報告者の発表に刺激されて、人類学民族学博物館のメンバーから新たな事実も紹介された。すなわち、報告者が取り上げたJ. G. Georgiの編著（“Beschreibung aller Nationen des Rußischen Reichs,” 1776）にある千島アイヌのイラストには、白描画が有り、そこに着色して作成されたものであること、その人物が着用している衣装には元になった標本資料があり、それは18世紀のクラージェニンニコフの調査によって収集された衣装であること、そしてその資料は現在人類学民族学博物館に保管されている木綿の衣装（халат 資料番号820-7/2）である可能性が高いことなどが判明した。今後『夷酋列像図』など同時代に我が国で描かれたアイヌ像に関する製作過程や描法などとの比較により、18世紀のアイヌ文化の実像に迫るとともに、当時アイヌと接したロシア、日本の調査者たちのアイヌイメージについてもっと掘り下げることが求められるが、そのための糸口をつかむことができた。

その他、シベリア関係のセッションに出席し、質問、コメントを行った。かつてロシア科学アカデミー民族学研究所はシベリア研究の世界的な中心だったが、ソ連崩壊後の混乱の中で、資金不足に陥り、満足な研究ができない状況におかれた。しかし、ロシア経済が持ち直した2000年代以後は、政府や民間の補助金を得て調査に赴く若手研究者が育ち、ようやく活況を呈してきている。今日の民族学人類学研究所（ソ連時代の民族学研究所）はロシアの民族学・文化人類学の研究センターとしての役割を取り戻し、シベリア研究でも先住民族のエスニシティやアイデンティティの諸問題、新たな宗教活動の問題、開発と伝統文化振興との両立の問題など現代的な諸問題に取り組む姿勢を見せている。ただソ連民族学からの伝統ある歴史的な方法を用いた研究はほとんど見られなかった。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

同じセッションでの報告を元に、人類学民族学博物館では論集を作成する予定で、今回の発表を書き直して、そこに投稿する予定である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		245			245	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度リーダーシップ支援経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 先端人類科学研究部・教授

氏名 寺田 吉孝 印

※共同提案者

所属・職名

氏名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長名 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 国際伝統音楽評議会 第42回世界大会における研究発表

(英題) Roundtable Presentation at the 42nd World Conference of the Interracial Council for Traditional Music (ICTM)

2. 研究目的

中国上海市で開催された国際伝統音楽評議会の第42回世界大会に参加し研究発表を行う。

3. 研究組織

氏名 所属・職名

(館内)

(館外)

4. 研究実施状況

中国上海市にある上海音楽院を会場として、2013年7月11日から17日まで7日間にわたり開催された国際伝統音楽評議会 (International Council for Traditional Music) の第42回世界大会において研究発表をおこなった。国際伝統音楽評議会は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、隔年で世界大会を開催している。本大会の参加者は約550名であり、大会の研究テーマである「マイノリティ音楽・舞踊の表象」「音楽における過去の再考」「民族音楽学、民族舞踊学、音楽教育」「儀礼、宗教とパフォーマンスアート」に沿って、個別発表(約400)、パネル(35)、ラウンドテーブル(6)、映画の上映(6)が実施された。申請者は大会2日目のラウンドテーブル「マイノリティ、音楽、権力」で発表をおこなった。また、大会第3日目の第3セッションで座長を務めたほか、研究グループの総会、各種委員会などに出席した。

5. 研究成果の概要(800字程度)

ラウンドテーブル「マイノリティ、音楽、パワー」は、2012年8月に開かれた同評議会傘下の研究グループ「音楽とマイノリティ」の国際シンポジウムにおける議論が起点となって企画された

ものである。その目的は、音楽研究におけるマイノリティ概念の再検討であり、グローバル化の進行に伴い、マイノリティ/マジョリティ、自己/他者などの二項対立的な概念規定は実効を失いつつあるという共通認識から出発して、新しいマイノリティ概念の形成を目指した。ロシア出身の民族音楽学者インナ・ナロディツカヤ（アメリカ合衆国、ノースウェスタン大学）が座長をつとめ、メンバー3名による報告に基づいて議論をおこなった。報告者は、北米のアジア人の事例をもとに、1) マイノリティは一元的に劣位におかれるのではなく、マイノリティ・マジョリティ関係を形成する複数の軸（民族、宗教、言語、階層、カースト、ジェンダー、セクシュアリティなど）が絡み合っているため、そのよう複合的なアイデンティティと音楽実践との関連を調査する必要性があること、2) マイノリティの音楽実践の基底に、力の不均衡に基づく社会関係や被抑圧の歴史が存在するのならば、その記憶装置として機能する身体により注目する必要があることを指摘した。他のプレゼンターからは、北米におけるマイノリティ概念の歴史的な変遷に関する報告（アデライダ・レイェス）、ロシアのアディゲ人の舞踊を事例とした民族間の交流に関する報告（マルジエット・アンザロコヴァ）があり、多角的にマイノリティ概念の再検討をおこなった。また、フロアからも数多くのコメントが寄せられ、活発な議論がおこなわれた。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

ラウンドテーブルにおける議論をもとにしたエッセイを、メンバーとともに学会誌に投稿予定である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		170		26	196	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 コーネル大学人類学科・教授

氏名 宮崎 広和

印

※共同提案者

所属・職名 研究戦略センター・准教授

氏名 丹羽 典生

印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題) 日本の負債と信用(クレジット)ー金融と贈与の接点

(和題)

(英題) The Gift in Finance: Intersections of Finance and Anthropology

2. 研究目的

本研究フォーラムでは、近年欧米で著しく進展した金融人類学の成果を紹介する。金融人類学は、ウォール街や中央銀行など新しい民族誌的研究の対象を提示するとともに、方法論的にも様々な実験を行い、現代人類学で最も活発な議論が展開されている分野の一つとなっている。また、金融市場の研究を通して貨幣や贈与交換など経済人類学の古典的な問題の再考も行われてきた。このフォーラムでは、とりわけ長年オセアニア民族誌を中心に蓄積されてきた贈与交換論におけるさまざまな知見を踏まえつつ、金融の分析に広角度の文化人類学的視点を提供すると同時に、金融危機など現代金融市場をめぐる諸問題を射程に入れた包括的な経済人類学の構築を目指す。

3. 研究組織

氏名 所属・職名

(館内)

宮崎 広和

コーネル大学・教授

丹羽 典生

研究戦略センター・准教授

(館外)

アナリース・ライルズ

コーネル大学・教授

桜井 英治

東京大学・教授

中村 尚史

東京大学・教授

神山 直樹  
山本 真鳥  
深田 淳太郎

メリルリンチ証券・ストラテジスト  
法政大学・教授  
一橋大学・特別研究員

#### 4. 研究実施状況

2013年7月13日に、研究フォーラムに関する事前の打ち合わせを本館第3演習室にて行った。翌7月14日に、研究フォーラム「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」を本館第4セミナー室にて開催した。

フォーラムは、3本の発表で構成された。日本中世における債務と贈与の抽象化・効率化をめぐる過程を、桜井英治が、オセアニア贈与交換論に依拠しながら分析した。次に、アナリス・ライルズと宮崎広和が、アベノミクスと金融について分析した。最後に、神山直樹が、贈与交換論の観点から「株式」の概念を再検討した。それぞれの発表について、オセアニア贈与交換論の研究者である山本真鳥、メラネシア貨幣論の研究をしてきた深田淳太郎、そして日本経済史・経営史の中村尚史が、コメントを付し、最後にそれを受けて総合討論が行われた。

#### 5. 研究成果の概要（800字程度）

国際ワークショップ「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」を本館で開催することで、発表者4名、コメンテーター3名の他、参加者が約30名集まり、歴史家、人類学者、金融研究者といった学問分野の異なる研究者相互の交流を図った。世界的にも金融の人類学的研究は、近年着手されはじめたばかりであり、日本ではいまだ存在していなかった。そのため、本ワークショップによる活動を通じて、日本の金融人類学という領域を開拓するとともに、本館を金融人類学の研究拠点のひとつとすることができた。

また、ワークショップを通じて、日本の金融を対象に「贈与交換論」の視点から、歴史学・金融学・経済学の研究者とお互いに連携しつつ、議論を重ねることで、現代社会の状況に合致した包括的な経済人類学を構築する礎石となることができた。その際、贈与、株式、負債の概念について中心的に議論がなされた。

さらに、これらの議論から、金融における期待や希望、夢とリスクや不可知性などを帯びた投資行為は、贈与交換の基本的な態度と共通する側面があることが明らかにされた。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

参加者各自による学会発表、原稿作成のほか、SERにて成果報告の一部を発表（公表、報告）する予定である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
	114			204	318	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 文化資源研究センター・助教

氏名 川瀬 慈 印

(※共同提案者

所属・職名

氏名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 第17回国際人類学民族学会議における民族誌映画作品特集のコーディネート

(英題) 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences  
Facilitating the Ethnographic Film Program.

2. 研究目的

日本の若手による映像人類学研究、民族誌映画制作の水準は、国際的なレベルに比肩するにも関わらず、当該分野の論壇で評価されているどころか、一部の例外を除きほとんど知られていない状況にあった。そのようななか、本上映企画の実施を通し、我が国の映像人類学研究、民族誌映画制作の新たな潮流を、世界にアピールする。

3. 研究組織

氏名

所属・職名

(館内)

川瀬 慈

文化資源研究センター・助教

伊藤 悟

外来研究員

(館外)

分藤大翼

信州大学全学機構・准教授

田沼幸子

大阪大学大学院人間科学研究科・助教

森田良成

大阪大学大学院人間科学研究科・特任助教



#### 4. 研究実施状況

平成 25 年 8 月にマンチェスター大学で開催された第 17 回国際人類学民族学会議(IUAES)において、映像人類学に関する 9 つの分科会、並びに 4 つの“region”（日本、中国、ラテンアメリカ、西アフリカ）の研究者作品を特集上映する民族誌映画プログラムが予定通り実施された。川瀬は IUAES 映像人類学理事として、日本の若手研究者による研究作品の特集上映のコーディネートを行った。

#### 5. 研究成果の概要（800字程度）

第 17 回国際人類学民族学会議(IUAES)当日には、川瀬による、日本の民族誌映画制作の歴史に関する口頭のプレゼンテーションを行った。それに続き、日本の映像人類学をけん引する若手研究者 4 名、田沼幸子（大阪大学）、森田良成（大阪大学）、伊藤悟（国立民族学博物館）、分藤大翼（信州大学）による民族誌映画作品を、各国の映像人類学者の前で、上映発表し、参加者と討論を行った。討論のコーディネーター（ファシリテーター）は川瀬が行った。本企画は、映像人類学研究における日本の研究潮流のアピール、研究交流の足掛かりとなる大きな一歩であったといえる。

各国におけるキューバ移民の夢と希望を描いた田沼による「Cuba Sentimental」は、制作者の立場を前景化するラディカルな方法論をとり、カメルーンのバカピグミーの食文化を描いた分藤の「Jo Joko」は、ピグミーの狩猟採集、食生活に関する多様なエピソードを網羅する詩的なモンタージュ法をとる。これに対し、廃品回収を生業とする西ティモールの集団アナボトルを描いた森田の「Ana Botol in West Timor---Life in the City and Village」は制作者森田によるナレーションを基軸にした観察記録映画、雲南省、宏徳タイ族の葬送儀礼を記録した伊藤による「Sensing the journey of the dead」は、字幕やナレーションを排した観察記録映画であった。このように発表者各自の調査地、研究対象、さらには制作方法論も大きく異なる 4 作品の制作方法論について、大会のホスト校であるマンチェスター大学グラナダ映像人類学センターの関係者をはじめ、雲南大学、ライデン大学、トロムソ大学、フランス国立科学研究センター、ゲッティンゲン大学、バルセロナ大学等の世界の映像人類学主要研究機関の関係者たちが、発表者と活発に議論をまじ合わせた。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

本研究の成果は、川瀬が『国立民族学博物館研究報告』において、2014 年度中に公表する予定である。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		298			298	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 文化資源研究センター・教授

氏名 久保 正敏 印

(※共同提案者

所属・職名

氏名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 国内シンポジウム「渋沢敬三を語る―偉大なる学問の庇護者」

(英題) Shibusawa Keizo - The Great Patron of Learning

2. 研究目的

民族学のみならず、渋沢敬三が支援した研究者の専門領域は多岐にわたる。巨額の私費を投じて大勢の研究者を育成したにもかかわらず、その功績は世間に周知されておらず、渋沢敬三の名前も一般にはあまり知られていない。それは一に渋沢敬三自身の一貫した匿名性によるところが大きい。

渋沢敬三は、彼自身すぐれた学究の徒であった。また学問的指導者、研究の組織者としてもすぐれたリーダーシップを発揮した。

このシンポジウムは、そのような渋沢敬三の素顔に迫り、学問のあり方に対する理念と功績を、没後50年を機に明らかにしようとするものである。

3. 研究組織

氏名

所属・職名

(館内)

久保正敏

文化資源研究センター・教授

(館外)

井上 潤

渋沢史料館・館長

内田幸彦

埼玉県立歴史と民俗の博物館・主任学芸員

武田晴人

東京大学・教授

宮本瑞夫

宮本記念財団・理事長

#### 4. 研究実施状況

2013年10月13日(日)13:30~16:30、本館講堂において、以下のプログラムでシンポジウムを開催した。一般参加者は約130名であった。

「開催の挨拶」 須藤健一 本館館長

「趣旨説明」 久保正敏

「祭魚洞・渋沢敬三というひと」 井上潤

「渋沢敬三と父祖の地・埼玉県 アチックミュージアム・コレクションを中心に」 内田幸彦

「銀行家渋沢敬三」 武田晴人

「映像人類学の先駆者」 宮本瑞夫

「ディスカッション」 全員

#### 5. 研究成果の概要(800字程度)

渋沢敬三は、学問の基本はData Firstであるとの信念から、様々な資料を収集してきた。民俗学・民族学に関わるモノ資料だけでなく、映像や写真資料、さらには経済や流通に関する資料をも収集し、それに基づくアーカイブズ形成や博物館設立の構想を打ち立てた。彼の学問は、常に庶民目線に基づいており、人々を国民ではなく常民と呼ぼうとする姿勢にも如実に示されている。彼の謙虚な研究態度や人への接し方は、学際的な共同研究を組織し、それをパトロン、学問的庇護者として展開させていく原動力となり、多くの学徒がそこから育っていったことが、あらためて明らかとなった。学問研究が祖国興隆の基礎である、そのための人作り、組織作りを重視すべきだ、という彼の思想は、現在の我々にとっても大きな指針となる。

彼の収集した資料は、その多岐にわたる性格から、現在では各機関にまたがって収集されているが、彼の遺志を受けて、今後はそれらを横断するアーカイブズ化とその連携が必要であることが、シンポジウムのディスカッサント全員の間で共有できたのは、本シンポジウムの大きな成果である。

#### 6. 研究成果の発表(公開)計画

発表やディスカッションを完全に記録しており、それに基づいた報告書を、SERなどで発表することを計画している。

#### 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
	125			59	184	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①(館のシンポジウム)、②(研究フォーラム)の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 民族社会研究部・教授

氏 名 小長谷有紀 印

※共同提案者

所属・職名

氏 名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 研究フォーラム「ロシアと中国の国境：諸民族の混住する社会における「戦略的パートナーシップ」とは何か？」

(英題) The Russian-Chinese Border: A 'Strategic Partnership' in Mosaic of Indigenous Societies

2. 研究目的

「戦略的パートナーシップ」とは、自己に利益があることを前提に他者と協力的関係を築くことであり、国際関係をめぐる政治用語として定着している。ロシアと中国のあいだはすでに1996年4月に「戦略的パートナーシップ」を宣言している。本会議では、そうした国際関係のもとにある地域で具体的にどのような社会現象が生じているかを、諸民族の生存戦略という視点から具体的にあきらかにするものである。

対象とするのは、ロシアと中国がまさに国境をもって接している中国東北地方である。当該地域には、モンゴル系のバルガ族、ブリヤート族、ダグル族、モンゴル族(ハルチン部やホルチン部)のほか、ツングース系のエヴェンキ族、さらに自系ロシア人、ウクライナ人などが混住している。伝統的に、彼らのあいだでは「アング」とよばれる同盟関係があったことはよく知られており、現在でも諸民族の共生がみとめられる。しかし、それらの諸民族は国際関係の急激な変化のもとで関係性を変えている、と考えられている。すなわち、国際政治の用語を参照することによって、現代の国境地域における諸民族関係をより深く読み解くことができるのではないかと期待される。モンゴル研究にとっては、人類学が政治学と学際性を切り結ぶことによって新たな実りがもたらされることになるだろう。

### 3. 研究組織

氏名	所属・職名	研究分担
(館内)		
代表者 小長谷有紀	民族社会研究部・教授	総括
協力者 Olga Shaglanova	国立民族学博物館・外来研究員	企画
佐々木史郎	先端人類学研究部・教授	中ロ少数民族研究
(館外)		
岩下 明弘	北海道大学スラブ研究センター・教授	政治学
Caroline Humphrey	ケンブリッジ大学・名誉教授	モンゴル研究
Franck Billé	ケンブリッジ大学・講師	中国研究
Viktor Zatsepine	コネチカット大学・教授	中ロ関係
Park Song-Yong	韓国嶺南大学・教授	国際関係論
Yang Cheng	中国華東師範大学・教授	ロシア研究

### 4. 研究実施状況

予定通り、1月8日9日の2日間にわたって国際シンポジウムを実施した。

現在、ケンブリッジ大学モンゴル・内陸アジア研究所では、ボーダーに関する文化人類学として研究が進められており、その研究を率いているハンフリー名誉教授とその弟子であるビレ氏をはじめとして、彼らと共同研究の経験をもつ4人の研究者（韓国から国際関係を研究する人類学者、アメリカから中国・ロシア関係を研究する人類学者）を招聘した。

一方、政治学の立場からボーダースタディーズを率いている北海道大学スラブ研究センターの岩下教授に参加を要請し、その共同研究者として中国でロシア研究をおこなっているヤン教授を招聘した。

館内からは、外来研究員としてロシア連邦ブリヤート共和国から本館に滞在しているオルガ氏がコーディネイトから司会までをつとめ、佐々木、小長谷が参加した。

当日は、遠来からの大学院生の参加もふくめて、人類学、政治学、モンゴル研究などの分野からのおよそ10名の聴講者があり、積極的な質問もあり、当問題の関心の深さがうかがわれた。

### 5. 研究成果の概要（800字程度）

まず冒頭で、国際政治学の立場から中ロ関係の急激な変化がもつ研究史上の意味が整理されたうえで、人類学の立場から国および文化による国境認識のちがいが指摘された。次に、政治学の立場から中ロ国境地域で実施された経済開発の影響評価があり、人類学の立場からは過去の損失に関する記憶が現在の政治キャンペーンに大きく影響するという、影響の異なる側面が指摘された。

ロシア、中国双方の現在のテレビ番組で、当該地域の歴史がどのように放映されているかという観点からの分析からは、現在の政治環境にもとづいて過去が再構成されていることが明らかになった。すなわち、政治学が分析する現状を反映して過去が語られることを人類学が分析するうえで、テレビ番組は格好の対象となるわけである。

現地の人々の実態調査にもとづく4つの研究のうち、3つはブリヤートの研究であり、ロシア、モンゴル、中国の3カ国をまたぐ国境地域において越境が新たな集団特性を生んでいることが明らかとなった。一方、もう1つのナナイ（ヘジェ）に関する研究は、中ロの国際関係が影響したがゆえに民族誌的記述が原始的な人びとという理解をもたらしたことを明らかにした。

以上のような発表にもとづいて、質疑応答がおこなわれた。その過程で、現地の人々の生活に関して実態的な分析をおこなおうとする人類学の特徴が明瞭となるとともに、政治学にも一定の影響を与えることが確認された。また、モンゴル研究にとっては、現代のトランスナショナルな動きを捉える枠組みが、本シンポジウムを契機に提示されるだろう。

ただし、国際シンポジウムのタイトルに含まれていた「戦略的パートナーシップ」というキーワードにこだわった研究は少なかったため、論文集をまとめるにあたっては、より広義なタイトルをつけなければならないと判断された。

## 6. 研究成果の発表（公開）計画

発表者9名からの完成原稿の締め切りを2月末とし、オーガナイザーとして小長谷およびオルガによる編集作業をへて、出版委員会にSER英語論文集として提出を予定している

## 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
	1,477				1,477	

- ※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。
- ※ 2.①（館のシンポジウム）、②（研究フォーラム）の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。
- ※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 研究戦略センター・教授  
氏 名 關 雄二 印

※共同提案者

所属・職名  
氏 名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 公開フォーラム「古代文明の生成過程—西アジアとアンデス」

(英題) Formation of Ancient Civilizations: West Asia and Andes

2. 研究目的

西アジアの文明を専門とする国内の考古学者2名を招へいし、権力生成に関して南米の古代文明と比較する研究フォーラムを古代アメリカ学会の協力を得て行う。これは、科研費プロジェクトの成果公開の一環であり、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、経済という視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

このシンポジウムを通じ、西アジアにおいて成立した古代文明の経済的基盤を明らかにするのみならず、権力形成という視点を通して、経済を支えていた農作物、海産物、動物資源、そして他の自然資源自体に刻み込まれた世界観にまで光を当てる予定である。これにより、生態学、あるいはマルクス主義的歴史観の中で矮小化されてきた先史時代の資源利用をより多角的、複合的にとらえることが可能になる。また西アジアと比較することで、アンデス文明の特徴が浮かび上がることは間違いない。結果として、これは文明論の新たな研究動向を一般社会に公表し、人類の未来像を探るための機会を提供することにつながると考えられる。

3. 研究組織

氏 名	所 属 ・ 職 名
(館内)	
關 雄二	国立民族学博物館・教授
山本 睦	国立民族学博物館機関研究員
(館外)	
芝田幸一郎	神戸市外国語大学・准教授

主催：国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関 雄二）

協力：古代アメリカ学会

#### 4. 研究実施状況

公開フォーラム「古代文明の生成過程—西アジアとアンデス」

日時：2014年1月26日（日）13:00～16:00 [開場 12:30]

会場：JPタワーホール&カンファレンス ホール1（東京都千代田区丸の内2丁目7番2号 JPタワー4階）

#### プログラム

13:00～13:05 あいさつ

13:05～13:35 「西アジア最古の「神殿」 —アナトリア考古学最新事情—

三宅 裕（筑波大学）

13:35～14:05 「西アジアにおける文明形成と社会変容：最近の調査成果を中心に」

下釜和也（古代オリエント博物館）

14:05～14:35 「古代アンデスの神殿と世界観：ワカ・パルティエダ遺跡の壁画をめぐって」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）

14:35～15:05 「ジャガー人間石彫の発見：アンデス文明における社会的格差の出現」

関 雄二（国立民族学博物館）

15:05～15:15 休憩

15:15～16:00 ディスカッション

#### 5. 研究成果の概要（800字程度）

従来、西アジアでは豊かな自然環境のもと、狩猟採集から農耕定住、余剰生産物の蓄積、そして巨大なモニュメントの建設へと連なる文明形成過程が示されてきた。その一方、アンデスでは西アジアと異なり、神殿を中心とした独自の文明形成過程が指摘されてきた。しかしながら、近年の両地域における調査成果によると、両地域に展開した古代文明についての文明観、あるいは両文明の特性についての議論は大きく変化しつつある。

このことをふまえて、本フォーラムでは最新の調査成果にもとづいた発表がおこなわれた。前半の西アジアの発表では、はじめに三宅氏よりトルコ南東部に位置するギョベックリ・テペ遺跡での発掘調査データを中心に、新石器時代についての新たな社会像が提示された。とくに定住を伴う採集狩猟社会で巨石公共建造物が築かれること自体は、かつて経済基盤を重視する唯物史観が西アジアで隆盛を極めたことを考えると隔世の感を禁じ得ない。次に下釜氏は、新石器時代から銅石器時代までのメソポタミア地域を俯瞰しながら、社会内部に格差のない単純な集落から、首長層が集権的に支配し多くの人口を支える都市集落へと連続的に発展してきた様相を明らかにした。後半のアンデスの発表では、まず、芝田氏がペルー北部海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティエダ遺跡での調査成果をもとに、神殿における図像表現が天上、地上、地下の世界観と関連している点を示した。また、関はペルー北部高地のパコパンパ遺跡におけるジャガー人間を表した石彫の発見などを通じて、アンデスにおける社会的格差の出現について論じた。そして最後には、両文明の比較検討を含めた総合的な討論がおこなわれた。

#### 6. 研究成果の発表（公開）計画

現在、成果の出版について在京の出版社と協議を行っており、まだ企画案の段階であるが、一般書籍として出版できる可能性が高い。



7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円 672	千円 672	

- ※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。
- ※ 2.① (館のシンポジウム)、② (研究フォーラム) の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。
- ※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 研究戦略センター・機関研究員  
氏 名 加賀谷真梨 印

※共同提案者

所属・職名  
氏 名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題) The Society For Applied Anthropology

(和題) 応用人類学会

(英題) The Society For Applied Anthropology

2. 研究目的

第74回応用人類学会大会に参加し、研究成果を発表する。

3. 研究組織

氏 名	所 属 ・ 職 名
(館内) 加賀谷真梨	研究戦略センター・機関研究員
(館外)	

4. 研究実施状況

3月18日に「Children's Bodies and Parenting」というセッションにおいて、“*Friction in value as represented by children's bodies*”という発表題目で発表を行った。

5. 研究成果の概要(800字程度)

申請者は、日本の最南の島に移住してきた30代・40代の子どもを持つ内地出身女性に、自然主義的思考を持つ人が少ない背景を、島社会における彼女たちの不安定な位置づけと結びつけて考察した。また、必ずしもそうした母親の価値観が子どもに踏襲され母子が島社会で疎外されるのではなく、むしろ在来の住民がその子どもに積極的に働きかけるため、それが母親の思考を更に強化させるプロセスがあること。すなわち、子どもの身体上で母親と在来の住民との間で子の帰属をめぐる駆け引きが展開されていることを指摘した。

聴講者からのコメントとして、今後本土の同世代の母親との比較や、アメリカの女性との比較に展開していくことが望ましいという助言を得た。

申請者の発表は微細なデータを手がかりにコンテキストに重きを置いた内容であったが、他の発表者には、僅かなインタビューを行っただけで民族誌的調査と言明している者も少なくなく、学会の作法の相違に抵抗を感じる場面が多々あった。但し、短い発表時間でナラティブまで導入する申請者の発表方法にも再検討の余地があることを、一部の素晴らしい発表から学ぶことができた。また研究の主題に関しても日本とは異なり、女性に対する暴力や肥満等、人種、階層、文化の交差点に生じる現象が多々取り上げられており、人類学的調査を通じた問題解決への期待が大きい現状が伺われた。なお、ジェンダーに関心のある複数の研究者との関係性も構築できたことを付言する。

## 6. 研究成果の発表（公開）計画

発表原稿に加筆修正を加えて、SfAAの機関雑誌“Human Organization”、あるいは、子ども研究の雑誌“Childhood”に投稿する予定である。

## 7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円	千円	
		301		15	316	

※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。

※ 2.①(館のシンポジウム)、②(研究フォーラム)の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。

※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

平成25年度館長リーダーシップ経費報告書

(研究成果公開プログラム)

申請者

所属・職名 研究戦略センター・教授  
氏 名 岸上 伸啓 印

※共同提案者

所属・職名  
氏 名 印

※この欄には、申請者が(特別)客員教員や館外の共同研究代表者などである場合、民博の専任研究教育職員及び特任教員を共同提案者として必ず記入すること。

研究戦略センター長 塚田 誠之 印

1. 研究課題名

(原題)

(和題) 公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」

(英題) Fieldwork on Prof. Motoko Katakura

2. 研究目的

片倉もとこ先生(国立民族学博物館名誉教授、国際日本文化研究センター元所長/名誉教授、元比較文明学会副会長)は、平成25年2月23日に逝去されました。このたび没後1周年を機に、イスラーム研究を中心に文化人類学、比較文明学等の幅広い分野で国際的に活躍された片倉先生の研究業績を振り返り、それを一層発展させていくための公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」を企画した

3. 研究組織

氏 名

所 属 ・ 職 名

(館内)

岸上 伸啓

研究戦略センター・教授

(館外)

中牧 弘允

名誉教授、吹田市立博物館・館長

4. 研究実施状況

総合司会：中牧弘允(比較文明学会副会長、吹田市立博物館長)

13:30-13:45 挨拶 国立民族学博物館長 須藤健一

国際日本文化研究センター所長 小松和彦

趣旨説明 比較文明学会副会長(関西支部長) 中牧弘允

- 13:45-14:15 講演1 西尾哲夫 (国立民族学博物館教授)  
「イスラームの世界観—アラビアンナイトから考える」
- 14:15-14:45 講演2 龍村あや子 (京都市立芸術大学教授、比較文明学会理事 (関西支部副  
支部長))  
「イスラームの音文化」
- 14:45-15:00 休憩
- 15:00-15:55 パネル1 「イスラームの女性たちは今」  
司会: 加藤久典 (大阪物療大学教授)  
パネリスト: 宮治美江子 (東京国際大学名誉教授)  
鷹木恵子 (桜美林大学教授)  
中西久枝 (同志社大学教授)
- 討論  
15:55-16:00 休憩
- 16:00-17:00 パネル2 「出会いとフィールド・ワーク」  
司会: 三井泉 (日本大学教授)  
パネリスト: 清水芳見 (中央大学教授)  
藤本透子 (国立民族学博物館助教)  
井上章一 (国際日本文化研究センター教授)  
吹田靖子 (片倉先生の学友)
- 討論

#### 5. 研究成果の概要 (800字程度)

講演1(西尾哲夫)では、和辻哲郎の「砂漠的人間」と片倉もとこの「ゆとろぎ」の比較を導入とし、アラブ遊牧民の民俗的空間認識と他者観について言語学的分析をおこない、「ゆとろぎ」とも通じあうよそ者を迎え入れる「ダヒール」とよばれる制度をモデル化し、アラビアンナイトの世界観にも言及した。講演2(龍村あや子)では、イスラームの礼拝におけるアザーンの比較をとおして多様な音文化の紹介がなされた。

パネル1では、イスラームの女性の現在につき、チュニジアの民衆革命後の女性たちについて宮治、鷹木両氏からの報告が続き、中西氏のほうからは、イランの女性とヴェールの問題について、いずれも片倉との関係に触れながら、報告があった。パネル2では、片倉にすすめられて着手したヨルダンの調査について清水が語り、片倉とは1回しか言葉を交わしたことがなかった藤本がそのときの会話をふまえたカザフスタンのイスラーム社会でのとりくみについて報告した。井上は日文研所長時代の片倉についてエピソードを語り、吹田は節々における片倉との協働の思い出を親友として披露した。討論では、夫の片倉邦雄氏(元駐 UAE、イラク、エジプト大使)が片倉もとこのフィールド・ワークの特徴についてコメントした。

参加者は定員80名のところ115名(スタッフ5名を含む)となった。

#### 6. 研究成果の発表(公開)計画

比較文明学会の会報に関西支部報告として2頁分を掲載する予定である。

7. 経費

国内旅費	国内旅費 (館外者)	外国旅費	外国人招へい 帰国旅費	物件費	計	備考
千円	千円	千円	千円	千円 99	千円 99	

- ※ 1.終了後、2週間以内に提出のこと。
- ※ 2.① (館のシンポジウム)、② (研究フォーラム) の場合、別途チラシ、アブストラクト、プロシーディング、抄録等を研究戦略センターへ30部提出すること。
- ※ 3.この報告書電子データを研究戦略センターへE-mailにて提出願います。

資料12. 公開講演会

みんな 公開講演会

# ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし

ユーラシアの要に位置するミャンマー。

民主化の進展や海外からの経済進出の拡大など、

世界で今最も注目を集めている国の一つです。

政治や経済の変動は人びとの暮らしをどのように変えているのか。

この国はこれからどのような道を歩むのか。

第一線の研究者が現地調査の経験を踏まえ、

ミャンマーの過去、現在、未来に迫ります。



【日時】2013年10月25日 [金] 18:30~20:40 (17:30開場)

【場所】日経ホール (東京都千代田区大手町1-3-7 日本経済新聞社ビル3階)

【定員】600名 【参加費】無料 (要申込/「参加証」が必要です) \*手話通訳あり

主催 国立民族学博物館・日本経済新聞社

みんなく  
携帯  
サイト



# 刻んだ歴史 ミャンマー 未来へのまなざし

## 講演1「社会の底流から民主化を考える」田村 克己(国立民族学博物館・民族社会研究部・教授)

ミャンマーは今、社会の大きな転換期を迎えている。そうしたなかで、国民の大多数を占める上座部仏教徒の宗教的行為はどのように変容していくのか？

仏教と王権のうえにつくりあげられてきた伝統文化はどのようになるのか？ 伝統的な価値観や倫理観とうらはらな、特有の社会関係のあり方は変わっていくのか？

あらためて考えていきたい。

## 講演2「アウンサンスーチーと民主化のゆくえ」伊野 憲治(北九州市立大学・地域創生学群・教授)

「慈悲の政治」という言葉で特徴付けられる、ガンディーや仏教思想をベースとしたアウンサンスーチーの政治思想・理念を検討し、その実現を目指す民主化運動の抱える矛盾と苦悩を明らかにする。その上で、ミャンマー政治の現状と今後のミャンマーの民主化のゆくえ、「慈悲の政治」の実現可能性について考えていきたい。

### プロフィール

#### 田村 克己(たむら・かつみ)

専門は、東南アジア文化人類学。70年代後半から調査を行っているビルマ(ミャンマー)を中心に、東南アジア大陸部及び中国南部などで、現地調査にもとづく研究を進めている。著書に「レッスンなきシナリオ」(近刊、風響社)、編著書に「ミャンマー(ビルマ)を知るための60章」(2013年、明石書店)、「文化の生産」(1998年、ドメス出版)などがある。



#### 伊野 憲治(いの・けんじ)

1959年生まれ。1992年、一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。大学院在籍中の1988年3月より91年2月までの3年間、在ミャンマー日本国大使館に専門調査員として勤務。著書に「ビルマ農民大反乱(1930-1932)-反乱下の農民像-」(1998年、信山社)、編訳書に「アウンサンスーチー演説集」(1996年、みすず書房)などがある。



#### 土佐 桂子(とさ・けいこ)

専門は、文化人類学(東南アジア、主にミャンマーの宗教と社会)。90年代からミャンマー連邦、ヤンゴン、カレン州などの現地調査を行ってきた。近年では、サンガ政策や宗教と民族の問題にも関心を持っている。著書に「ビルマのウェイザー信仰」(2000年、勁草書房)、訳書にアウンサンスーチー「増補復刻版ビルマからの手紙」(2012年、毎日新聞社、永井浩と共訳)などがある。



### プログラム

司会: 榎永 真佐夫(国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授)

17:30 開場

18:30 開会 宮本 明彦(日本経済新聞社大阪本社・編集局長)

18:35 挨拶 須藤 健一(国立民族学博物館・館長)

18:40 講演1 田村 克己(国立民族学博物館・民族社会研究部・教授)

19:15 講演2 伊野 憲治(北九州市立大学・地域創生学群・教授)

19:50 休憩

20:05 パネルディスカッション(司会: 三尾 稔/国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授)  
コメンテーター

土佐 桂子(東京外国語大学大学院・総合国際学研究院・教授)・田村 克己・伊野 憲治

20:40 終了

申込方法: 申込方法: 「10月25日講演会参加希望」と明記の上、ハガキ、FAX、メールにてお申し込みください。お申し込みの場合は、次の①~⑥を記載してください。①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会などのご案内送付希望の有無(次のア~ウのうち希望する記号を☑ア、講演会を含む民博主催の研究会・催物等の案内を希望する/イ、講演会のみを希望する/ウ、いずれの案内も希望しない)

9月下旬より順次参加証を発送する予定です。

※1: 応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。

※2: 2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①~⑥をご記載ください。

※3: 手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用される方は、お席を用意いたしますので、お申し込みの際に必ずご記載ください。

※4: 参加申込みをいただいた方の個人情報、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には使用いたしません。

宛先: 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 研究協力課 宛

●FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先: 国立民族学博物館 研究協力課 研究協力係

●TEL 06-6878-8209 ●URL <http://www.minpaku.ac.jp/>

注意事項: 会場には必ず参加証をご持参ください。参加証はお一人様一枚となっております。

・参加証がない方は会場には入れませんのでご注意ください。

○東京メトロ・千代田線「大手町駅」中央改札より徒歩約4分・丸ノ内線「大手町駅」鎌倉橋方面改札より徒歩約5分

・半蔵門線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約5分

・東西線「大手町駅」中央改札より徒歩約9分・東西線「竹橋駅」大手門口方面改札より徒歩約3分

○都営地下鉄・三田線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約6分 ※地下鉄「大手町駅」下車C2b出口直結





**国立民族学博物館公開講演会**  
**ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし**  
**参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告**

日時:平成25年10月25日(金)18:30～20:40(開場17:30)  
 場所:日経ホール(東京都千代田区大手町1-3-7 日経ビル3階)  
 天候:雨

	平成25年度	平成24年度	平成23年度	平成22年度
開催日程	平成25年10月25日(金)	平成24年10月26日(金)	平成23年11月4日(金)	平成22年10月29日(金)
開催場所	日経ホール	日経ホール	日経ホール	日経ホール
募集定員 A	600名	600名	600名	600名
参加申込総数 B	604名	785名	465名	691名
申込者出席数 C	426名	555名	249名	391名
当日参加者数 D	1名	9名	9名	12名
参加者総数 E=C+D	427名	564名	258名	403名
申込者出席率 C/B	70.5%	70.7%	53.5%	56.6%
アンケート回答者数 F	268名	387名	208名	293名
アンケート回答率 F/E	62.8%	68.6%	80.6%	72.7%

(小数点第二位以下四捨五入)

過去の公開講演会テーマ

- 平成24年度 国立民族学博物館公開講演会 「だから人類は地球を歩いた—太平洋へ アメリカへ」 □
- 平成23年度 国立民族学博物館公開講演会 「ワタシのIBASHO-新しい『ふるさと』像を求めて」
- 平成22年度 国立民族学博物館公開講演会 「世界の結婚事情 —セネガル、中国、フランスから考える」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

## 平成25年度 公開講演会参加状況内訳

### 申込方法別参加状況

(名)

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計	参加者数(b)	(b)／参加者数合計	出席率(b/a)
ハガキ	126	20.9%	58	13.6%	46.0%
FAX	105	17.4%	57	13.3%	54.3%
メール	365	60.4%	261	61.1%	71.5%
一般招待者	8	1.3%	7	1.6%	87.5%
教員招待者*	—	—	43	10.1%	—
当日参加	—	—	1	0.2%	—
合計	604	100%	427	100%	70.7%

\*教員が直接参加証を配布

(小数点第二位以下四捨五入)

### 都道府県等別参加者状況

(名)

都道府県等	参加者数	備 考
東京都	264	(国立市、多摩市、町田市、外)
神奈川県	42	(横浜市、川崎市、座間市、鎌倉市、外)
千葉県	36	(千葉市、市川市、船橋市、外)
埼玉県	29	(さいたま市、所沢市、川口市、外)
茨城県	3	(鉾田市、守谷市)
群馬県	2	(伊勢崎市、伊波郡)
福島県	2	(須賀川市、白河市)
栃木県	1	(佐野市)
北海道	1	(札幌市)
中部地方	1	(静岡県)
関西地方	2	(大阪府、奈良県)
住所不明	44	(教員招待者※ 43名を含む)
合計	427	

※参加証は 直接教員による手渡しのため、ハガキに住所等の記載がなく確認不可

# アンケート集計結果報告

## 1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
日本経済新聞	49
月刊みんぱく9月号挟み込みチラシ	11
月刊みんぱく10月号	5
みんぱくカレンダー(冊子)	0
ポスター・チラシ※1	29
ホームページ※2	8
メールリスト	11
案内状をもらって	109
友人や知人から聞いて	50
その他※3	11
無回答	3
計	286

### ※1 ポスター・チラシを見た場所

みんぱく	0
大学	9
公共図書館	8
役所、公立施設	1
文化センター・生涯学習施設	2
博物館・美術館	1
職場	1
日経ホール	1
その他	2
無記入	4
計	29

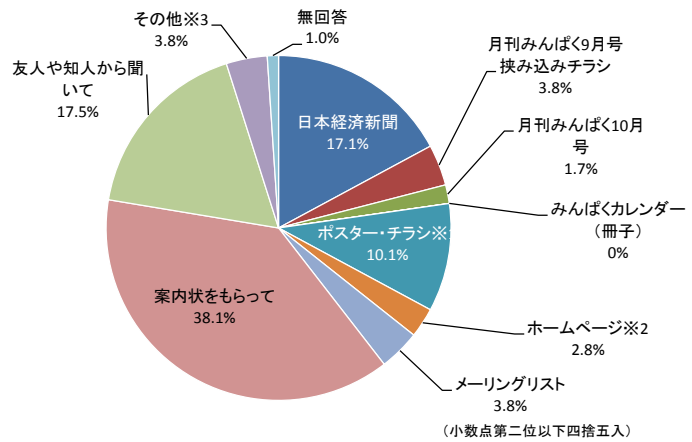
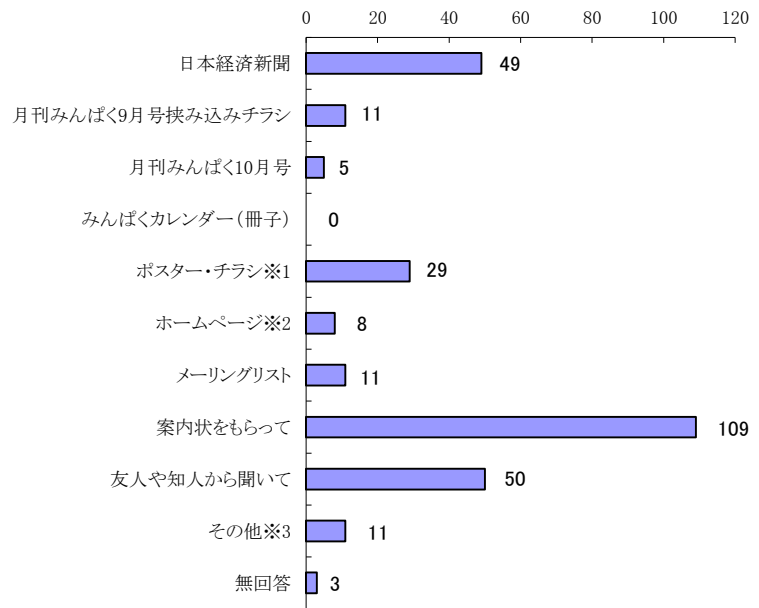
### ※2 ホームページ

計	8
---	---

### ※3 その他

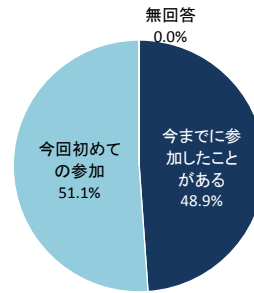
読売新聞	1
日本ミャンマー友好協会メール連絡	1
Facebook	1
田村先生より	5
大学図書館	1
職場での案内	1
記述なし	1
計	11

### 1. 講演会を何で知ったか



## 2. 公開講演会の参加について

	(名)
今までに参加したことがある	131
今回初めての参加	137
無回答	0
計	268

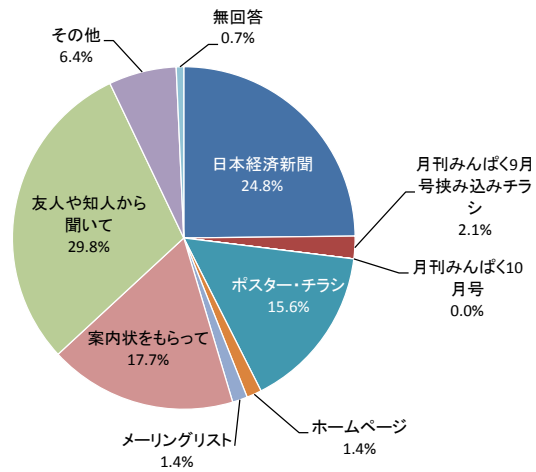
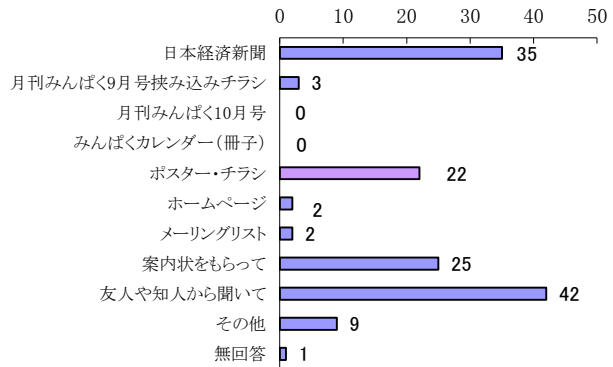


(小数点第二位以下四捨五入)

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

	(名)
日本経済新聞	35
月刊みんぱく9月号挟み込みチラシ	3
月刊みんぱく10月号	0
みんぱくカレンダー(冊子)	0
ポスター・チラシ	22
ホームページ	2
メールリスト	2
案内状をもらって	25
友人や知人から聞いて	42
その他	9
無回答	1
計	141

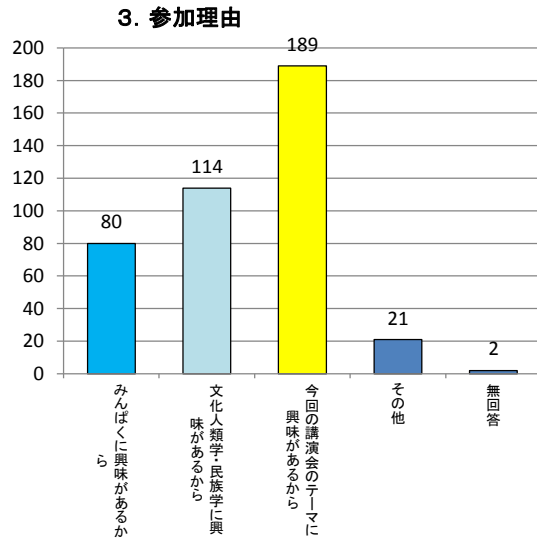
### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか



(小数点第二位以下四捨五入)

### 3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

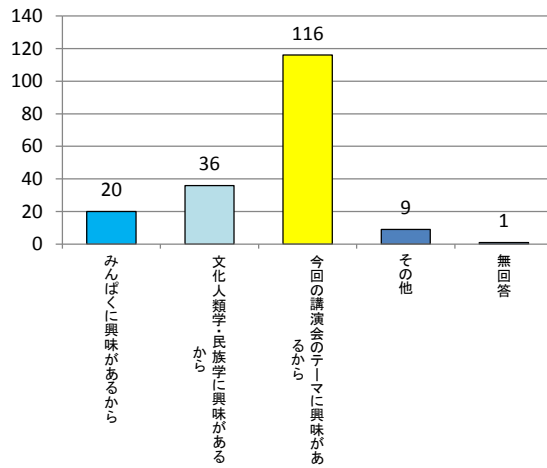
(名)	
みんなくに興味があるから	80
文化人類学・民族学に興味があるから	114
今回の講演会のテーマに興味があるから	189
その他	21
無回答	2
計	406



### 【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

みんなくに興味があるから	20
文化人類学・民族学に興味があるから	36
今回の講演会のテーマに興味があるから	116
その他	9
無回答	1
計	182

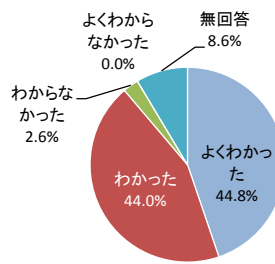
### 【参考】初参加者の理由



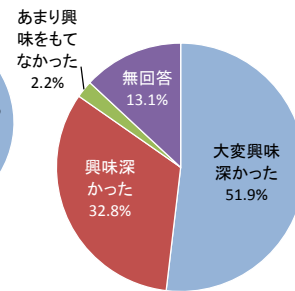
#### 4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

(名)		
①理解	よくわかった	120
	わかった	118
	わからなかった	7
	よくわからなかった	0
	無回答	23
計		268
②興味	大変興味深かった	139
	興味深かった	88
	あまり興味をもてなかった	6
	無回答	35
	計	

4-1 理解



4-2 興味



(小数点第二位以下四捨五入)

#### ①の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

##### よくわかった、わかった理由

- ・ミャンマー、仏教に関心があるから
- ・話の内容が具体的でビジュアル資料も多く、わかりやすかった。
- ・説明がわかりやすい
- ・ミャンマーについての知識、現地経験を有しているのので“解りやすい”
- ・講演者の方はとても丁寧に説明しながら話してくださいました。
- ・ディスカッションが発表を理解するうえで役立った。プレゼンする方法をもう少し考えてもよいかも。
- ・短時間にまとめてくださって 映像も入れ、実際に足を運んでくださった熱意。
- ・的をしばった話でした。
- ・ミャンマーという国の本質的な違いを分かりやすく話された。未来への期待も大きい。
- ・アウンサンスーチーさんの話が整理されていてよかった

##### わからなかった理由

- ・学術的すぎ。日経主催なのでもう少し現在のビジネス状況も教えてほしい。
- ・「はじめに仏教ありき」で民主化の話をするとてもわかりにくい。信仰と生活倫理とも違うものがあると思うので、少し頭を切り替えて討議していくのもよいのではないのでしょうか。
- ・仏教を通じた歴史、文化が連続と続いてきたことを今後の民主化との関わりがいかにか結びつくのか、今一つ判り難かった。(パネルディスカッションの前の感想)
- ・両講演とも終了ちかくに結論らしきものがあって説明不足と感じた。

#### ②の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

##### 大変興味深かった、興味深かった理由

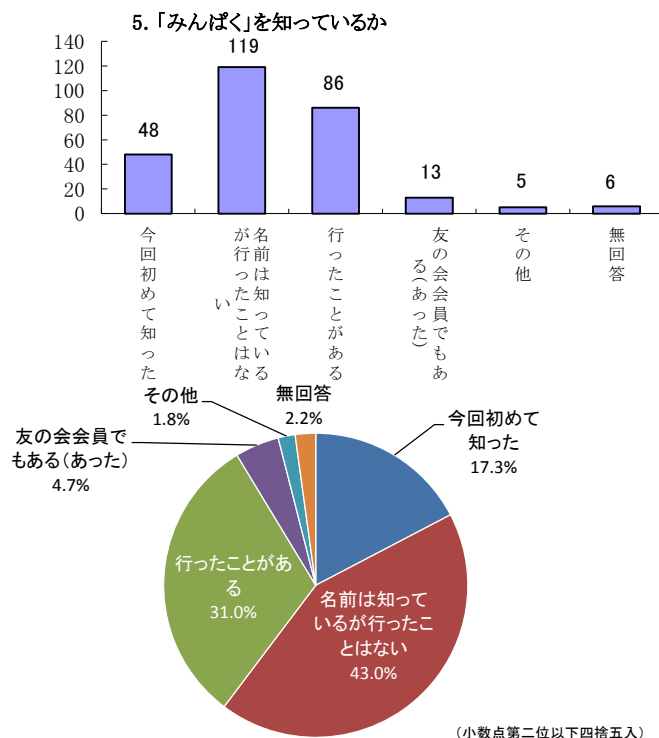
- ・ミャンマー語ビデオの解説付き説明は大変よくわかった。
- ・日本側の捉え方として興味深い。
- ・民主主義は宗教が絡む、故に民主化の難しさを感じた。
- ・伊野先生のスーチー氏の分析は 目からウロコだった。
- ・一般的なレベルの内容より突っ込んだものだった。
- ・未知の国 ミャンマー。あまり知られていないし報道もされない所なので興味深く拝聴できた。また、現場、その国の中からの報告も興味深かった。
- ・私たち日本人のもつ仏教信仰も 再度見直してみるべきかと 今更ながら思わせてくれた。
- ・仏教国としてタイとはどう違うのか興味が沸いた。
- ・本を読んだだけではわからないことをお聞きすることができ興味深かった。
- ・ミャンマーについて本を編集したいので。
- ・人間関係の原理が非常に面白かったです。

##### あまり興味が持てなかった理由

- ・日本がビルマに学ぶことは何か？
- ・自宅軟禁であっても 定時に演説している時代もあったので。
- ・内容が薄いように感じられる

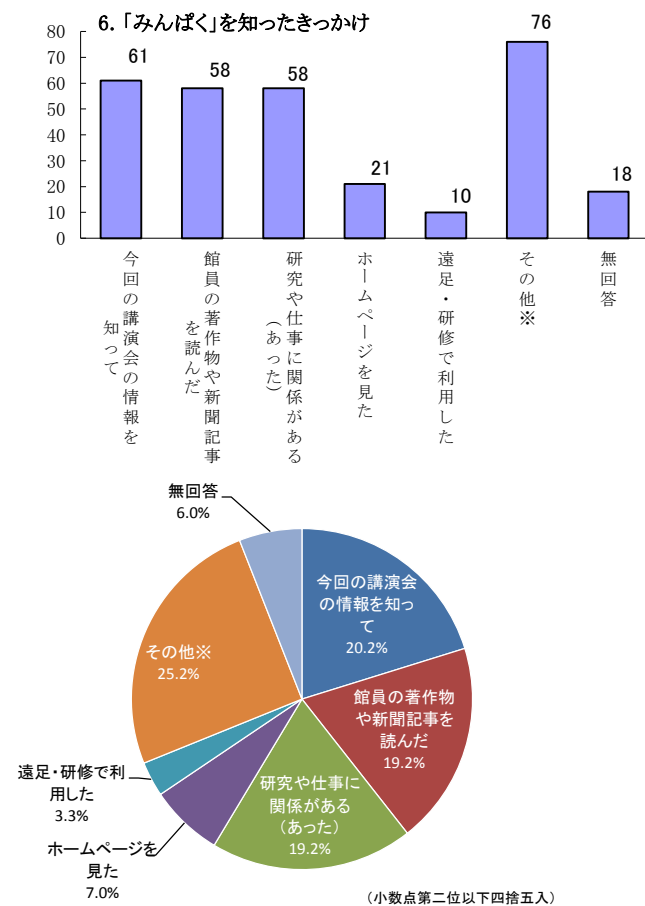
## 5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	48
名前は知っているが行ったことはない	119
行ったことがある	86
友の会会員でもある(あった)	13
その他	5
無回答	6
計	277



## 6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	61
館員の著作物や新聞記事を読んだ	58
研究や仕事に関係がある(あった)	58
ホームページを見た	21
遠足・研修で利用した	10
その他※	76
無回答	18
計	302



### ※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加して	13
友人・知人からの紹介	9
梅棹忠夫	7
訪問による	11
教員の知り合い	3
新聞	2
その他	16
無記入	15
計	76

## 7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

### 【世界の国々について】

- ・サンカ アイヌ 民族学的講演会
- ・ミャンマー(社会をより具体的に、ナツのこと(Nat)、ロヒンギヤ問題)
- ・他のアジア地域各国の地域情勢、文化人類学、歴史・特に弾圧の歴史
- ・中央アジア
- ・東南アジアの仏教信仰のあり方と歴史、仏像彫刻の変遷
- ・北東アジア狩猟民(アイヌ、マブナ)ナラ林文化について
- ・現代モンゴル
- ・現代中国
- ・近国(韓 中 台湾)
- ・在日
- ・北朝鮮の民衆
- ・グアム・サイパン。北マリアナ等の考古学の現状
- ・何故マレーシアのムスリムの方がインドネシアのムスリムより厳格なのか(一般的に)
- ・中国、韓国との付き合い方、歴史的 文化的に
- ・インドに限らず ヒンズー教の現在とこれからの展望について ヨガとの関わり等
- ・現在のカースト制度の実態
- ・インドネシア カンボジア
- ・ブータン
- ・アフリカと人類、経済発展、アフリカ諸国の歴史、文化、民芸
- ・オーストラリアのアボリジニ NZのマオリについて
- ・ブルガリア
- ・ヨーロッパの民族と国々の関係と歴史
- ・「ラオス」の現状
- ・イスラエルの(変遷) 歴史的なもの
- ・ASEAN各国の国民性と現状の経済環境の関係性
- ・アメリカ先住族の過去、現在、未来
- ・太平洋州の国々について

### 【世界の人々の生活】

- ・仏教の各国の変化と現状、社会に生かされている内容
- ・複数国における民族芸能の形式の共通性と相違から見えてくる祖先の姿(各民族の由来)
- ・世界の捕鯨の話
- ・内戦(民族対立)
- ・民族(国家)としての独立に“民主制”がどのように関連するのか

### 【日本について】

- ・日本人論
- ・アジア関係と日本の結びつき
- ・現代日本社会の問題点(特に教育) 教育委員会、教員の立場

### 【その他】

- ・経済 経営に関係のあるもの・海外の関わるもの
- ・民族を中心に各国を扱ってほしい
- ・スポーツ関係(オリンピックに関するもの)
- ・国連はまともに機能しているのか。
- ・映画 鉄道 ほか 公共交通
- ・縄文人と文化に関するもの
- ・牛乳文化に関する内容
- ・盆踊り大会について
- ・父性 母性の時代は地域的変遷にふれるもの
- ・人間の本当に生くべきみちに就いて
- ・民博コレクション 民族など
- ・家族やパートナーシップにつなげたテーマ
- ・人権宣言のあたり
- ・各民族の性生活について
- ・照葉樹林文化論の現在について
- ・人類文化と生き物の関係
- ・昆虫食
- ・民族宗教
- ・民衆 少数民族問題
- ・世界中で戦争をなくすにはどうしたらよいか?
- ・宗教対立の中での文化の保存について

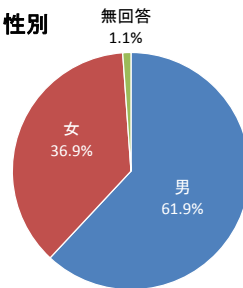


## 8. よろしければお答え願います。

### 8-1 性別

①性別		(名)
①性別	男	166
	女	99
	無回答	3
計		268

### 8-1 性別

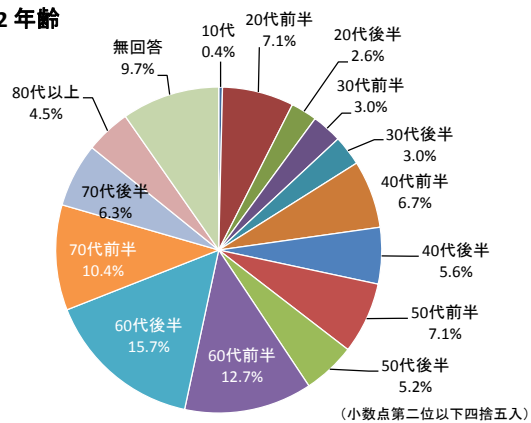


(小数点第二位以下四捨五入)

### 8-2 年齢

②年齢		(名)	割合
②年齢	10代	1	22.8%
	20代前半	19	
	20代後半	7	
	30代前半	8	30.6%
	30代後半	8	
	40代前半	18	
	40代後半	15	36.9%
	50代前半	19	
	50代後半	14	
	60代前半	34	9.7%
	60代後半	42	
	70代前半	28	
	70代後半	17	9.7%
	80代以上	12	
	無回答		26
計		268	

### 8-2 年齢

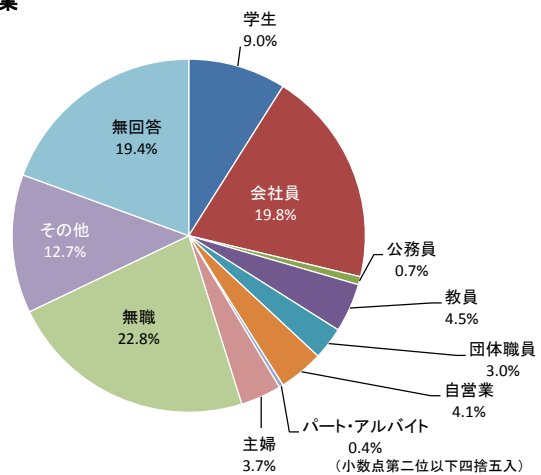


(小数点第二位以下四捨五入)

### 8-3 職業

③職業		(名)
③職業	学生	24
	会社員	53
	公務員	2
	教員	12
	団体職員	8
	自営業	11
	パート・アルバイト	1
	主婦	10
	無職	61
	その他	34
	無回答	52
	計	

### 8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

## 9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

### 【感想】

- ・参加して良かったです。
- ・もっと何回も講演会や セミナーなどをご開催ください。
- ・今日は本当に有益（面白い）な話を伺えて楽しかったです。
- ・大阪へはなかなかいけない。東京の開催はありがたいです。
- ・大変興味深い講演を聴かせて頂きありがとうございました。
- ・本日は 仏教への関心に基づいて参りましたが 国際的問題に言及する話を聞き、大いに学べる場であると思いました。
- ・ビルマ、ミャンマーの表現、現政権にとってもいいように使われているのですか？
- ・日本における仏教の日本人の心にある仏教とはどのように教えたらいいのか、神社、寺に行くとき、何も抵抗感がないのはなぜか。改めて考えさせられた。
- ・何も知らなかったことがわかり目からウロコでした。
- ・田村先生のお考えが大変良かったと思います。
- ・田村さんの最後のコメント、「日本において明治維新の時に新しい概念を作った」これにはしびれました。ミャンマーの民主化はまだまだ先のこと、大変なことですね。でも、今後とも興味を持ち続けることになりそうです。
- ・ミャンマーの普通の人の声を聴いてみたい。
- ・それぞれの先生方の深いウンチクが聞けて知識のためになった。また、ミャンマーの不安定さが理解できた。
- ・東京での活動 期待しています。
- ・夜間開催、出席は初めてのはずです。たまには 日経ホールも訪れたいので良かった。（好都合であった）
- ・このレクチャーにより 世界情勢の一端を知ることができ関係の皆様にお礼申し上げます。
- ・みんばくに今度行きたいと思いました。
- ・国の狭い日本は 多様化としてとても平和な国だとは思っても文化が遅れている国の方が平和な感じも受けとめられました。
- ・非常に西歐的 アウンサンソーチー氏と仏教の関係をしり、興味深かった。
- ・講演、パネルディスカッションとも 時間的に少々短かい、週末昼間など 時間を長めに設定した方が、より深い議論が可能だと思う。
- ・大変有意義であった。
- ・ミャンマーの様々な面を聴くことができて興味が沸いた。時間が短く感じられました。
- ・大変面白かった。登壇した方の話も上手で飽きさせないただ時間が短いのが残念。
- ・ミャンマーは長い実質的な鎖国の後、対外開放に動きグローバル化の流れに身を投ずることになるが、今日話のあった伝統との軋轢や貧富の差の拡大 民族対立、宗教対立の顕在化 どのように収束していくのか心配。
- ・ミャンマーについてより深く知りたいと思った。イスラム教徒の多い東南アジアにおいてビルマの仏教徒の位置づけを考えたいと感じた。
- ・あいにくの雨模様、台風予報で迷いながら参加しましたが 参加できてよかった。ありがとうございました。
- ・スーチーさんのビデオ 貴重な資料を見ることができて有意義でした。
- ・この冬 旅を大阪にしたとき訪問予定でしたが交通事情等から断念した経緯があります。その節、新大阪駅前のホテルの若いホテルマンが貴館の存在を知らなかったことにショックを受けました。来冬も大阪旅行の予定あり、今度はお訊ねする予定です。
- ・伊野先生のお話が大変深いものであった
- ・毎年この講演会を楽しみにしています。これからも続けてください。
- ・軍政から民主化へゆくりと進んでいってほしいと思います。軍政が続いているのに重要だからといって経済関係を取り結ぼうとするのはあまりよくないのではないかと思います。
- ・スーチーさんの政治的なお話と聞いていましたが、精神の革命と政治なのだとわかりました。もっともっと聞きたかったです。ミャンマーの人たちに親近感がわきました。
- ・仕事半分 興味半分 楽しい時間でした。次回も期待しています。
- ・みっちりとした充実の学びの機会を許され感謝 人の地球の歴史を過去から現在までに知る機会を得 ありがたい。
- ・ちょうど先週 ミャンマー旅行に行ったばかり 大変興味深い話が聞けました。
- ・貴重な会を開いてくださり、受講できましたことで今後の糧となるようにいたします。ご尽力に感謝します。
- ・毎年 いろいろな観点から世界を知ることができ楽しみで待ち遠しい。
- ・仏教を基礎とした国の統治が異教徒をどのように平和的に取り込むことができるのか興味が沸いた。
- ・また機会がありましたら 参加したく思っています。（元気でいる間健康で）
- ・約30年ぶりにミャンマーに行ってみたくなった。隣国 宗教は いずれの地域でも課題だと思う。ミャンマーがどう道をつけていくのか見ていきたい。
- ・一昨年までは 異分野の先生も参加されて刺激的な内容でした、民博らしさが感じられました。
- ・改めてミャンマーの現実を多角的に学ぶことが出来ました。
- ・内容も興味深かったのですが、田村先生の写真が大変うつくしく楽しく感じました。スーチー氏の演説映像に添っての伊野先生のご説明はとても迫力がありました。ミャンマーに行ってみようと思いました。
- ・パネルディスカッションではいろいろな角度からの議論があって刺激的でした。
- ・もう外国にもよう行かないので、また珍しい事を教えてほしい。

### 【その他要望】

- ・スタート時間を早くして欲しい。
- ・昼間に開催してほしい
- ・東京、関東でももっと展示会などを行ってほしい。
- ・「みんばく」の展示会を今後とも東京関東でやってほしい。
- ・特別展等 巡回展をしてほしい。
- ・資料を活用し、スライド拡大して 対応した講演の仕方を中心にしてほしかった。
- ・ごあいさつは 代表ひとりです。民族博物館 東京にも創ってほしい。
- ・講演内容を後日ネットで確認できるとよいと思います。
- ・パネルディスカッションをさらに 時間を割いてもよいのではないのでしょうか。もう少し時間があってもよい。
- ・民博は一度だけ 訪ねましたが扱う範囲が広く とても理解するまでとはいきませんでした。もう少ししぼった展示は 難しいのでしょうか。日本に一つだけとは淋しいです。係員の感じがとてもよかったことが思い出されます。
- ・国立民族学博物館 更なる活動、国民へのPRよろしく
- ・ビルマをテーマにするなら在日ビルマ人たちも呼んで彼らを通して学べる事を追求して発展させてほしい。



働き者

と

ナマケ  
モノ

# 「はたらきかた」文化論

2014年3月20日(木)

18:30~20:45(開場 17:30)

オーバルホール

大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビルB1

定員:480名 ●手話通訳あり

参加費:無料(要申込/「参加証」が必要です)

主催:国立民族学博物館・毎日新聞社



みんぱく  
携帯  
サイト



## 「勤勉は身を助く」—フィンランド的処世術からの検証

**講演要旨：**世の中では勤勉が身を助けるといわれている。果たしてそうだろうか。フィンランド人の生活をみてみるとつくづくそう思う。労働時間も作業効率も生産性も決して日本よりすぐれているとは思えない。それでも5時になれば職場をはなれて家族生活に十分時間を使い、確実に1カ月以上の年次休暇を楽しめる。よほど望まないかぎり路上に放りだされることのない彼らにとって、勤勉とは労働観とは何だろうか。



### 庄司 博史

国立民族学博物館 民族社会研究部 教授

専門は言語学・言語政策論、移民言語。近年は、少数言語、特に日本をふくむ各国での外国人コミュニティのもたらした多言語状況とその影響が研究課題。主な共編著に『事典 日本の多言語社会』（2005年、岩波書店）、『講座 世界の先住民民族 ファースト・ピープルの現在 ヨーロッパ』（2005年、明石出版）、『日本の言語景観』（2009年、三元社）などがある。

## 「カツオの狩人」たちの働きぶり—オキにおける漁業労働と生活文化

**講演要旨：**大海原で泳ぐカツオの群れを狩るカツオ一本釣り。カツオの漁撈も3K（きつい、きたない、危険な）労働とされ、常に不確実性をはらんでいる。カツオ漁船で営まれる生活の生産と消費に注目してみると、私たちの生活に比べ特徴的であり、オキ（海上）の論理や漁民の心性が浮かびあがる。日本漁船のほか、異なった文化的背景を持つ漁民が乗り組む混乗漁船でのフィールドワークの成果をもとに検討する。



### 若林 良和

愛媛大学 南予水産センター 副センター長・教授

専門は水産社会学、カツオ産業文化論。国内外のカツオ漁撈や鯨節製造の調査研究に従事し、カツオの価値を問い直すべく、日本カツオ学会を設立し、初代会長を務める。主な著書に『カツオ一本釣り』（1991年、中央公論社）、『水産社会学』（2000年、御茶の水書房）、『カツオの産業と文化』（2004年、成山堂書店）、『カツオと日本社会』（2009年、筑波書房）などがある。

- 17:30-18:30 受付  
 18:30-18:35 開会 若菜 英晴(毎日新聞大阪本社 編集局長)  
 18:35-18:40 挨拶 須藤 健一(国立民族学博物館長)  
 18:40-19:15 **講演1** 庄司 博史(国立民族学博物館 民族社会研究部 教授)  
 19:15-19:50 **講演2** 若林 良和(愛媛大学 南予水産センター 副センター長・教授)  
 19:50-20:10 休憩  
 20:10-20:45 パネル・ディスカッション コメンテータ:平井 京之介(国立民族学博物館 研究戦略センター 教授)  
 司会:樫永 真佐夫(国立民族学博物館 研究戦略センター 准教授)



### 平井 京之介

国立民族学博物館 研究戦略センター 教授

専門は社会人類学、東南アジア研究、日本研究。タイの日系工場、ラオスの仏教寺院、水俣のNGOなどについて調査研究してきた。主な編著書に『微笑みの国の工場』（2013年、臨川書店）、『実践としてのコミュニティ』（2012年、京都大学学術出版会）、『村から工場へ』（2011年、NTT出版）などがある。

申込方法：「3月20日講演会参加希望」と明記の上、ハガキ、FAX、又はメールにてお申し込みください。お申し込みの場合は、次の①～⑤を記載してください。

①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会などのご案内送付希望の有無（次のア～ウのうち希望する記号をア、講演会を含む民博主催の研究会・催物等の案内を希望する/イ、講演会のみ案内を希望する/ウ、いずれの案内も希望しない）

2月下旬より順次参加証を発送する予定です。

- \*1：応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。
- \*2：2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①～⑤をご記載ください。
- \*3：手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用される方は、お席をご用意いたしますので、お申し込みの際に必ずご記載ください。
- \*4：参加申込をいただいた方の個人情報は、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には使用いたしません。

宛 先：〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

●FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先：国立民族学博物館 研究協力課研究協力係

●TEL 06-6878-8209 ●URL <http://www.minpaku.ac.jp/>

注意事項：・会場には必ず参加証をご持参ください。

参加証はお一人様一枚となっております。

・参加証がない方は会場に入れないことがありますのでご注意ください。



・JR大阪駅(桜橋口)から地下道にて徒歩約8分

・阪神梅田駅・地下鉄西梅田駅から徒歩約8分

※車での会場はご注意ください

**国立民族学博物館公開講演会**  
**働き者と、ナマケモノ!?－「はらたきかた」文化論**  
**参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告**

日時:平成26年3月20日(木)18:30～20:45(開場17:30)  
 場所:オーバルホール(大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビル内)  
 天候:雨

	平成25年度	平成24年度	平成23年度	平成22年度
開催日程	平成26年3月20日(木)	平成25年3月22日(金)	平成24年3月16日	平成23年3月18日
開催場所	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール
募集定員 A	480 名	480 名	480 名	480 名
参加申込総数 B	395 名	430 名	624 名	344 名
申込者出席数 C	279 名	303 名	437 名	210 名
当日参加者数 D	24 名	12 名	18 名	19 名
参加者総数 E=C+D	303	315 名	455 名	229 名
申込者出席率※ C/B	70.6%	70.5%	70.0%	61.0%
アンケート回答者数 F	199	227 名	344 名	193 名
アンケート回答率※ F/E	65.7%	72.1%	75.6%	84.3%

過去の公開講演会テーマ

- 平成24年度 公開講演会「なんだ日本の文化って？-芸能からMANGAまで」
- 平成23年度 公開講演会「ヨーロッパと日本の宗教-問いなおされる救済のかたち」
- 平成22年度 公開講演会「自然と向きあう人びとの今-太平洋とアフリカに見る」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

# 平成25年度 大阪公開講演会参加状況内訳

## 参加者方法別参加状況

(名)

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計※	参加者数(b)	(b)／参加者数合計※	出席率(b/a)※
ハガキ	97	23.2%	71	23.4%	73%
FAX	74	17.7%	55	18.2%	74%
メール	206	49.1%	143	47.2%	69%
招待者	13	3.1%	7	2.3%	54%
来館・電話受付	5	1.2%	3	1.0%	60%
当日参加	24	5.7%	24	7.9%	—
合計	419	100%	303	100%	* 70. 6%

\* 申込者のみの出席率 (303-24)÷395

※:小数点第二位以下四捨五入

## 都道府県別参加者状況

(名)

都道府県等	参加者数	備 考
大阪府(大阪市内)	83	(北区、都島区、福島区、中央区、淀川区、東住吉区、住之江区、此花区、外)
その他	116	(堺市、吹田市、豊中市、茨木市、八尾市、東大阪市、寝屋川市、外)
計	199	
兵庫県(神戸市)	24	(東灘区、須磨区、灘区、垂水区、北区、外)
その他	40	(伊丹市、西宮市、宝塚市、明石市、尼崎市、川西市、芦屋市、他)
計	64	
京都府(京都市)	9	(左京区、上京区、西京区、北区)
その他	2	(長岡京市、八幡市)
計	11	
奈良県	14	
和歌山県	2	
滋賀県	3	
関東地方	2	(東京都、神奈川県)
香川県	1	
広島県	2	
岡山県	1	
合計	299	
住所不明	4	
総合計	303	

# アンケート集計結果報告

## 1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
毎日新聞	36
月刊みんぱく2月号	7
月刊みんぱく3月号	2
ポスター・チラシ※1	40
ホームページ・Facebook ※2	17
メーリングリスト	3
案内状をもらって	88
友人や知人から聞いて	17
J:COM情報番組	1
その他 ※3	3
無回答	1
計	215

### ※1 ポスター・チラシを見た場所

みんぱく	4
大学	5
公共図書館	9
役所、公立施設	2
文化センター・生涯学習施設	2
博物館・美術館	3
職場	1
オーバルホール	2
その他	2
無記入	10
計	40

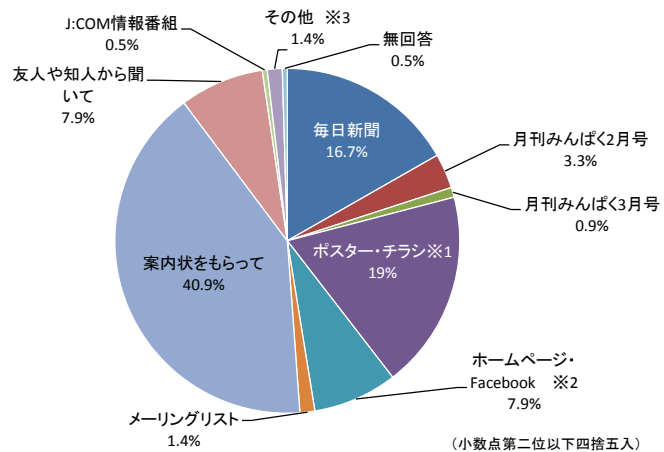
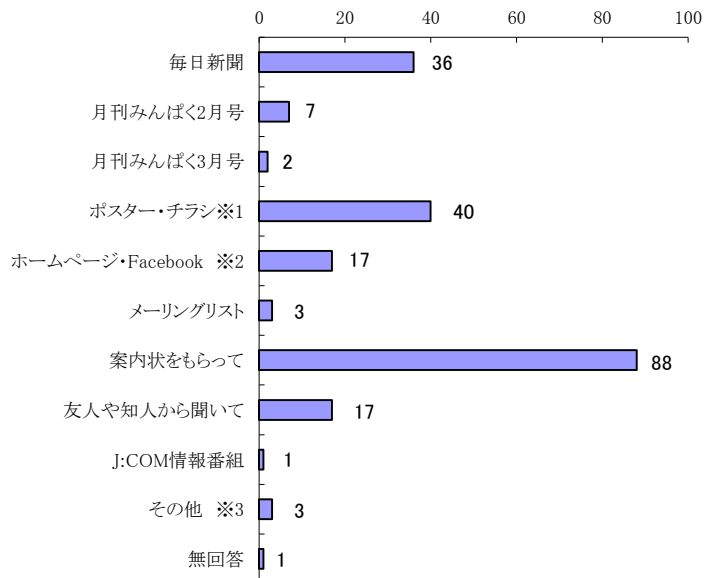
### ※2 ホームページ・Facebook

みんぱく	2
facebook	1
無記入	14
計	17

### ※3 その他

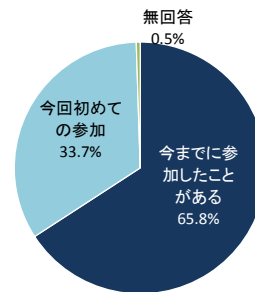
家族から	2
朝日新聞	1
計	3

1. 講演会を何で知ったか



## 2. 公開講演会の参加について

	(名)
今までに参加したことがある	131
今回初めての参加	67
無回答	1
計	199

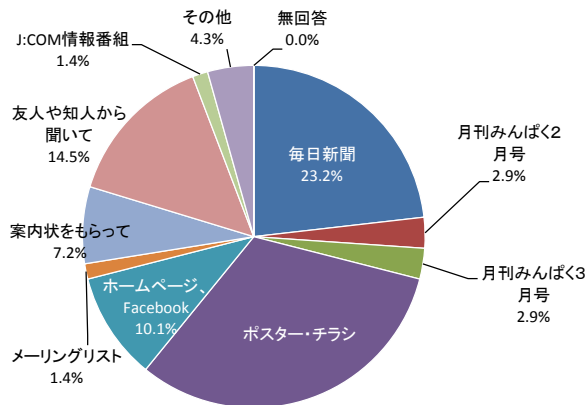
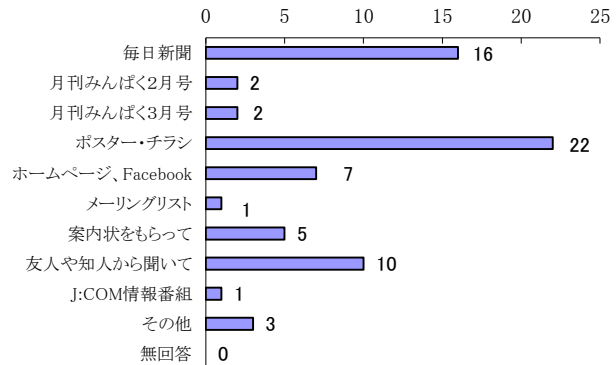


(小数点第二位以下四捨五入)

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

	(名)
毎日新聞	16
月刊みんぱく2月号	2
月刊みんぱく3月号	2
ポスター・チラシ	22
ホームページ、Facebook	7
メールリスト	1
案内状をもらって	5
友人や知人から聞いて	10
J:COM情報番組	1
その他	3
無回答	0
計	69

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか

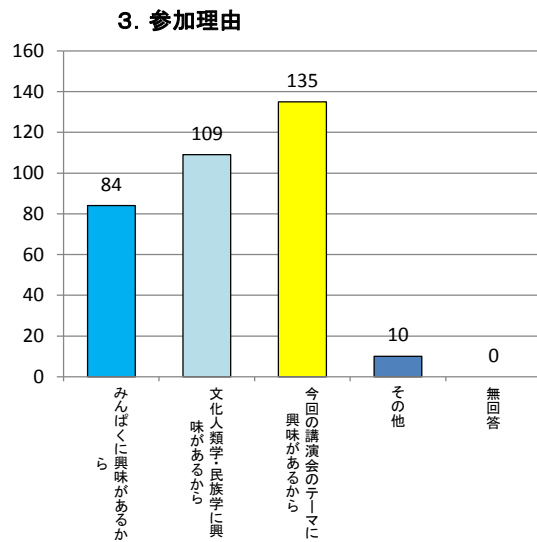


(小数点第二位以下四捨五入)



### 3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

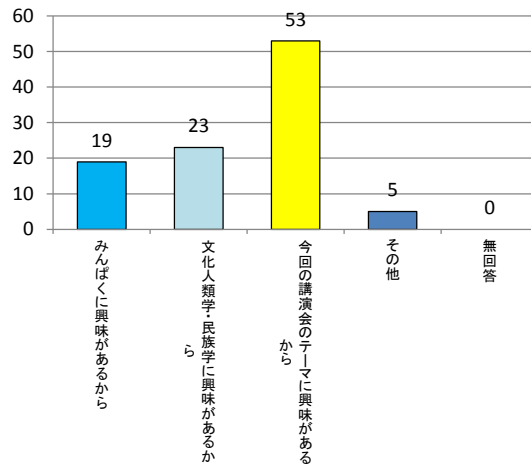
(名)	
みんなくに興味があるから	84
文化人類学・民族学に興味があるから	109
今回の講演会のテーマに興味があるから	135
その他	10
無回答	0
計	338



### 【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

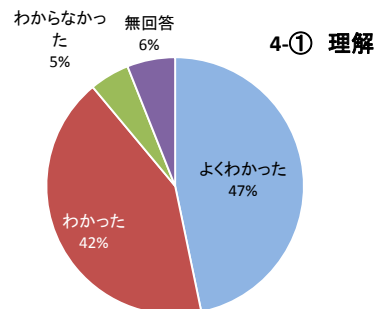
みんなくに興味があるから	19
文化人類学・民族学に興味があるから	23
今回の講演会のテーマに興味があるから	53
その他	5
無回答	0
計	100

### 【参考】初参加者の理由



#### 4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

(名)		
①理解	よくわかった	93
	わかった	84
	わからなかった	10
	無回答	12
計		199
②興味	大変興味深かった	77
	興味深かった	91
	あまり興味をもてなかった	19
	無回答	12
計		199



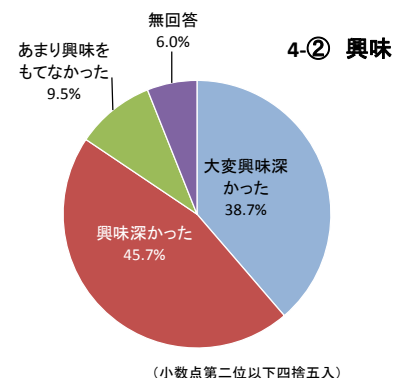
#### ①の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

##### よくわかった、わかった理由

- ・解かりやすく話され日本との違いが大変よくわかった。
- ・実体験をもとにした話であり大変よく理解できました。
- ・講演者が楽しみながら研究し、現地でもに生活し、実態を調べているという感じ、よく分かりました。
- ・現地での実体験の説明がくわしく、普段接する機会のない別世界での話は興味深く大変よかったです。
- ・働くことの意味を考えているので、とても面白く拝聴した。
- ・日本との比較、ホットな話題との関連性があったから。
- ・フィンランドを例に話されたが、これによってこれまで疑問に思っていた事の一部がよく分かった。
- ・「日本の労働観が世界の常識ではないはず」という思いがあったので、その考えを肯定できるような内容であり新たな価値観を得ることができて良かった。
- ・適切なコメンテーターの補足でよく理解できました。
- ・スライドもあり、話も簡潔で分かりやすかった。
- ・写真や実体験のお話から様子がよく伝わってきた。
- ・特に講演1はお話の運び方が明瞭でシンプルな気付きがあり「わかった」と感じました。
- ・パワーポイント使用で視覚的にも理解しやすかった。
- ・言葉づかい 話の切り口 感情等が良かったので頭に入りやすい。
- ・取り扱うテーマ(地域性)が対比的であり 興味深いです。
- ・講演者のまとめ方がお上手でした。
- ・講師の話し方が大変よかったです。
- ・体験された方の報告(2件とも)で インパクトがあった。
- ・プロジェクトが分かりやすかった。

##### わからなかった理由

- ・もっと違ったきりくちでの話があるのではと思った。
- ・フィンランドの話は時間が短かったので あまりよく分からなかった。
- ・結論的にまとまっていないように感じた
- ・私には意図、狙いが伝わりにくかった
- ・もう少し実例(具体的な)が知りたかった
- ・働き方は分かったが 文化論がよく分からなかった。その働き方を支える(働き方に通ずる)文化や考え方にもっと焦点をあててほしかった。



#### ②の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

##### 大変興味深かった、興味深かった理由

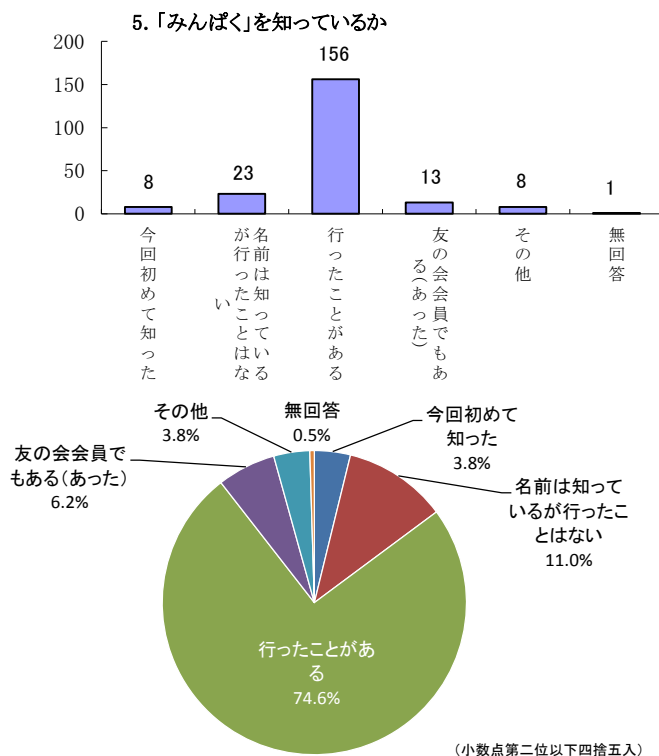
- ・迫力のある楽しいお話でした。
- ・変わった視点からの講義で楽しかった。
- ・人生における労働の価値観の違いが新鮮だった。
- ・漁船の話を開けるのはめずらしい。
- ・カツオ狩りの生活ぶりがよく分かる。先生の話し振りが良かった。
- ・大学生の子どもがいます。卒業後どのような働き方を選択するか、親としてアドバイスする参考にしたいと思いました。
- ・フィールドワークが面白そうだった。
- ・フルタイムで働くことが難しい自分が一人でもやっつけられるヒントがあるかもと思ったのです。タイの話が大変面白かったのですが、駆け足で残念でした。季刊民族学読み直します。
- ・フィンランド人の働き方と日本人の違いについて面白く聞いた。カツオ漁についてほんとうに珍しく興味深く聞いた。
- ・タイ人の価値観について大変興味を沸きました。
- ・フィンランドの一般国民の働き方に対する考え方に興味を覚えた。
- ・国の経済状況がそう違わないのに働き方が大変違うのはなぜかに関心があった。
- ・日本のサラリーマンの働き方、働かされ方をどう評価されているのか聞きたい。
- ・普段知ることのない人々の生活についてお話をきくことで働き方に対する様々なとらえ方ができると感じました。
- ・フィンランドがすきなので また 人材ビジネスに携わっているので はたらきかたの話は興味深かった。
- ・震災や職と教育の関連性については特に知りたかったことなので。
- ・カツオ漁師というTVでは漁場の苦労などを時たま見、口にする魚ですので 船内の生活空間など興味深かったのですが もうすこし 突っ込んでほしかった。
- ・フィンランドの勤勉に関する意識、また、カツオ漁師にまつわるエピソードが非常に興味深かったです。
- ・教育と食という分野はもともと関心の深い分野。新味のある分野が好奇心を満足させてくれた。

### あまり興味が持てなかった理由

- フィンランドの道徳的基盤は何なのか。
- 2つの論題に対して関連性が見えなかった。
- おもしろいと感じなかったから。
- 客観的な情報よりフィールドワーク調査で見た聞いた生々しい光景が声の方が説得力があると思う。
- もうちょっと深掘りしてほしい。思いのほか表面的だった。
- 主旨に対する鋭い言及が少なかったように思います。
- 大筋をイメージして話を展開されたが、もっと追究した話が欲しかった。
- 興味深いがこの分野は結論付けるのがむずかしいか？

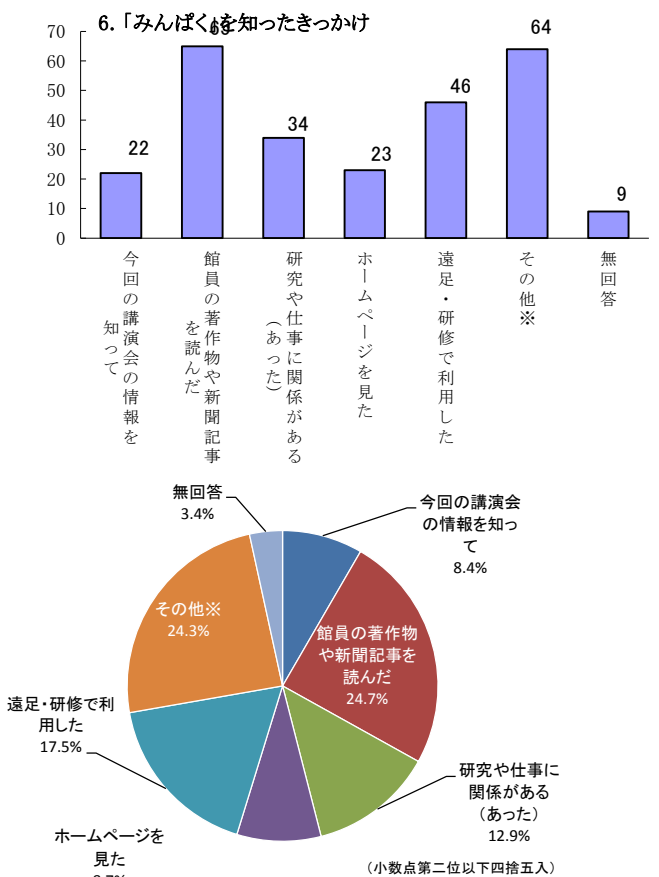
5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	8
名前は知っているが行ったことはない	23
行ったことがある	156
友の会会員でもある(あった)	13
その他	8
無回答	1
計	209



6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	22
館員の著作物や新聞記事を読んだ	65
研究や仕事に関係がある(あった)	34
ホームページを見た	23
遠足・研修で利用した	46
その他※	64
無回答	9
計	263



※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加して	7
友人・知人からの紹介	10
訪問による	12
教員の知り合い	4
新聞	3
その他	14
無記入	14
計	64

## 7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

### 【世界の国々について】

- ・ミャンマー
- ・各地のシャーマニズム
- ・太平洋諸国に関する研究
- ・人種問題(アジア内で日本の立場は?)
- ・各国のセクシャルマイノリティと社会の関係
- ・地域ごとの「文化」について
- ・日中韓の文化の根源を探り、東アジアで共存する、民族の未来につなげる企画

### 【世界の人々の生活】

- ・イスラムの暮らし(一日、年間行事) 礼拝 食事 言語の習得法
- ・発展途上国(アジア、アフリカ、中南米)の高齢者の支え方、精神的満足度は?
- ・ワールドミュージック 宗教
- ・漁村社会、日本、アジア、北欧
- ・海外の育児について(日本が問題にしていることについて問題にしているのかそうでないのか)
- ・民族における死生観、葬儀の違いなど。
- ・民族による「生きがい」の価値観の違い
- ・各地の家族(特に女性・子ども)の暮らし方
- ・紛争のない世界になるには?
- ・北欧の暮らし、ヨーロッパの余暇の過ごし方
- ・世界の先進国の「はたらきかた」について
- ・アフガンや中国、その他での少数民族の暮らし。どのように守るのか。
- ・国際紛争
- ・途上国へのまなざしについて 特にアジア アフリカ

### 【日本について】

- ・日本の文化と異文化との比較
- ・国内外の葬送の地域の差
- ・日本のオタク文化と世界のオタク文化の違い
- ・日本列島(北海道より沖縄)の縄文弥生古代における統一(大和朝)が確立するまでの各地の生活様式の違いなど融合と様子
- ・日本人は、脱農耕民族化が必要か? 経済的グローバル化と狩猟民族化は関係があるのか?
- ・「日本の中の多文化」について
- ・沖縄
- ・アイヌ文化民俗

### 【その他】

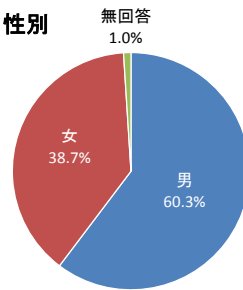
- ・精神病、精神障害の世界のとらえ方、新しいリハビリ、世界の精神病院、精神化医療
- ・教育、教育方針の考え方
- ・食文化、食材
- ・祭り、民族音楽
- ・言語、宗教
- ・人口減、GDP減は減退なのか?
- ・文化とは
- ・ジェンダーの役割(セクシャルマイノリティ的視点)
- ・文化(美術、音楽、芸術(文楽、フィルハーモニー)を廃止していく行政の問題
- ・日本の偽装、世界の偽装—今昔物語、ライセンス・食品。緑地、作曲をはじめ昨今のうんざりする各分野での偽装について
- ・住まい文化
- ・民族スポーツ
- ・研究者の歴史とテーマの重厚な紹介(澁澤敬三「だるま展」)
- ・交通発展史(鉄道の歴史)世界
- ・物事の認知の仕方の違い、分析など
- ・生活を考え直すヒントになるようなテーマ
- ・コミュニケーションの取り方
- ・動物生体
- ・結婚

## 8. よろしければお答え願います。

### 8-1 性別

①性別		(名)
①性別	男	120
	女	77
	無回答	2
計		199

### 8-1 性別

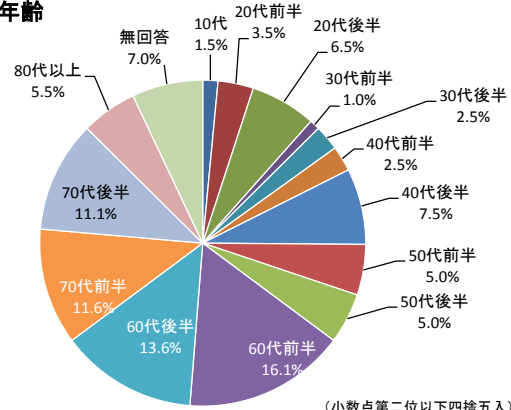


(小数点第二位以下四捨五入)

### 8-2 年齢

②年齢		(名)
②年齢	10代	3
	20代前半	7
	20代後半	13
	30代前半	2
	30代後半	5
	40代前半	5
	40代後半	15
	50代前半	10
	50代後半	10
	60代前半	32
	60代後半	27
	70代前半	23
	70代後半	22
	80代以上	11
無回答	14	
計	199	

### 8-2 年齢

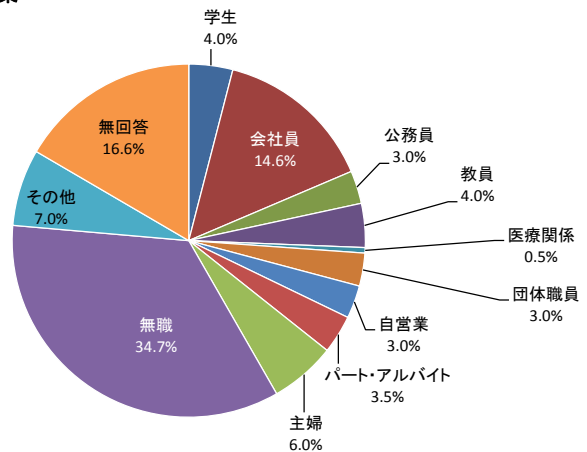


(小数点第二位以下四捨五入)

### 8-3 職業

③職業		(名)
③職業	学生	8
	会社員	29
	公務員	6
	教員	8
	医療関係	1
	団体職員	6
	自営業	6
	パート・アルバイト	7
	主婦	12
	無職	69
	その他	14
	無回答	33
	計	199

### 8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

## 9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

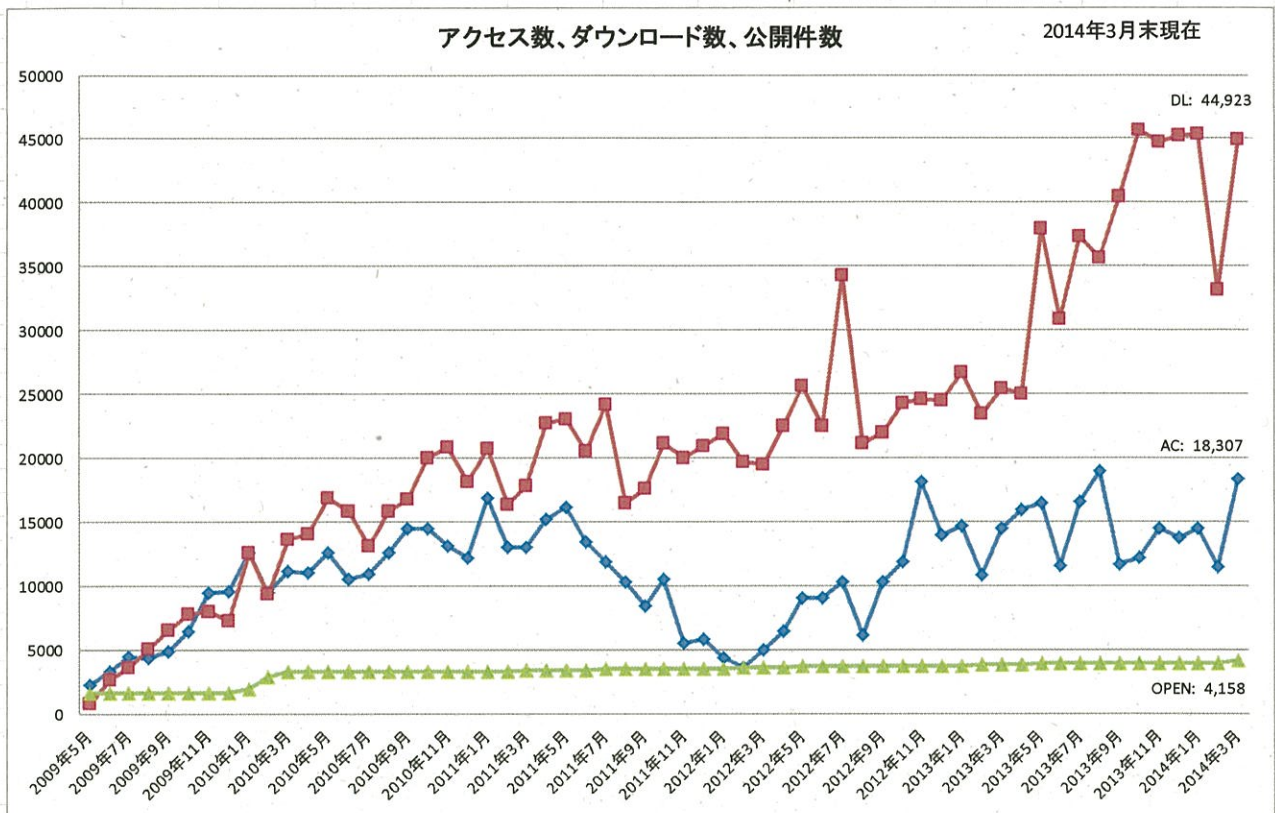
### 【感想】

- ・今 私のような若者(会社員、フリーター、どちらも)みな この事を思っていると思います。この働き方ということもそうですが、生きる上で何を優先するのか価値観を考え直す必要があると思うし、また社会が 会社が押しつけてではなくもっと若者が求めるものを受け入れられるようになると少しずつ変わる気がしました。
- ・もっとじっくり時間をかけてお話を聞きたかったほど、面白い内容でした。こんな世界がある中で、じゃ日本はどうしたら働き方をもっと良くできるかについての議論も聞いてみたかったです。
- ・パネルディスカッションも含め面白い内容でした。時間が短かったくらいです。
- ・自分にとって「仕事とは何か、どんな働き方をしたいか」を考えたいと思う。またフィンランドのような働き方、仕事をしたいと思っても 日本の社会では 難しい。その上でどうしたいかを再度考えたい。
- ・無料かつ土産もいただき、興味深い話も伺えお得です。紙袋もパスケースもすごくかわいい、ありがとうございました。
- ・毎年(4回目)聴講させていただき、興味深く勉強させていただいているので、今後もつづけていただけるよう希望します。
- ・また働き方に関してやってほしいです。
- ・国民全体の知的レベル向上に寄与願いたい。(知の解放)
- ・みんなく紹介ビデオ上映が 多彩で深く興味が惹かれる内容で先進的だと思った。
- ・時間を延長してでも話をもっと聞きたかった。
- ・映像など使ったわかりやすい発表でした。
- ・フィンランドの話は 大阪府知事、前大阪市長、民間人区長に聞かせてやりたい。
- ・また 次回講演会には 行きたい。
- ・労働とサカナの話なども聞いてみたい。あるいは、森や孤独と労働に対する感性との関係についても知りたい。カツオ漁船の男の欲望の話をもっと聞きたいと思いました。
- ・自分がはたらきもの？ナマケモノ？と自問自答しています。
- ・働き方を文化的にとらえることが面白かった。
- ・働くということが文化人類学あるいは社会文化学という学問になるということは面白いですね。
- ・一言で働くといっても多様性があり 一面だけでとらえるものではない。(良い点もあり、問題点もある)人間の受け止め方 奥深さ など 考えさせられた。
- ・35分の内容としてはよく理解できました。フィンランド人の働き方の仕事の成果との関係をもっと聞きたいと思いました。
- ・新たな知識が増えて面白かった。
- ・フィンランドに行きましたが労働の価値観まで考えなかった。「カツオの狩人」も未知の世界のこと。二つのテーマを通して働くことの中味が少しわかりました。
- ・見方が変われば、理解度も変わる、多角的にものをみるくせをつけなければだめですね。
- ・フィンランドへ行ってみたい。
- ・安定した福祉国家ときびしい働き方と両極端の働き方が世の中にはあると思った。
- ・カツオ漁について考えたこともなかったのととても興味深かったです。
- ・最後のディスカッションがよかった。国別の「はたらく」ことへの考えをもっと知りたい。
- ・研究者の眼で見た観察 素晴らしいと思った。
- ・テーマと内容の結びつきが更になれば更に興味深い中味になったと思います。
- ・教育が如何に重要か 義務教育だけでなく 国民全体のレベルアップを痛感しました。
- ・勤勉さでは日本もと思うが、夫々の国の価値観によって その考え方も異なる点が面白かったです。
- ・日本では他民族の「働く」理由などわからないので、他国の日本式労働の事例は興味深かった。
- ・みなさんよく研究なされていて おもしろいパネルディスカッションでした。働けることに感謝すればよいですね。
- ・以前より世界の労働観に興味があった為、集中して講演を聞くことができた。労働と子どもの育ちへの影響も興味深かった。
- ・価値観や概念の問題を例と併せて展開されるので 自分の生活、人生観に大きくかかわると思えました。面白いだけでは自分の考え方にいかせると思いました。
- ・研究者の眼で見た観察 素晴らしいと思った。

### 【その他要望】

- ・4月からのみんなく映画会 実質有料になるのが残念です。
- ・客席がフラットで画面が見えにくい。
- ・演者が顔の向きを変える毎に音声のレベルが変わる。卓上マイクよりピンマイクの方がよい。
- ・聴衆の中に画面が変わる都度 写真を撮る人がいて後ろの人には迷惑。⇒禁止しては？
- ・ホール内 少し寒かったです。
- ・スクリーンが低く資料がみえにくい

資料13. 学術情報リポジトリ





### III 平成 25 年度研究戦略センター・スタッフリスト

■平成 25 年度研究戦略センター・スタッフリスト

塚田 誠之 [つかだ しげゆき] センター長・教授

岸上 伸啓 [きしがみ のぶひろ] 教授

關 雄二 [せき ゆうじ] 教授

野林 厚志 [のばやし あつし] 教授

平井 京之介 [ひらい きょうのすけ] 教授

樫永 真佐夫 [かしなが まさお] 准教授

丹羽 典生 [にわ のりお] 准教授

三尾 稔 [みお みのる] 准教授

伊藤 敦規 [いとう あつのり] 助教

河合 洋尚 [かわい ひろなお] 助教

菅瀬 晶子 [すがせ あきこ] 助教

加賀谷 真梨 [かがや まり] 機関研究員

山本 睦 [やまもと あつし] 機関研究員